

袖ヶ浦市埋蔵文化財
発掘調査報告書第20集

千葉県袖ヶ浦市

中六遺跡第16次発掘調査報告書

千葉県袖ヶ浦市

中六遺跡第16次発掘調査報告書

—蔵波地区宅地造成に伴う埋蔵文化財調査—

スエヒロ建設株式会社
有限会社 勾玉工房 Mogi

2013

スエヒロ建設株式会社
有限会社 勾玉工房 Mogi



1. 調査地遠景 南西から



2. 調査地遠景 東から

千葉県袖ヶ浦市

ちゅうろ
中六遺跡第 16 次発掘調査報告書

—蔵波地区宅地造成に伴う埋蔵文化財調査—

スエヒロ建設株式会社
有限会社 勾玉工房 Mogi

2013

例 言

1. 本書は、袖ヶ浦市教育委員会の指導のもと、有限会社勾玉工房 Mogi（以下、「勾玉工房」と略す。）が実施した、蔵波地区宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、袖ヶ浦市蔵波字中六 1259 番地 20 他に所在する中六遺跡、調査コードは SG013 である。本書では事業対象地の本調査が第 16 次調査にあたるため、中六遺跡 (16) と呼称している。
3. 発掘調査は、平成 24 年 7 月 23 日から同年 9 月 25 日まで実施した。整理作業を平成 24 年 9 月 26 日から平成 25 年 2 月 28 日まで、勾玉工房が行った。
4. 発掘調査及び整理作業・報告書作成の担当は次のとおりである。

調査担当：大越直樹（勾玉工房）、調査員：石山 啓（同）

整理作業及び報告書作成は大賀 健（勾玉工房）・大越・石山・鈴木 徹（同）が担当し執筆を行った。執筆分担は次のとおりである。

I. 序章 第 1 節：西原崇浩（袖ヶ浦市教育委員会） 同第 2 節：大越 同第 3～6 節：石山

II. 検出された遺構と遺物 遺構：大越・石山 遺物：大賀

III. 総括 第 1 節：A. 石山 B. 大賀 同第 2 節：A. 石山 B. 鈴木

出土遺物の基礎整理は佐藤政代・篠原みよ子・根本時子、実測は大賀さつき・阿天坊弥生・大賀庸平・高橋歩美・橋邊明子・佐藤、遺物観察表作成は大賀さつき、写真撮影は鈴木・高橋、製図・編集作業は高橋・岩崎美奈子・森 優里絵・大賀庸平・橋邊が行った（以上、勾玉工房）。

5. 今回の調査に伴う記録図書類や写真類及び出土遺物は、袖ヶ浦市教育委員会で保管している。
6. 本書を刊行するにあたり、スエヒロ建設株式会社をはじめと下記の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

株式会社アートライフ 有限会社カワヒロ産業 菊池健一 鈴木圭子 高城大輔 大和屋袖ヶ浦店 渡辺健二

発掘調査参加者：浅見貴之 安藤 明 石渡 栄 板坂多賀子 梅本鶴平 鎌田望里 北村幹夫 倉重二三子 河野榮美子 駒 早苗

小松俊三 佐藤 弘 鈴木美枝子 関 高江 冨田芳久 富岡千代子 松永偉善 宮前 哲 村山恵子 元二典子

7. 挿図の縮尺は各図に明記した。発掘調査における測量基準点の設置は、世界測地系第 IX 系に即し、方位は座標北とした。また標高は東京湾平均海面高度 (T.P.) を使用し、単位は cm までとした。
8. 土層説明及び遺物の観察には『新版標準土色帖』2008 年度版（農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。
9. 本書で使用した遺構の略記号は以下のとおりである。

SI：住居跡 FP：炉穴 SK：土坑・陥穴 SB：掘立柱建物跡 SA：柵列

10. 挿図中のスクリーントーン及び記号は以下に示すとおりである。

- ・縄文土器の断面のドット (■) は胎土に繊維を含むことを表している。
- ・遺構図に示す「K」とは攪乱を示す。
- ・竪穴住居跡の図面上に記載する (— 数字) とは深さを示す。ただし、床面図面は床面からの計測値、掘り方図面は掘り方底面からの計測値を記載している。

遺構図面  …火床面  …硬質面範囲  …被熱範囲 (断面)

 …焼土範囲  …炭化材  …アタリ  …柱痕

● …土器 ■ …石製品 ▲ …鉄製品

遺物図面  …赤彩  …鉄製品 (断面)

11. 遺物観察表の法量単位は cm、重量単位は g である。法量に付した () は復元値、<> は残存値を示す。
12. 遺物写真は原則として実測図と同じ縮尺で掲載した。ただし、古墳時代以降の土器の写真については、器形・調整痕の明瞭なものを選出し、縮尺は 2/5 で掲載した。

目 次

例言

I . 序章

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査経過	1
3. 遺跡の立地と周辺の遺跡	2
4. 調査及び整理作業の方法	5
A. 発掘調査	5
B. 整理作業	6
5. 調査の沿革	6
6. 基本層序	8

II . 検出された遺構と遺物

1. 縄文時代	8
A. 炉穴	8
B. 陥穴	10
C. 土坑	12
D. 出土遺物	16
2. 古墳時代以降	39
A. 住居跡	39
B. 掘立柱建物跡	62
C. 柵列	63
D. 遺構外出土遺物	63

III . 総括

1. 縄文時代	64
A. 遺構	64
B. 遺物	64
2. 古墳時代	65
A. 遺構	65
B. 土器	65

挿 図 目 次

第 1 図	中六遺跡周辺地形図	3	第 28 図	遺構外出土石器 (1)	34
第 2 図	中六遺跡周辺の主要遺跡位置図	4	第 29 図	遺構外出土石器 (2)	35
第 3 図	小・中グリッド区割図	5	第 30 図	縄文時代遺構外石器出土状況図	37
第 4 図	中六遺跡グリッド区割・調査地位置図	7	第 31 図	縄文時代遺構外礫出土状況図	38
第 5 図	中六遺跡 (16) 全体図	(折図 1)	第 32 図	SI040 (1)	40
第 6 図	基本層序	8	第 33 図	SI040 (2)	41
第 7 図	炉穴 (FP256 ~ 262)	9	第 34 図	SI040 出土遺物	42
第 8 図	SK118	10	第 35 図	SI041・出土遺物	45
第 9 図	SK118 出土遺物	10	第 36 図	SI042 (1)	46
第 10 図	SK130	10	第 37 図	SI042 (2)・出土遺物	47
第 11 図	SK144	11	第 38 図	SI043 (1)	48
第 12 図	SK145	11	第 39 図	SI043 (2)・出土遺物	49
第 13 図	SK146	11	第 40 図	SI044 (1)	50
第 14 図	土坑 (1)	12	第 41 図	SI044 (2)	51
第 15 図	土坑 (2)	13	第 42 図	SI044 出土遺物	51
第 16 図	土坑出土遺物	14	第 43 図	SI045 (1)	53
第 17 図	遺構外出土縄文土器 (1)	17	第 44 図	SI045 (2)	54
第 18 図	遺構外出土縄文土器 (2)	18	第 45 図	SI045 (3)	55
第 19 図	遺構外出土縄文土器 (3)	19	第 46 図	SI045 出土遺物 (1)	55
第 20 図	遺構外出土縄文土器 (4)	20	第 47 図	SI045 出土遺物 (2)	56
第 21 図	遺構外出土縄文土器 (5)	21	第 48 図	SI046 (1)	58
第 22 図	遺構外出土縄文土器 (6)	22	第 49 図	SI046 (2)	59
第 23 図	遺構外出土縄文土器 (7)	23	第 50 図	SI046 (3)	60
第 24 図	遺構外出土縄文土器 (8)	24	第 51 図	SI046 出土遺物	60
第 25 図	縄文時代遺構外遺物出土状況図 (田戸下層式)	31	第 52 図	SB001	62
第 26 図	縄文時代遺構外遺物出土状況図 (子母口式)	32	第 53 図	SA001	63
第 27 図	縄文時代遺構外遺物出土状況図 (浮島式)	33	第 54 図	遺構外出土遺物	63

表 目 次

第 1 表 SK118 出土遺物觀察表	10	第 14 表 遺構外出土石器觀察表 (2)	36
第 2 表 土坑一覽表	13	第 15 表 SI040 出土遺物觀察表 (1)	43
第 3 表 SK132 出土遺物觀察表	15	第 16 表 SI040 出土遺物觀察表 (2)	44
第 4 表 SK142 出土遺物觀察表	15	第 17 表 SI041 出土遺物觀察表	45
第 5 表 SK149 出土遺物觀察表	15	第 18 表 SI042 出土遺物觀察表	47
第 6 表 遺構外出土縄文土器觀察表 (1)	24	第 19 表 SI043 出土遺物觀察表	49
第 7 表 遺構外出土縄文土器觀察表 (2)	25	第 20 表 SI044 出土遺物觀察表	52
第 8 表 遺構外出土縄文土器觀察表 (3)	26	第 21 表 SI045 出土遺物觀察表 (1)	56
第 9 表 遺構外出土縄文土器觀察表 (4)	27	第 22 表 SI045 出土遺物觀察表 (2)	57
第 10 表 遺構外出土縄文土器觀察表 (5)	28	第 23 表 SI046 出土遺物觀察表	61
第 11 表 遺構外出土縄文土器觀察表 (6)	29	第 24 表 古墳時代土師器内訳表	62
第 12 表 遺構外出土縄文土器觀察表 (7)	30	第 25 表 遺構外出土遺物觀察表	63
第 13 表 遺構外出土石器觀察表 (1)	34		

写 真 図 版

Ph (Photo-graph)

1 調査区

1. 調査区西側全景
2. 調査区東側全景

2 縄文時代炉穴・陥穴 1

1. FP256 完堀
2. FP257・258・259 完堀
3. FP260 完堀
4. FP261 完堀
5. FP262 完堀
6. SK118(陥穴) 完堀
7. SK130(陥穴) 完堀
8. SK144(陥穴) 完堀

3 縄文時代陥穴・古墳時代住居跡 1

1. SK145(陥穴) 完堀
2. SK146(陥穴) 完堀
3. SI040 全景
4. SI040 焼土・遺物出土状況
5. SI040 炭化材・遺物出土状況

4 古墳時代住居跡 2

1. SI040 炉
2. SI040 貯蔵穴遺物出土状況
3. SI040 貯蔵穴
4. SI040 掘り方完堀
5. SI041 全景

5 古墳時代住居跡 3

1. SI041 炉断面
2. SI041 掘り方完堀
3. SI042 全景
4. SI042 炉
5. SI042 掘り方完堀

6 古墳時代住居跡 4

1. SI043 全景
2. SI043 焼土分布状況
3. SI043 炭化材・遺物出土状況
4. SI043 炉
5. SI043 掘り方完堀

7 古墳時代住居跡 5

1. SI044 全景
2. SI044 遺物出土状況 (1～5)
3. SI044 炉
4. SI044 掘り方完堀
5. SI045 焼土分布状況

- 8 古墳時代住居跡 6
 1. SI045 全景
 2. SI045 炭化材・遺物出土状況
 3. SI045 遺物出土状況 (1)
 4. SI045 炉
 5. SI045 貯蔵穴
- 9 古墳時代住居跡 7
 1. SI045 掘り方完掘
 2. SI046 焼土・遺物出土状況
 3. SI046 全景
 4. SI046 炭化材・遺物出土状況
 5. SI046 遺物出土状況 (5)
- 10 古墳時代住居跡 8・掘立柱建物跡
 1. SI046 遺物出土状況 (8)
 2. SI046 炉
 3. SI046 貯蔵穴
 4. SI046 掘り方完掘
 5. SB001 全景
- 11 柵列・縄文時代包含層
 1. SA001 全景
 2. 縄文時代早期包含層除去完了状況
- 12 遺構内・遺構外出土縄文土器 1
 - SK118 出土遺物
 - SK132 出土遺物
 - SK142 出土遺物
 - SK149 出土遺物

遺構外出土遺物 第Ⅰ群 沈線文系土器 (田戸下層式)・第Ⅱ群 条痕文系土器 (子母口式)
- 13 遺構外出土縄文土器 2
 - 第Ⅱ群 条痕文系土器 (子母口式)
- 14 遺構外出土縄文土器 3
 - 第Ⅱ群 条痕文系土器 (子母口式)
- 15 遺構外出土縄文土器 4
 - 第Ⅱ群 条痕文系土器 (子母口式)
- 16 遺構外出土縄文土器 5
 - 第Ⅱ群 条痕文系土器 (子母口式)
- 17 遺構外出土縄文土器 6
 - 第Ⅱ群 条痕文系土器 (子母口式)
 - 第Ⅲ群 縄文前期 (浮島式)
- 18 遺構外出土石器
 - 遺構外出土遺物
- 19 古墳時代住居跡出土遺物 1
 - SI040 出土遺物
 - SI043 出土遺物
- 20 古墳時代住居跡出土遺物 2
 - SI044 出土遺物
 - SI045 出土遺物
- 21 古墳時代住居跡出土遺物 3・遺構外出土遺物
 - SI045 出土遺物
 - SI046 出土遺物
 - 遺構外出土遺物

I . 序章

1. 調査に至る経緯

平成 24 年 2 月 21 日付けで、スエヒロ建設株式会社 代表取締役 蛭田憲広から、袖ヶ浦市蔵波字中六 1259 番地 4 の一部の埋蔵文化財の取り扱いについて確認があった。

確認を受けた箇所は周知の埋蔵文化財包蔵地である中六遺跡内にあたることから、平成 24 年 3 月 2 日付け袖教生第 2634 号にて袖ヶ浦市教育委員会 教育長 川島 悟より当該地区内に中六遺跡 3713 m²が所在する旨の回答を行った。

また、隣接地の 1259 番地 20 における埋蔵文化財の取り扱いについても平成 24 年 3 月 6 日付けで確認があった。本確認地についても中六遺跡内に位置していることから、平成 24 年 3 月 10 日付け袖教生第 2740 号にて中六遺跡 378 m²が所在する旨の回答を行った。

その後、事業者と協議を行った結果、記録保存の措置を講じるとの結論に達し、両地点をあわせた 4091 m²の確認調査を実施することとなり、国庫補助事業として平成 24 年 5 月 7 日～同年 5 月 16 日まで行った。

確認調査を実施した結果、縄文時代早期の遺物包含層と古墳時代前期の竪穴住居が展開していることが明らかとなったため、平成 24 年 5 月 22 日付け袖教生第 500 号にて確認調査の結果を通知した。その結果を受けて、遺構の展開が予想される 2,647 m²の本調査を実施することとなった。

本調査を実施するにあたり、袖ヶ浦市教育委員会専門職員が他事業に従事しているため、市教委による発掘調査体制を整備することが困難であったことから千葉県教育委員会及び事業者と協議を重ねた結果、民間調査組織を導入するに至った。導入にあたっては、見積合わせの結果から有限会社勾玉工房 Mogi に決定し、事業者との間で委託契約が締結され、「千葉県埋蔵文化財発掘調査基本方針」（平成 16 年 2 月 25 日教育長裁定）に従い発掘調査が行われるに至った。なお、事業者、民間調査組織、市教委の三者により発掘調査の管理監督に関する協定を締結した。

2. 調査経過

発掘調査

平成 24 年

- | | | | |
|----------|---|----------|--|
| 7 月 23 日 | テント設営・調査区西側の表土除去作業を行う。
現調査開始。 | 24 日 | 調査区東側調査開始。表土除去開始（至 30 日）。 |
| 24 日 | 遺構確認作業を行う。 | 25 日 | 遺構確認作業を行う。 |
| 25 日 | 遺構掘り下げ作業を行う。SI040・041 他、調査開始。 | 28 日 | 遺構掘り下げ作業を行う。SI042～044、SK145・146（陥穴）調査開始。 |
| 27 日 | 調査区西側の表土除去作業を終了する。 | 31 日 | SI045・046 調査開始。 |
| 8 月 9 日 | SK130（陥穴）・FP256～260 調査開始。 | 9 月 20 日 | 調査区東側の航空写真撮影を行う。 |
| 11 日 | 夏期休暇開始。現場の見回りを行う（至 15 日）。 | 25 日 | 袖ヶ浦市教育委員会、西原氏立会いのもと終了確認を行い現地における調査を完了する。テント・機材を搬出する。 |
| 17 日 | 調査区西側の航空写真撮影を行う。 | | |
| 20 日 | 調査区西側の縄文時代包含層の掘り下げ作業を行う（至 23 日）。調査終了箇所から埋戻し作業を行う（至 22 日）。 | | |

整理作業

平成 24 年

9 月 26 日 遺物の水洗い・注記を開始。順次接合を行う。
並行して遺構図面・遺構写真の台帳を作成する。

10 月 3 日 遺物の接合・選別を行い、遺物台帳を作成する。
遺構図面のデジタルトレースを開始する。

5 日 遺物実測、採拓を開始する。

9 日 袖ヶ浦市教育委員会西原氏・桐村氏と、中間検
査及び報告書作成についての打ち合わせを行う
(於：同教育委員会)

15 日 遺物実測図のデジタルトレースを開始、並行し
て遺物観察表を作成する。

11 月 7 日 西原氏来訪。整理作業の進捗状況の確認、報告書
作成についての打ち合わせを行う（於：勾玉工房
研究所）。

19 日 遺構図面の修正、並行して原稿の執筆を開始する。

12 月 10 日 遺構写真のデジタル処理を行い、写真図版を作成
する。

平成 25 年

1 月 8 日 報告書の編集作業を開始する。

2 月 8 日 報告書を印刷業者へ入稿する。

28 日 教育委員会へ報告書を納品する。

3. 遺跡の立地と周辺の遺跡

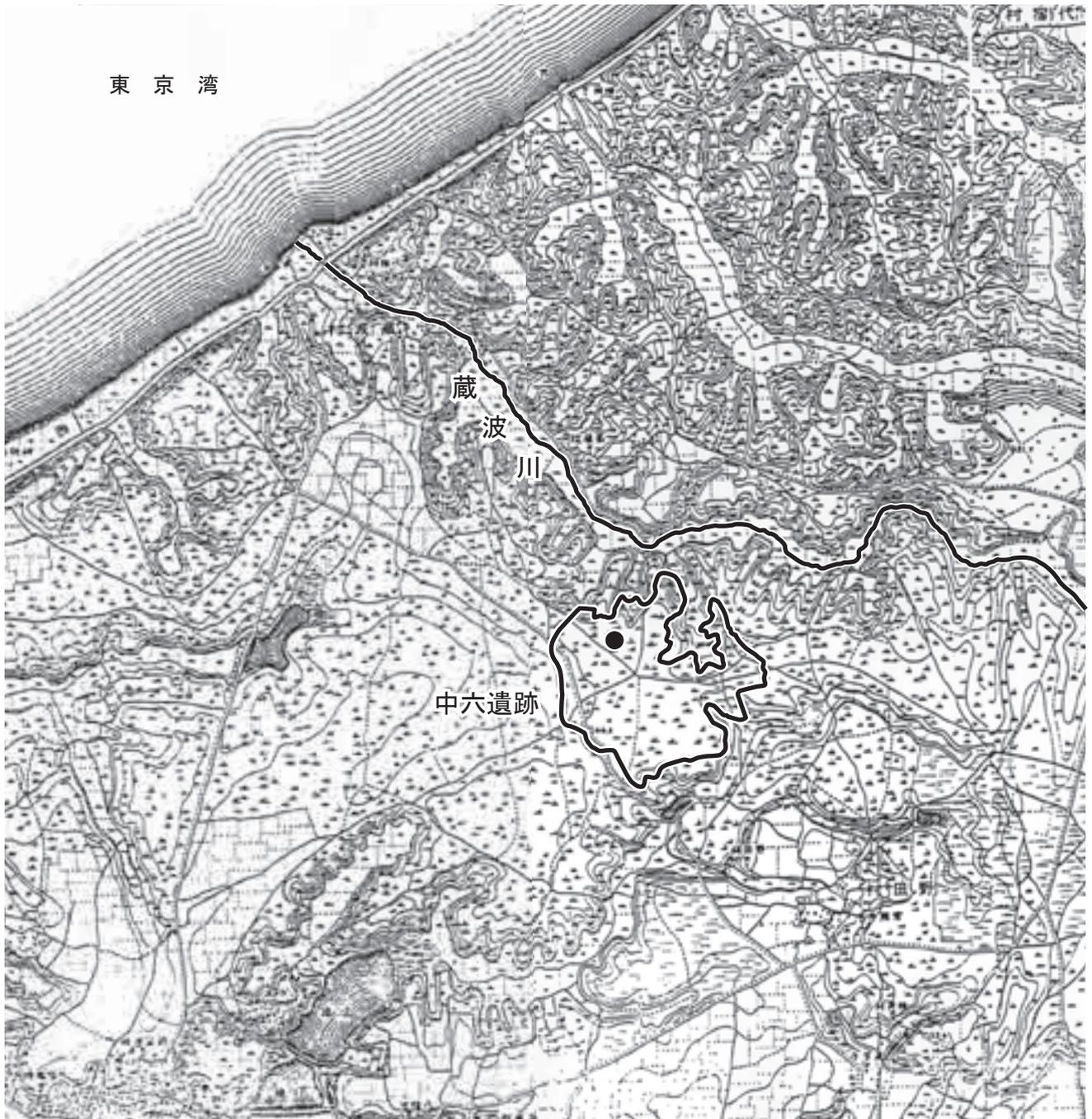
袖ヶ浦市は、千葉県西部の東京湾東側沿岸のほぼ中央に立地する。市域の大半は東京湾に面した平地と小櫃川に代表される河川に沿った沖積地からなる低地、袖ヶ浦台地の丘陵という 2 つの自然環境からなる。湾岸沿いには国道 16 号線と JR 内房線が通り、工業地帯が形成され、丘陵にかけては宅地が開発されている。

中六遺跡は袖ヶ浦台地の中央部、標高 40 ～ 45 m の平坦部に位置する。遺跡は台地上に展開し、範囲は約 1 km 四方に及び大谷古墳群と鎌倉街道を内包する（※ 1）。本調査地点は台地の西端部であり、埋立て造成前の海岸線までは約 2 km を測り、北側へ約 0.5 km の地点では蔵波川が東京湾へ向かい西流する。このため、当該地域は水源と海産物の確保に適しており、遺跡が密集する立地となっている。

本遺跡より蔵波川下流にあたる寺ノ上遺跡や、小櫃川を南側に臨む台地の南端にあたる根形台遺跡群・山谷遺跡・墓山遺跡・西原遺跡・文協遺跡では縄文時代早期の所産、もしくは陥穴が確認されている。小櫃川までは、現状では台地南端より 2 km 以上の距離があるが、早期末葉から前期にかけての縄文海進を考慮すると漁場である小櫃川と海岸線の様相が現状と大きく異なることが推測される。中六遺跡の近隣の早期の遺跡では角山遺跡・伊丹山遺跡があげられ、台地の縁端よりやや内陸に進んだ蔵波川上流域においても正源戸 B 遺跡などから同時期の所産が確認された。

古墳時代前期では蔵波川流域に根崎遺跡・西久保下遺跡・神田遺跡・籠松 A 遺跡・犬久保遺跡・美生遺跡群・堂庭山遺跡など、遺跡が密に分布する。小櫃川を望む台地南端とその近辺においても同時期の遺跡が分布し、縄文時代早期の遺跡として先に挙げた根形台遺跡群・山谷遺跡・西原遺跡・文協遺跡が古墳時代前期の遺跡であり、他には台山遺跡・雨久保遺跡・神野台遺跡が該期の遺跡として挙げられる。蔵波川・小櫃川によって形成された沖積低地が農産の拠点となり、集落が展開したものである。同時にこの 2 つの河川流域には多くの古墳群が存在し、生産と居住が河川支配から成り立つ社会構成が示される。

※ 1 中六遺跡の過去の調査地点については「第 5 節 調査の沿革」にて別途述べることとする。



第1図 中六遺跡周辺地形図 (S=1 : 25,000) 柏書房『明治前期関東平野地誌図集成』より



第2図 中六遺跡周辺の主要遺跡位置図 (S=1 : 30,000)

国土地理院発行 25,000分の1地形図「奈良輪」「姉崎」「木更津」「上総横田」より

4. 調査及び整理作業の方法

A. 発掘調査

(1) 調査グリッドの設定

基準点測量は、袖ヶ浦市教育委員会が確認調査（第15次調査）を実施するにあたり、同市が設置した基準点を用地方眼杭とした。測量方法は世界測地座標IX系に基づき、国土交通省公共測量作業規定2級に適合したものである。

調査グリッドの設定は、中六遺跡調査において、遺跡全体を包括するように世界測地座標IX系に基づく基準点測量により900m方眼で覆い、内部を20m方眼・大グリッドで分割し、北西角を起点として東西方向をAからZ及びAAからASまで、南北方向を0から44とした。大グリッドの起点は、遺跡全体図（第4図）に示すところである。さらに20m方眼の大グリッド内部に4m方眼の中グリッド及び2m方眼の小グリッドを設定した。

中グリッドの設定は、大グリッド20m枠を4mで25分割したもので、北西角を基点としてaaからeeとし、縄文時代遺物包含層の取り上げ時の基準とした。小グリッドの設定は、大グリッド20m枠を2mで100分割したもので、北西角を基点として00から99とした。遺構実測時の基準とした（第3図）。

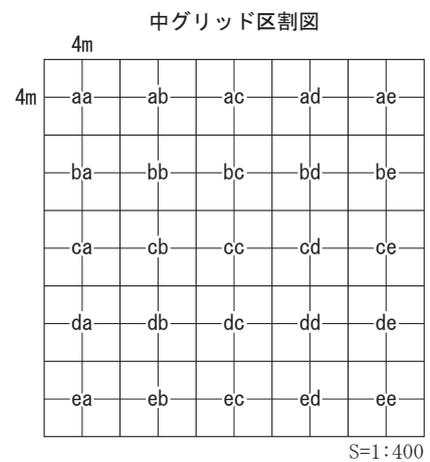
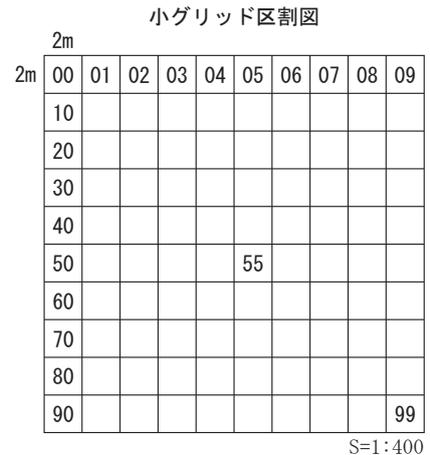
(2) 調査の方法

表土除去は遺構確認面となるソフトローム層上面までをバックホーを用いて実施し、試掘結果に基づき縄文時代早期包含層及び、ソフトローム層まで掘り込まない住居跡の存在が予想される部分に関しては、耕作土のみを除去した。遺構検出作業は鋤簾を用いて行った。確認された遺構は平板測量で遺構確認図（1/100）を作図した。遺構番号は調査順に付し、遺構の種類別表記は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の表記に準じ、陥穴に関してはSK表記を付した。なお、遺跡全体で遺構番号を通し番号としているため、本調査の遺構番号はSKは118～149、FPは256～262、SIは040～046までを付した。

遺構の精査は、遺構に土層観察用ベルトを設定し、移植鍬を用いて掘り下げを行った。記録は遺構平面図は平板測量にて作図し、状況に応じて遣り方測量を行い補足した。遺構覆土より出土した遺物の出土状況はレベル及び平板を用いて3次元位置の記録をした後、取り上げた。包含層中より出土した遺物に関しては中グリッド単位で取り上げた。平面図、土層断面図、エレベーション図の縮尺は20分の1を基本とし、必要に応じて10分の1で作図した。

写真による記録は、35mmモノクロ及びカラスライド、60mm×70mmの中型カメラ、デジタルカメラを用いて行った。

出土遺物は遺構ごとに遺物収納箱に収納し、遺物台帳を作成した。



第3図 小・中グリッド区割図

B. 整理作業

遺構図面は図面台帳を作成した後、Adobe Illustrator を用いてデジタルトレースを行い、図面修整はトレース図に対し実施した。

遺物は水洗の後、インクジェットプリンタを用いて注記を行い、セルロース系接着剤・エポキシ系樹脂を用いて可能な限り接合した。接合が完了した遺物のうち、実測対象となるものを抽出し、手実測を実施した。一部の石器については、デジタルカメラで撮影し、Illustrator を用いて写真実測を行った。実測の際は遺物の欠損状況に留意し、意図的な欠損や欠損後の使用が確認された場合は欠損形状を表現した。実測図には Illustrator を用いてデジタルトレースを行った。

遺物の写真撮影にはデジタルカメラを用いた。撮影は各遺構・時期を代表する遺物、器形・調整痕が写真上観察できる遺物を抽出して行った。

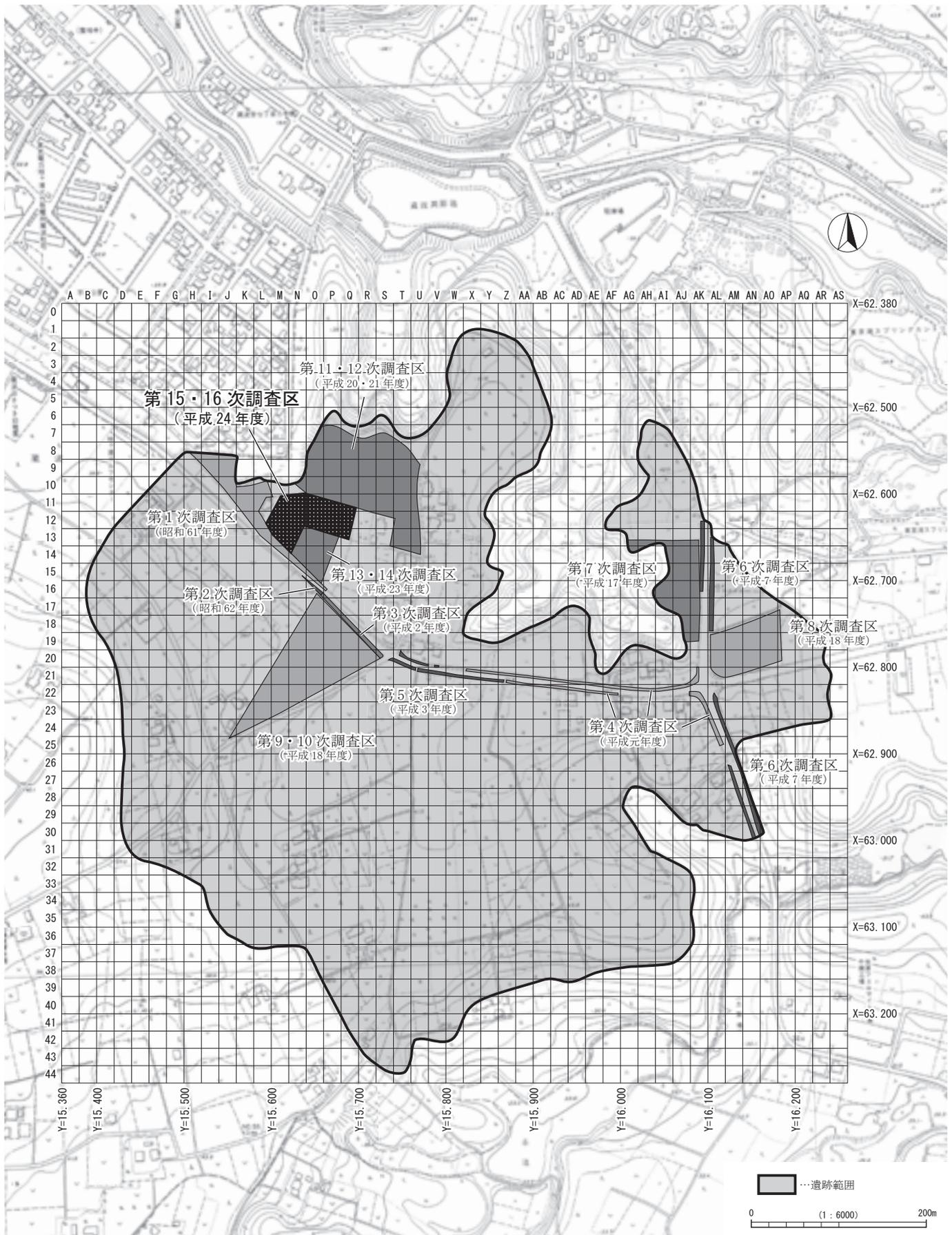
報告書の編集には Adobe InDesign を用いて、印刷業者へ入稿するデータまでを作成した。

5. 調査の沿革

中六遺跡の調査は、過去に千葉県文化財センター、君津郡市文化財センター、袖ヶ浦市教育委員会で実施しており、本調査は 16 次調査にあたる。昭和 61 年から現在に至るまで断続的に調査がなされ、本調査区の南側に近接する第 9～14 次調査区では縄文時代早期の炉穴、古墳時代前期の住居跡が多く確認され、内包する大谷古墳群では古墳に伴うと思われる円形周溝状遺構が確認された。南側に近接し、鎌倉街道にあたる県道下の第 2～5 次調査区では炉穴、古墳時代前期の住居跡のほか、道跡が確認された。

そのほか、中六遺跡では旧石器時代の石器、縄文時代の陥穴、弥生時代の方形周溝墓、平安時代の火葬墓、奈良・平安時代と近世の道跡が確認されている。

第 1 次調査	昭和 61 (1986) 年	君津郡市文化財センター	旧石器時代包含層・縄文時代陥穴 4 基・道路 2 条
第 2 次調査	昭和 62 (1987) ～平成 3 (1991) 年	君津郡市文化財センター	古墳時代前期堅穴住居 9 軒・縄文時代早期炉穴 14 基・土坑 46 基・道路 11 条
第 3 次調査			
第 4 次調査			
第 5 次調査			
第 6 次調査	平成 8 (1996) ～9 (1997) 年	千葉県文化財センター	旧石器時代包含層・縄文時代土坑 2 基・弥生～古墳時代溝 5 条・土坑 4 基・奈良平安時代道路跡 1 条
第 7 次調査	平成 11 (1999) 年	君津郡市文化財センター	旧石器時代石器集中地点・炉穴 4 基・方形周溝墓 1 基・溝 2 条・道路 1 条・土坑 16 基
第 8 次調査	平成 17 (2005) 年	袖ヶ浦市教育委員会	土坑 1 基・円墳 1 基・道路 1 条
第 9 次調査	平成 18 (2006) 年	袖ヶ浦市教育委員会	性格不明土坑 7 基
第 10 次調査	平成 18 (2006) 年	袖ヶ浦市教育委員会	古墳時代前期堅穴住居 1 軒・陥穴 1 基・平安時代火葬墓 2 基・時期不明土坑 9 基
第 11 次調査	平成 20 (2008) 年	袖ヶ浦市教育委員会	第 12 次調査にさきがける確認調査
第 12 次調査	平成 20 (2008) ～21 (2009) 年	袖ヶ浦市教育委員会	縄文時代早期炉穴 237 基・縄文時代早期陥穴 6 基・縄文時代早期土坑 27 基・古墳時代前期堅穴住居 26 軒・古墳時代後期円墳・古墳時代前期方墳 2 基・古墳時代後期土坑墓 2 基・古墳時代前期堅穴状遺構 1 基・縄文時代早期遺物包含層
第 13 次調査	平成 23 (2011) 年	袖ヶ浦市教育委員会	古墳時代前期堅穴住居 5 軒
第 14 次調査	平成 23 (2011) 年	袖ヶ浦市教育委員会	古墳時代堅穴住居 3 軒・近世道路状遺構 2 条
第 15 次調査	平成 24 (2012) 年	袖ヶ浦市教育委員会	第 16 次調査にさきがける確認調査

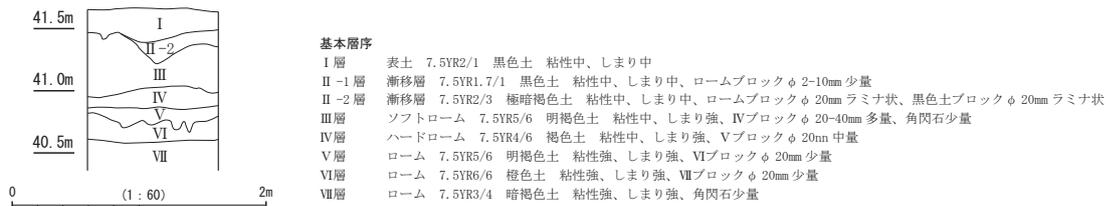


第4図 中六遺跡大グリッド区割・調査地位位置図(S=1:6,000)
 袖ヶ浦市発行 2,500分の1地形図No.13・14・18・19より

6. 基本層序

基本層序は7層に分層された。I層は耕作土であり、表土除去の際に除去した。II層はソフトローム漸移層、III層はソフトローム層である。本調査ではIII層上面を遺構確認面とした。縄文時代包含層はII層が該当し、同層の底部で遺物が検出された。IV層はハードローム層である。VII層は角閃石を含む黒色帯であり、本層序中では相対的に火山灰降下の影響を多く受けている可能性がある。また、III層以下の層では、土が直上の層にブロック状に拡散した状態が看取される。

基本層序ではとらえることはできなかったが、I層とII層の間に灰黄褐色土層が存在し、調査範囲北側に多く確認された。旧耕作土、もしくは火山灰層と判断し、表土除去の際に除去した。



第6図 基本層序

II. 検出された遺構と遺物

本調査では、縄文時代の炉穴7基、土坑31基、古墳時代の住居跡7軒、掘立柱建物跡1棟、時期不明の柵列1列及び縄文時代早期の遺物包含層が確認された。本章では、調査で得られた資料を時代順に種類・形態別に報告することとし、調査を通じて得た知見については第III章で述べる。

1. 縄文時代

本調査で確認された土坑のうち、形態等から同一の性格を持つと判断された土坑については項を設けて報告し、その他の土坑については第C項にまとめ報告する。

A. 炉穴

本調査では炉穴は7基確認され、このうち3基は重複する。本報告では重複する炉穴についてはまとめて掲載する。

FP256 (第7図、Ph.2)

011-93・94 グリッドに位置する。規模は長径92cm×短径64cm、深さ20cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る2層の水平堆積からなる。地山の側面が厚さ2cmほど被熱し、根による攪乱のためか被熱面のしまりは弱い。

FP257・258・259 (第7図、Ph.2)

012-05・15 グリッドに位置する。遺構の形態と土層断面観察から本遺構は3基の炉穴の重複と判断し、調査を進めた。

規模は長径 233 cm、深さ 21 cmを測る。覆土は計 6 層に分層され、FP257 の底部付近にあたる第 2 層と、FP258 の覆土下層である第 2 層からは焼土が検出された。地山は主に FP257 の底部から西側面にわたって最大 7 cm の厚さで被熱硬化する。

FP260 (第 7 図、Ph. 2)

P12-31 グリッドに位置する。規模は長径 69 cm×短径 39 cm、深さ 5 cmである。主軸方位は N-45° -E、覆土は黒褐色土 1 層からなる。地山は底部から側面にかけて厚さ 1 cmほどが被熱し、被熱面のしまりは弱い。

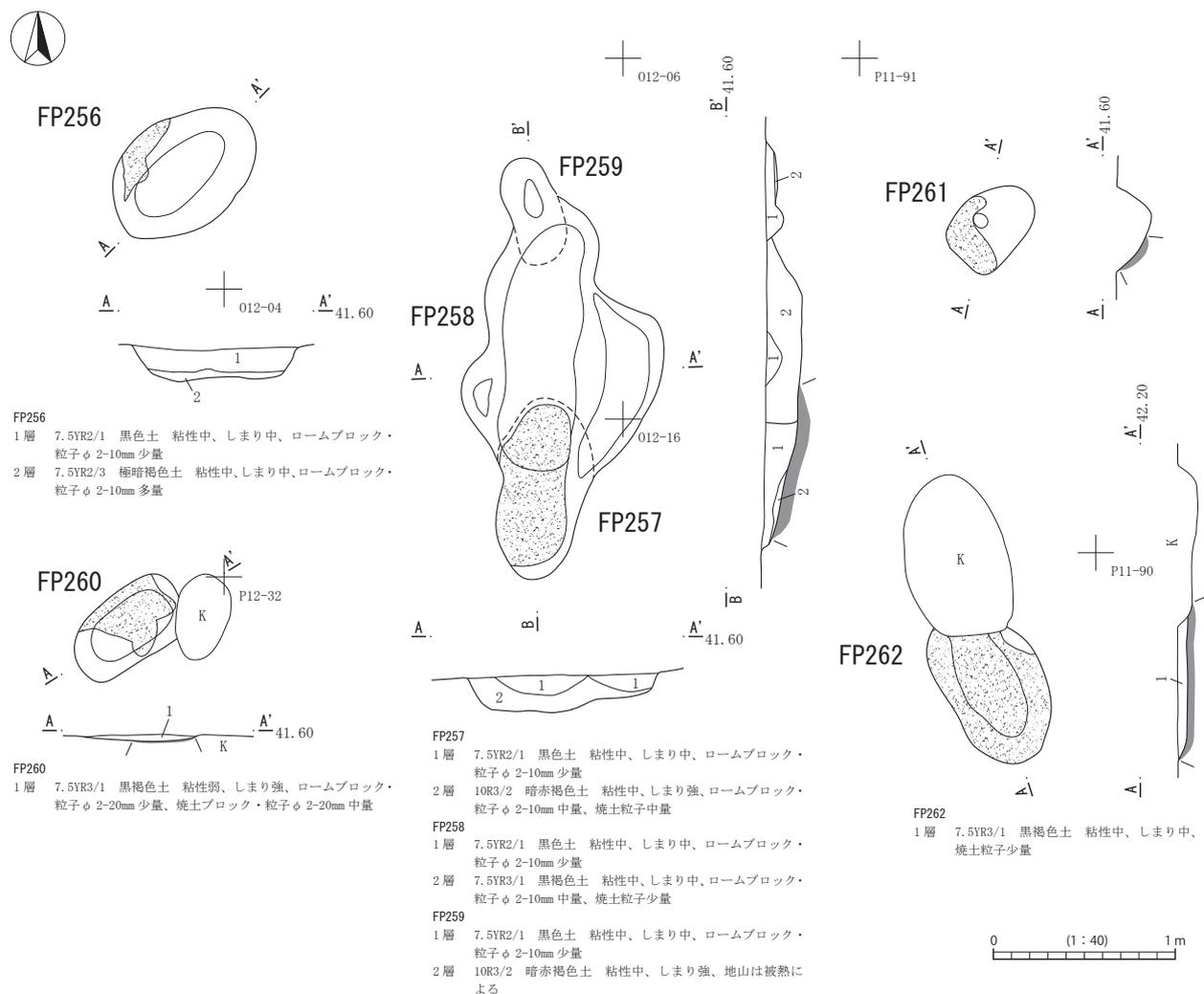
FP261 (第 7 図、Ph. 2)

P11-91 グリッドに位置する。規模は長径 51 cm×短径 37 cm、深さ 19 cmである。主軸方位は N-40° -E、西側面が厚さ 6 cmほど被熱しているが、全体に根による攪乱を受けているため被熱面のしまりは弱い。

FP262 (第 7 図、Ph. 2)

012-99 グリッドに位置する。規模は長径 86 cm×短径 55 cm、深さ 5 cmを測る。主軸方位は N-25° -W、覆土は黒褐色土 1 層からなり、焼土粒子を含む。地山は底部全体が被熱する。被熱面の厚さは 4cm を測り、しまりがあり被熱範囲は明瞭である。

遺物は子母口式と見られる縄文土器片が 25.5g 出土している。



第 7 図 炉穴 (FP256 ~ 262)

B. 陥穴

形態、規模から陥穴と判断される土坑は5基確認された。平面形が長楕円形であり、確認面よりの掘り込みが深いものを陥穴としてとらえた。

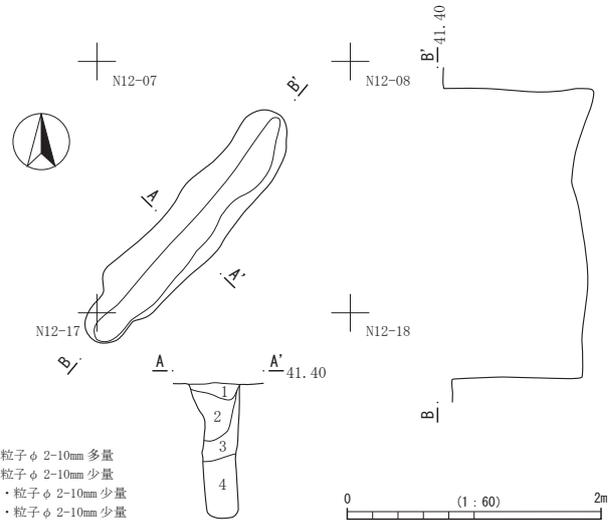
SK118 (第8・9図、第1表、Ph.2・12)

N12-05・06・15・16 グリッドに位置する。規模は上端で長径230 cm×短径40 cm、下端で232 cm×24 cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは78 cmを測る。主軸方位はN-40° -E、覆土は黒色土から黒褐色土に至る4層からなるレンズ状堆積である。

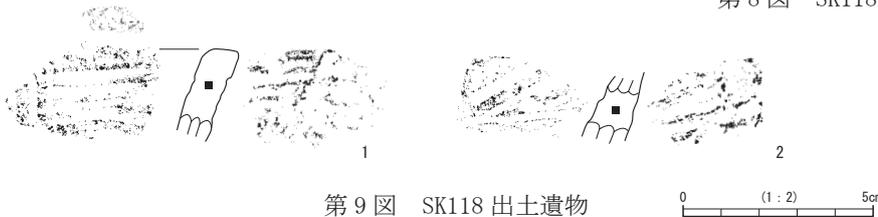
遺物は子母口式の縄文土器片が22.6g 出土している(1・2)。

SK118

- 1層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm 多量
- 2層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm 少量
- 3層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm 少量
- 4層 7.5YR1.7/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm 少量



第8図 SK118



第9図 SK118 出土遺物

第1表 SK118 出土遺物観察表

遺物番号	注記番号	器種	残存	重量	整形・文様の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	一括0001	深鉢	胴部	12.2	口縁部は平坦に面取られる。口唇部に刻みを有する可能性があるが剥落で不明瞭。外面は斜方向の明瞭な条痕。内面は横方向の明瞭な条痕。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子少量。	内面 10YR4/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
2	一括0002	深鉢	胴部	10.4	外面は浅い条痕が横に施文された後斜方向に施文される。内面は横方向のやや深い貝殻条痕が施文。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子少量。極小礫微量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式

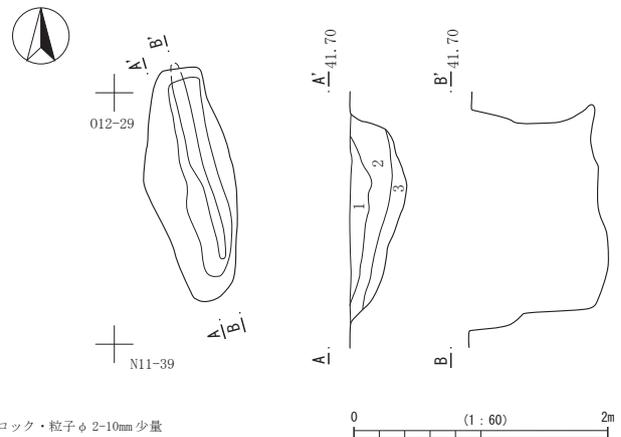
SK130 (第10図、Ph.2)

012-19・29 グリッド位置する。規模は上端で長径237 cm×短径71 cm、下端で160 cm×8 cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは130 cmを測る。主軸方位はN-13° -W、覆土は黒色土から黒褐色土に至る2層よりなる緩やかなレンズ状堆積である。

遺物は子母口式の縄文土器片が8.3g 出土している。

SK130

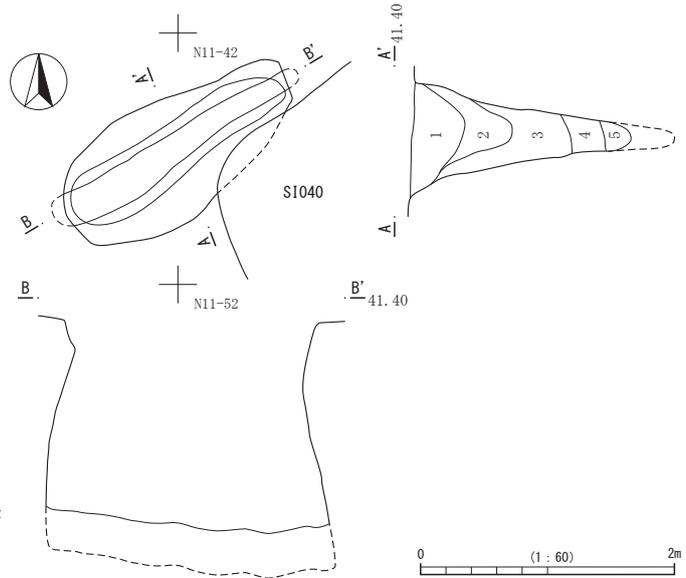
- 1層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm 少量
- 2層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm 中量
- 3層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm 多量



第10図 SK130

SK144 (第 11 図、Ph. 2)

N11-41・42 グリッドに位置する。東側は SI040 と重複し、これに上部を切られる。規模は上端で長径 203 cm×短径 97 cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さ 173 cmまで覆土の掘削を行った。検土杖による調査の結果、本遺構の深さはさらに 35 cmほどが想定された。主軸方位はN-58° -E、覆土は、上層にしまりのあるレンズ状堆積である。



第 11 図 SK144

SK144

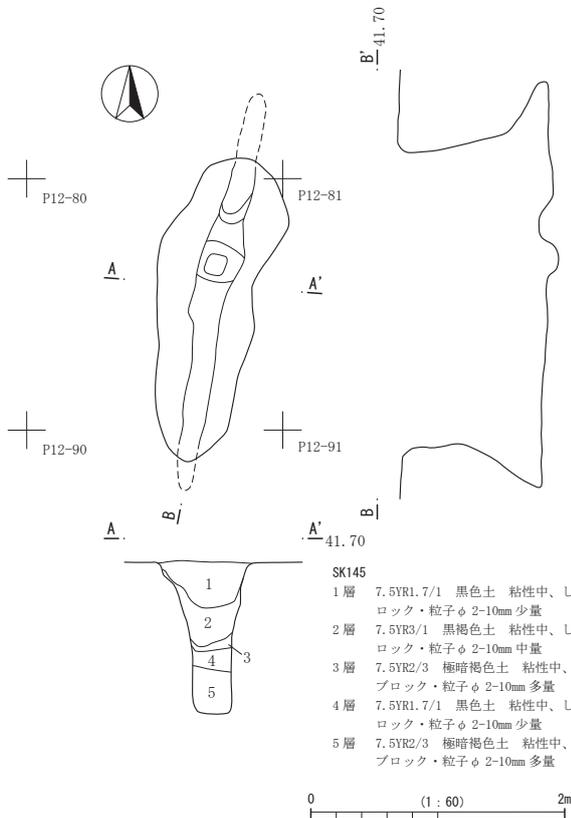
- 1層 7.5YR1.7/1 黒色土 粘性中、しまり強、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量、焼土ブロック・粒子φ 2mm 少量
- 2層 7.5YR1.7/1黒色土 粘性強、しまり強、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量
- 3層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 多量
- 4層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量
- 5層 7.5YR2/1 黒色土 粘性強、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量

SK145 (第 12 図、Ph. 3)

P12-70・80・90・81 グリッドに位置し、SB001 の 4 柱穴間にあたる。規模は上端で長径 248 cm×短径 78 cm、下端で 321 cm× 25 cm、深さ 146 cmを測る。縦断面は末広がり、横断面は漏斗状である。主軸方位はN-11° -E、覆土は黒色土から極暗褐色土の 5 層からなるレンズ状堆積である。

SK146 (第 13 図、Ph. 3)

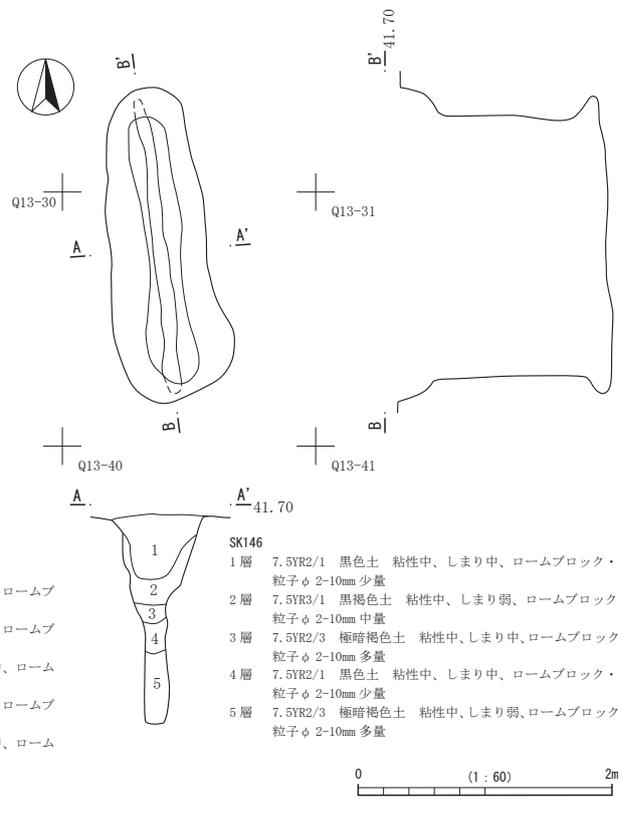
Q13-20・30 グリッドに位置する。上端で長径 245 cm× 75 cm、下端で 235 cm× 10 cmの平面楕円形で深さ 166 cmを測る。主軸方位はN-7° -W、覆土は黒色土から極暗褐色土の 5 層からなるレンズ状堆積である。



第 12 図 SK145

SK145

- 1層 7.5YR1.7/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量
- 2層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量
- 3層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 多量
- 4層 7.5YR1.7/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量
- 5層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 多量



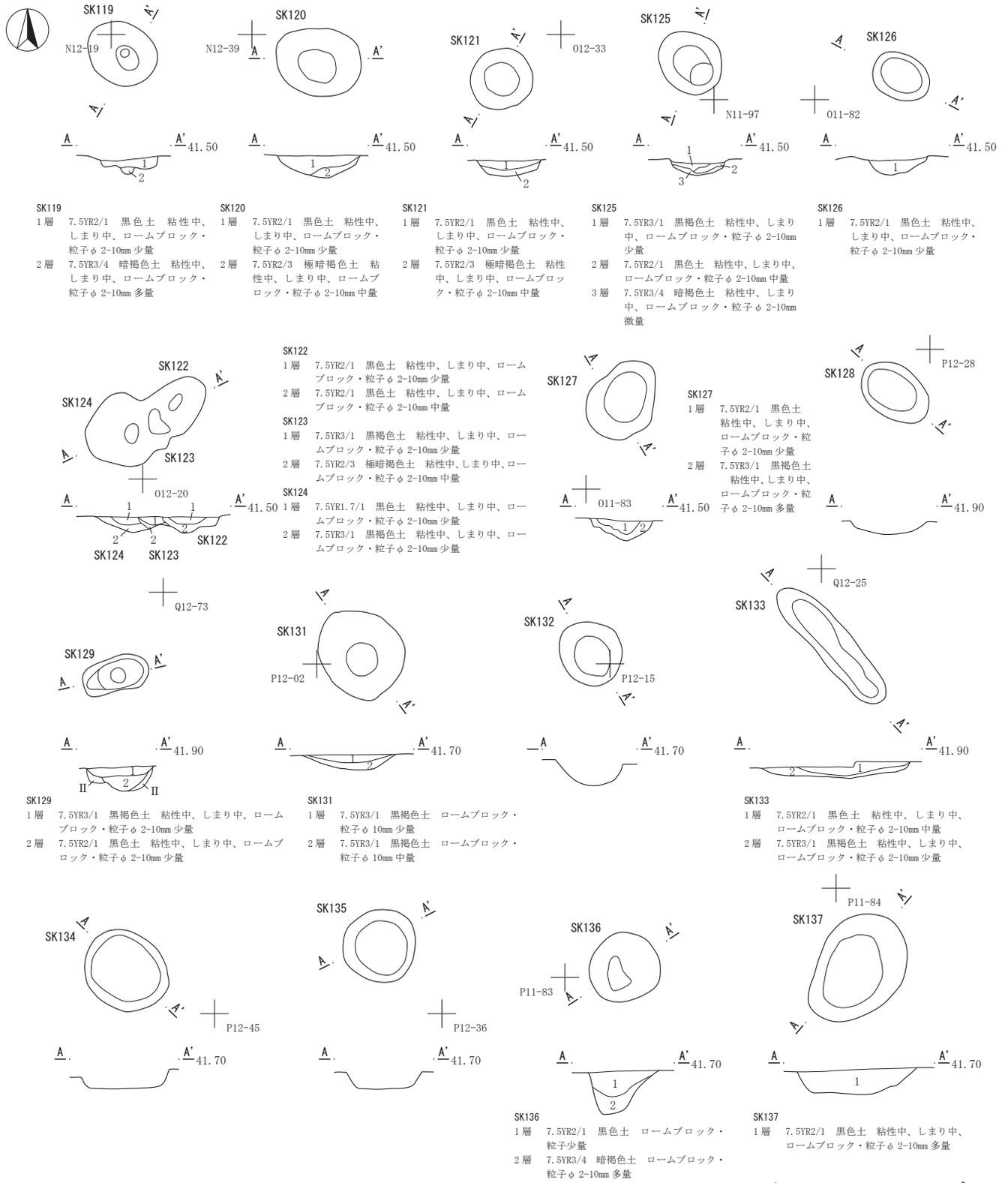
第 13 図 SK146

SK146

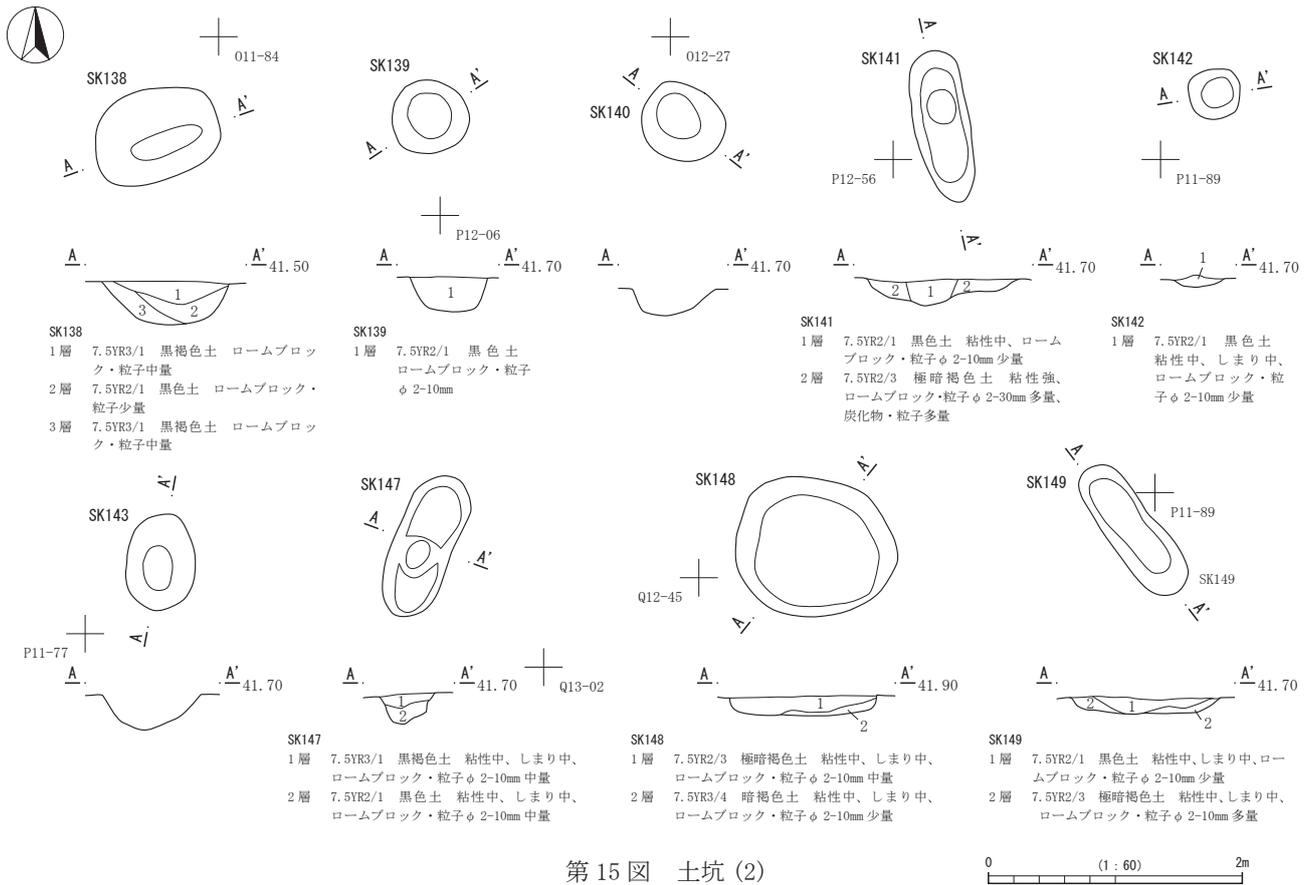
- 1層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量
- 2層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性中、しまり弱、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量
- 3層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 多量
- 4層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量
- 5層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性中、しまり弱、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 多量

C. 土坑

本調査で確認された土坑のうち、前項（陥穴）の分類になじまなかった土坑は27基（うち3基は重複）である。いずれの土坑も形態等から遺構の性格を示す情報が得られなかった。本項ではこれらの土坑について図を示し、位置・規模・所見等については一覧表にて報告する。



第14図 土坑 (1)

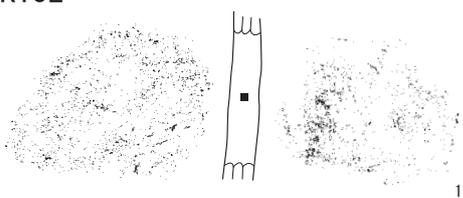


第2表 土坑一覧表

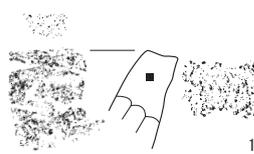
遺構名	グリッド	平面形	規模 (m)			主軸方位	出土遺物	所見
			長軸	短軸	深さ			
SK119	N12-17	楕円形	0.76	0.64	0.21	N-46° -W	-	中央に小ビット状の段を持つ。
SK120	N12-39	楕円形	0.92	0.74	0.25	N-86° -W	-	
SK121	O12-33	不整形円形	0.68	0.65	0.17	N-30° -E	-	
SK122	O12-10	楕円形	(0.52)	0.44	0.21	N-64° -E	-	SK123を壊す。北西側に段を持つ。
SK123	O12-10	不明	0.56	(0.27)	0.14		-	SK122に壊され、SK124を壊す。
SK124	N12-19	不整形円形	0.80	(0.60)	0.18		-	SK123に壊される。
SK125	N11-86	楕円形	0.74	0.63	0.17	N-49° -W	-	
SK126	O11-72	楕円形	0.64	0.48	0.20	N-62° -W	-	
SK127	O11-73	不整形楕円形	0.90	0.64	0.26	N-36° -E	-	
SK128	P12-28	楕円形	0.81	0.56	0.15	N-48° -W	-	
SK129	Q12-72	楕円形	0.71	0.35	0.26	N-78° -E	-	
SK131	P11-92	不整形楕円形	0.98	0.83	0.17	N-51° -W	縄文土器(子母口)計 5.6g	
SK132	P11-93	不整形円形	0.72	0.65	0.28	N-33° -W	縄文土器計 22.7g	
SK133	Q12-25	長楕円形	1.60	0.38	0.19	N-41° -W	-	
SK134	P12-23	楕円形	0.93	0.80	0.22	N-45° -W	-	
SK135	P12-14	不整形円形	0.80	0.77	0.19	N-63° -E	-	
SK136	P11-73	不整形円形	0.74	0.71	0.48	N-56° -E	-	
SK137	P11-84	不整形楕円形	1.27	0.88	0.30	N-39° -E	-	
SK138	O11-83	不整形楕円形	1.01	0.73	0.33	N-71° -E	-	
SK139	P11-95	不整形円形	0.61	0.61	0.28	N-56° -E	-	
SK140	O12-27	不整形円形	0.67	0.59	0.22	N-51° -W	-	
SK141	P12-47	長楕円形	1.22	0.44	0.23	N-10° -W	-	浅い落ち込みに向かい柱痕状の土層断面。
SK142	P11-79	不整形円形	0.41	0.40	0.10	N-82° -E	縄文土器(子母口)計 514.7g	
SK143	P11-67	楕円形	0.77	0.53	0.29	N-12° -E	-	
SK147	Q12-91	長楕円形	1.20	0.46	0.25	N-20° -E	-	
SK148	Q12-35	不整形円形	1.27	1.12	0.17	N-74° -W	-	
SK149	P11-88	長楕円形	1.21	0.38	0.13	N-37° -W	縄文土器計 8.4g	

※陥穴は除く。 ※※規模の括弧は他の遺構と重複した残存規模を示す。

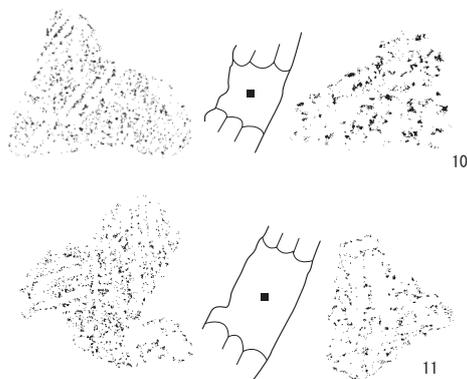
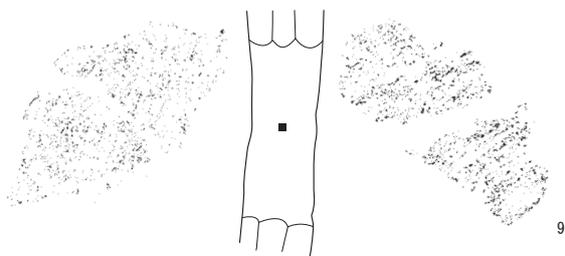
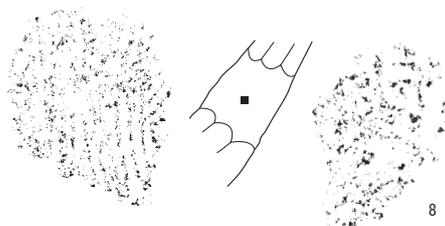
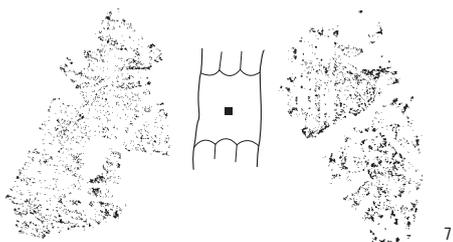
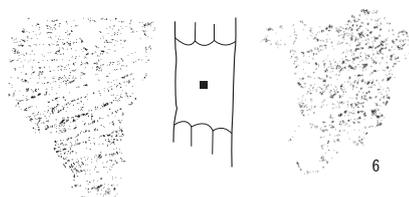
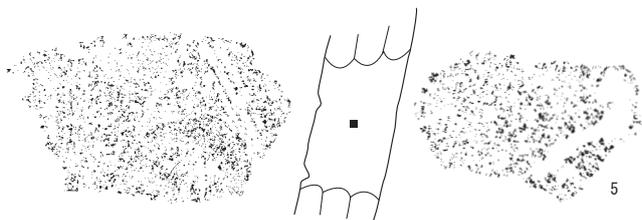
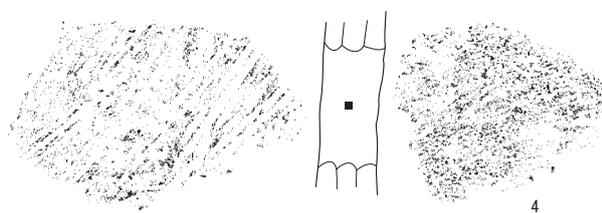
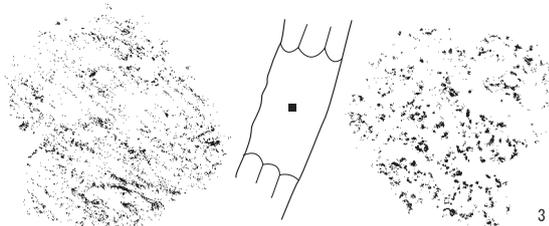
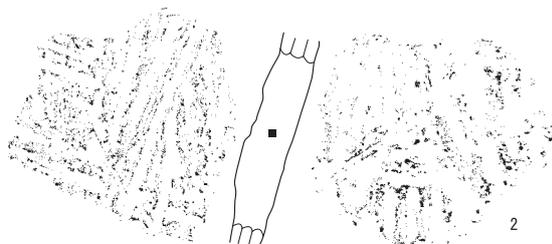
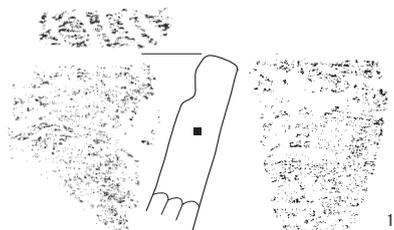
SK132



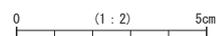
SK149



SK142



第 16 图 土坑出土遺物



第3表 SK132 出土遺物観察表

遺物番号	注記番号	器種	残存	重量	整形・文様の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	0001	深鉢	胴部	22.7	内外面共に無文。	繊維微量混入、白色粒子多い、極小礫少量、雲母微量。	内面 10YR3/1 黒褐 外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好 二次焼成あり	子母口式

第4表 SK142 出土遺物観察表

遺物番号	注記番号	器種	残存	重量	整形・文様の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	0001-1	深鉢	口縁部	26.3	口縁はほぼ直立し、口唇部は平坦に面取りされ、貝殻復縁による刺突列が施される。器面は内外面共に繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子・スコリア微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好 二次焼成あり	子母口式
2	0001-2	深鉢	胴部	49.8	器面には内外面共に横方向の浅い貝殻条痕。	繊維微量混入、白色粒子・スコリア少量、黒色粒子微量。	内面 10YR4/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好 二次焼成あり	子母口式
3	0001-3 トレン チ4	深鉢	胴部	61.5	厚手外面胴部疎らな貝殻条痕。内面は剥落。	繊維微量混入白色粒子・黒色粒子少量。	内面 7.5YR4/3 褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
4	0001-4 トレン チ4	深鉢	胴部	67.2	厚手。外面は縦方向の、内面は横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入白色粒子少量、黒色粒子微量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式
5	0001-5 トレン チ4	深鉢	胴部	81.1	厚手。外面は縦方向の、内縁は横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、黒色粒子少量、白色粒子微量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
6	0001-6 トレン チ4	深鉢	胴部	33.8	厚手。外面は横方向の繊維束による擦痕。内面無文。	繊維微量混入、黒色粒子少量、白色粒子・雲母・スコリア・角閃石微量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
7	0001-7 トレン チ4	深鉢	胴部	44.6	厚手。外面は縦方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子・スコリア少量、白色針状物質微量。	内外面 10YR4/2 灰黄褐	良好	子母口式
8	0001-8 トレン チ4	深鉢	胴部	38.4	厚手。外面は貝殻条痕。内面剥落。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子微量。	内面 10YR4/2 灰黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
9	0001-9 トレン チ4	深鉢	胴部	55.2	厚手。外面は縦方向の、内面は横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、黒色粒子少量、白色粒子微量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
10	0001-10 トレン チ4	深鉢	胴部	24.4	厚手。外面は縦方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子少量。	内外面 10YR4/3 にぶい黄褐	良好	子母口式
11	0001-11 トレン チ4	深鉢	胴部	32.4	厚手。外面は縦方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子微量。	内外面 7.5YR4/4 褐	良好	子母口式

第5表 SK149 出土遺物観察表

遺物番号	注記番号	器種	残存	重量	整形・文様の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	0001	深鉢	胴部	8.4	口唇部は平坦。外面は横方向の浅い擦痕。内面は無文。	繊維微量混入、白色粒子少量。	内面 10YR3/2 黒褐 外面 10YR4/3 にぶい黄褐	良好	子母口式

D. 出土遺物

(1) 縄文土器

本調査で検出された縄文土器は総量で7,198.6gである。時期別の内訳は早期沈線文系・田戸下層式33.1g、同条痕文系・子母口式6,871.6g、前期・浮島式159.4g、不明134.5gである。その大半が縄文時代遺物包含層で検出された。本項に示す遺構外出土の掲載土器は107点である。そのうち、田戸下層式1点(1・33.1g)、浮島式7点(101～107・136.4g)がわずかに混ざるものの、大半は、その特徴である微量の繊維混入から子母口式と判断された。

各遺物の詳細は観察表にまとめて記載し、時期別の遺物分布図は第25～27図に掲載した。

第Ⅰ群 沈線文系土器(田戸下層式)

1は沈線文系田戸下層式土器の胴部破片である。細い斜行沈線が上半に描かれ、下位には太い沈線が横方向に施文される。

第Ⅱ群 条痕文系土器(子母口式)

第1類 2～11は1967年に山内清男により発表された『先史時代土器図譜』において紹介された、棒状工具による刺突を加える土器群である。やや外反する土器と直口縁になるものの双方が見られ、口唇部が平坦に面取された後に棒状工具で口唇部に刺突や刻みを加えている。口唇部への施文方法には、棒状工具の他に貝殻復縁の刺突や、撚糸文によるものが1点がある。他は無文である。

第2類 12～64は繊維を束ねたものにより、貝殻条痕に類似する条線を施文するものである。貝殻肋脈による条痕の様に条線が明確にならず、絡条体による条痕の可能性もある。

第3類 59～63は太い沈線を描くもので、内面にはナデ整形が施される。

第4類 65・66は外面に貝殻条痕が施文され、内面に繊維の束による擦痕が施される資料である。

第5類 67・68は内面に貝殻条痕が施文され、内面に繊維束状の擦痕が観察される。

第6類 69は扁平でやや太い隆帯が貼り付けられている。

第7類 70～77は内外面が無文、もしくはナデや擦痕が施されるのみの資料である。

第8類 78～100は内外面、またはいずれか一面に貝殻条痕が施文されるもので、やや深いものと、浅い貝殻条痕の双方が観察される。口唇部を平坦に面取した後、口唇部に貝殻腹縁の刺突を施す資料もある。

第Ⅲ群 縄文前期後半(浮島式)

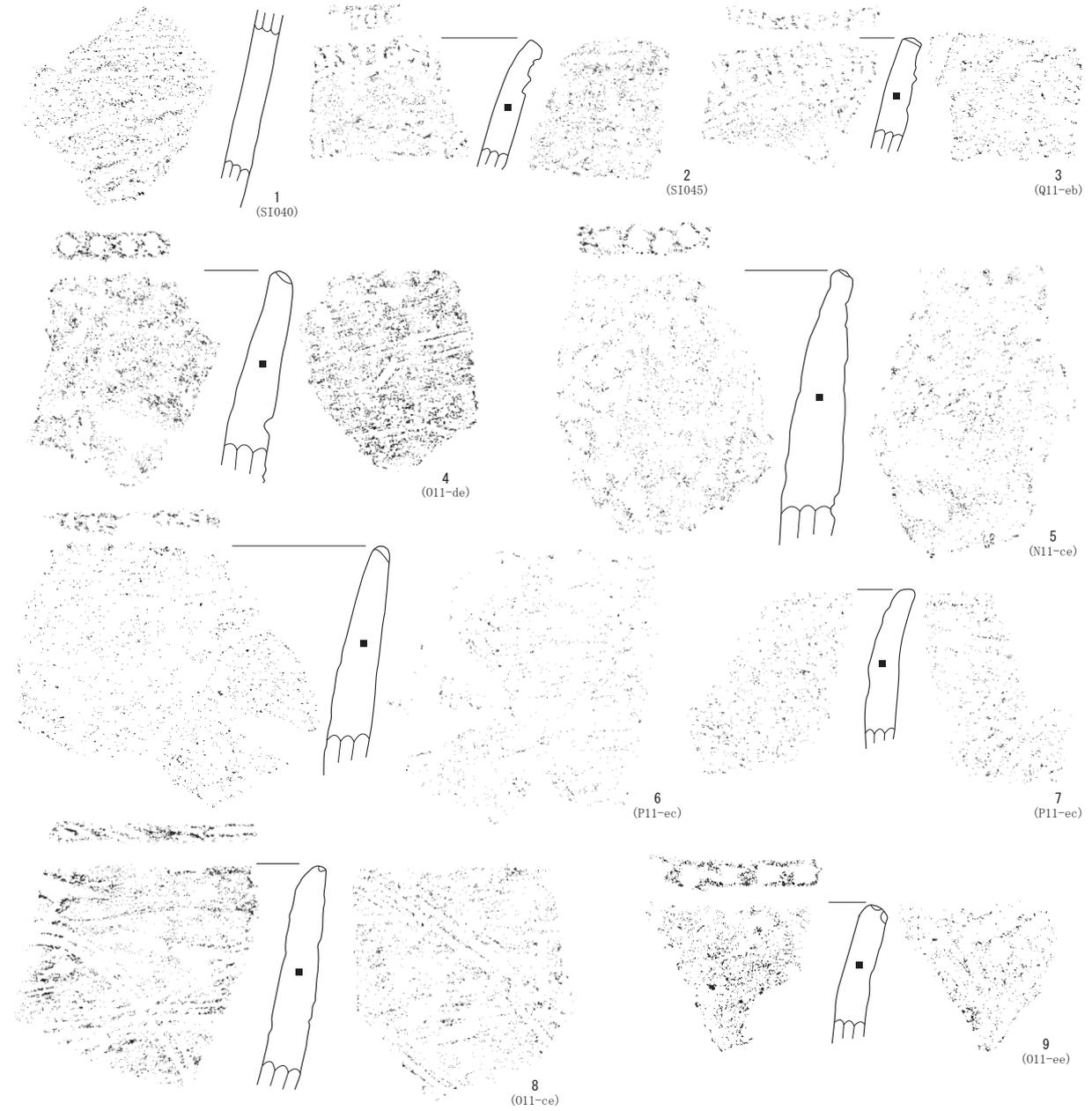
第1類 101～106は口唇部に刻み目を有し、口縁直下に櫛歯状工具による横方向の条線が描かれるものである。口縁は緩やかに外反して開き、丸みを帯びている。胎土中には繊維の混入は見られず、内面は横方向に丁寧に磨かれる。諸磯c式に見られる集合沈線とは異なり、口唇部に貼付文も観察されない。胎土・焼成から浮島式と判断したが、興津式も含め前期後半の土器と判断した。

出土地点についてはP-11のdcグリッドに集中しており、子母口式土器の出土している包含層の範囲と一致している。

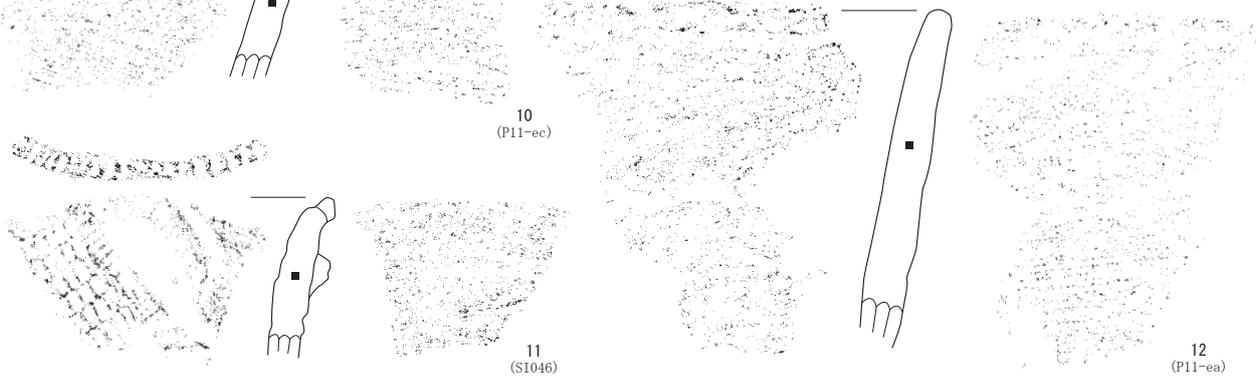
第2類 107は並行沈線による斜方向の肋骨文を意識する文様が描かれ、胴部下半との区画には変形爪形文が横走する。浮島1式新段階から浮島2式に比定されるものであろう。胎土は砂の混入が多く、色調もやや灰褐色に近く、第1類とはかなり雰囲気を変えている。また出土地点もSI040からの出土で分布範囲も異なっている。

第 I 群
沈線文系土器 (田戸下層式)

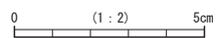
第 II 群 条痕文系土器 (子母口式)
第 1 類 口唇部刺突・刻み



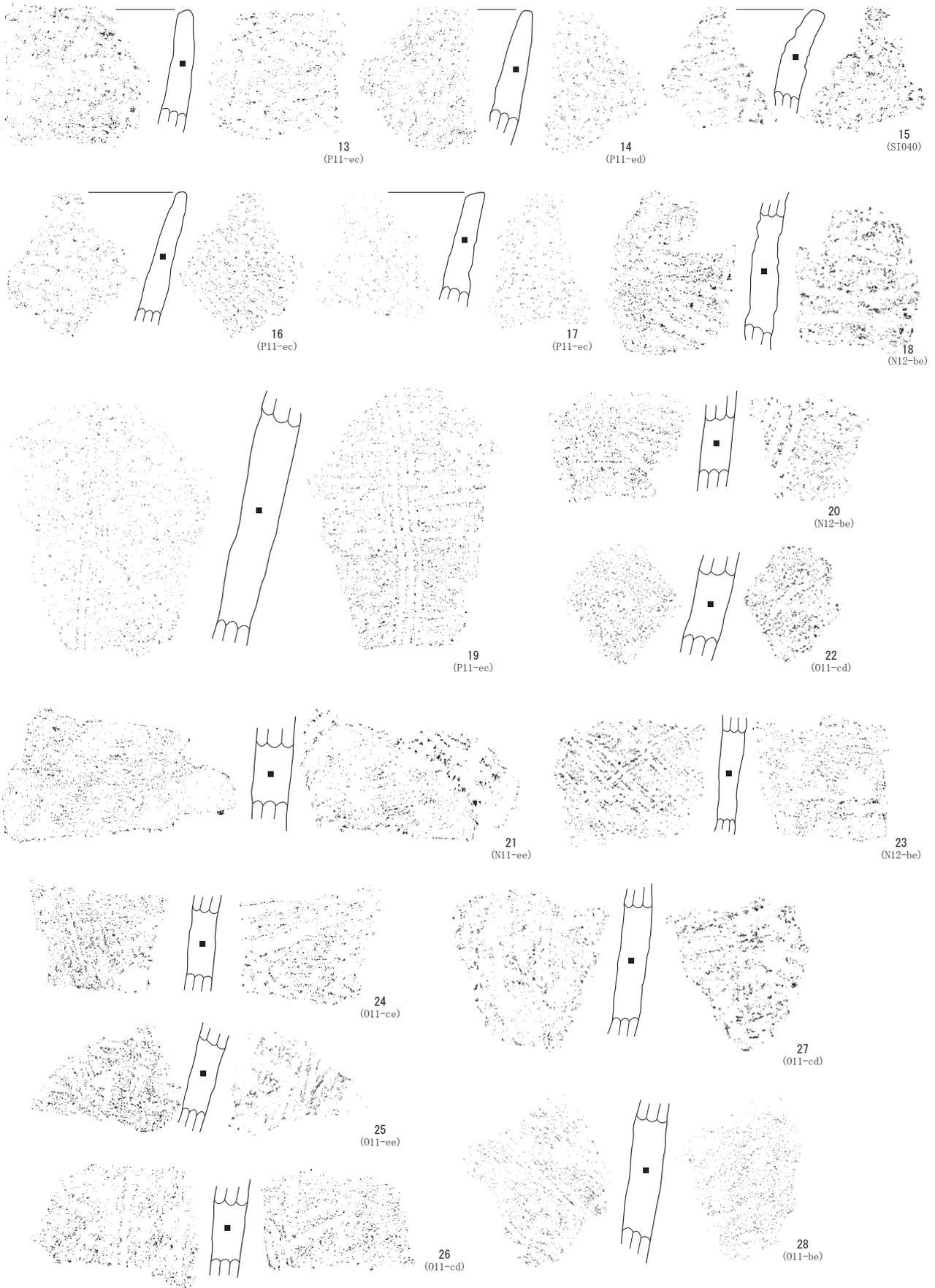
第 II 群 第 2 類 纖維束擦痕



第 17 図 遺構外出土縄文土器 (1)



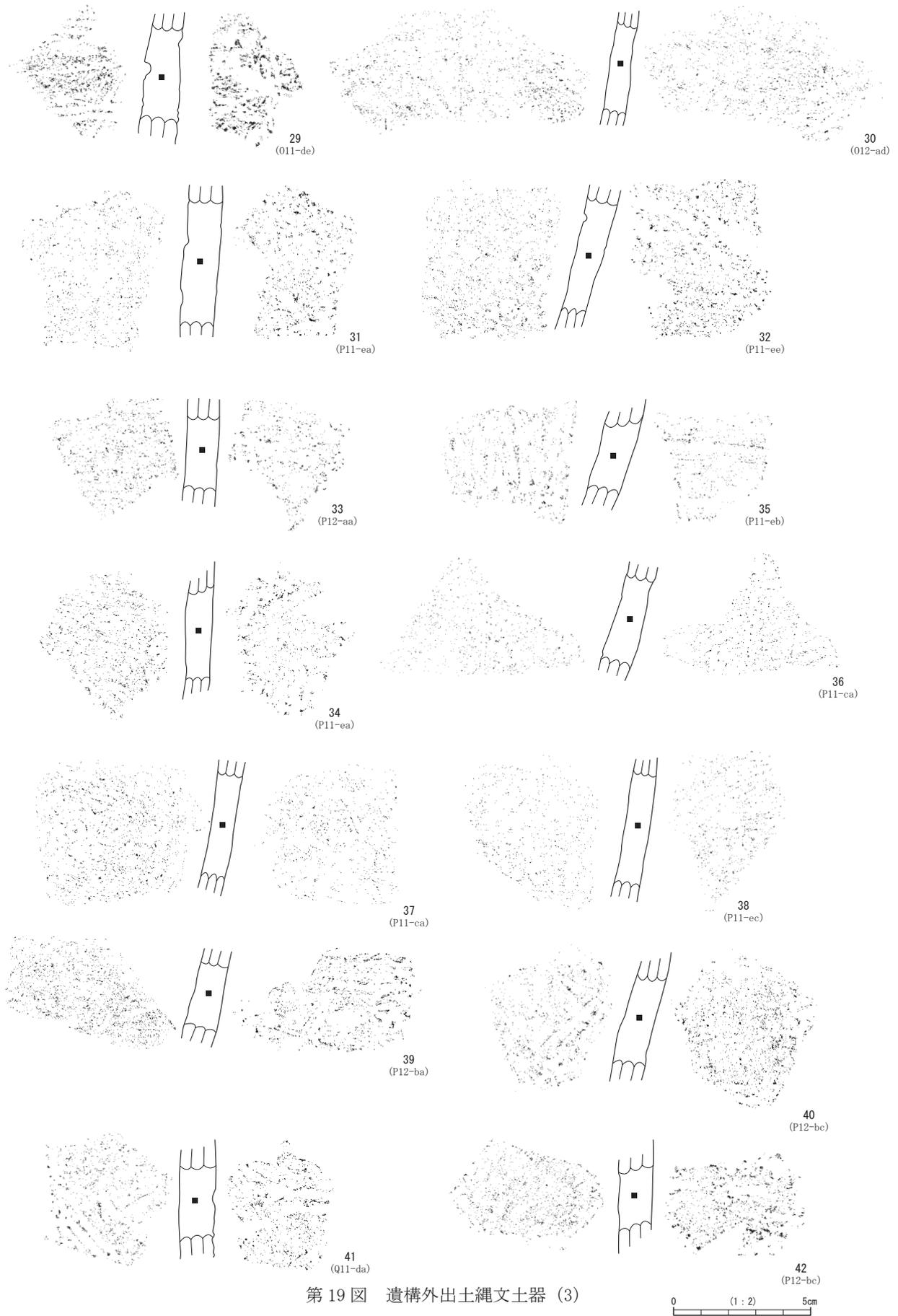
第Ⅱ群 第2類 纖維束擦痕



第18図 遺構外出土縄文土器(2)

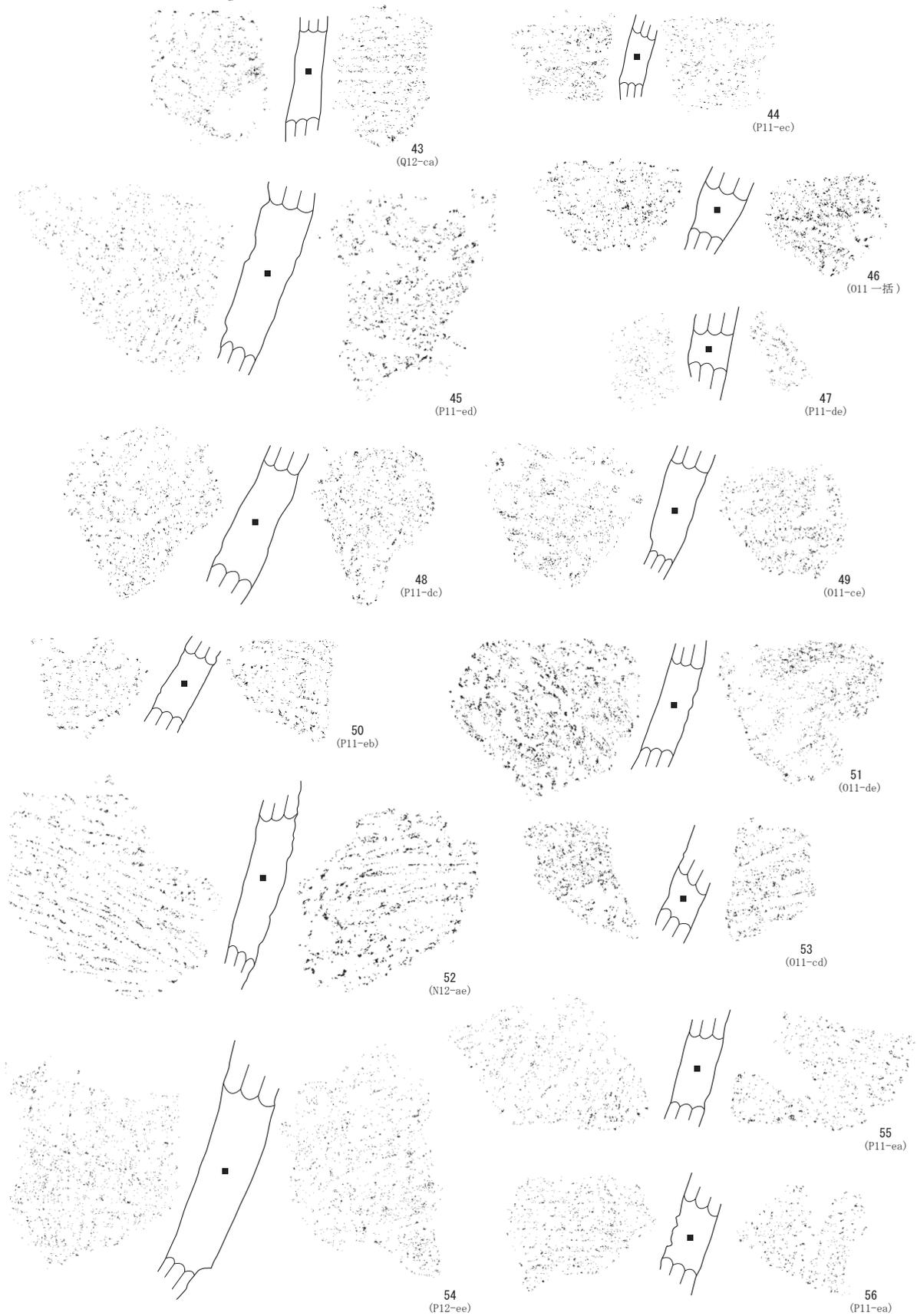
0 (1:2) 5cm

第Ⅱ群 第2類 纖維束擦痕



第19図 遺構外出土縄文土器 (3)

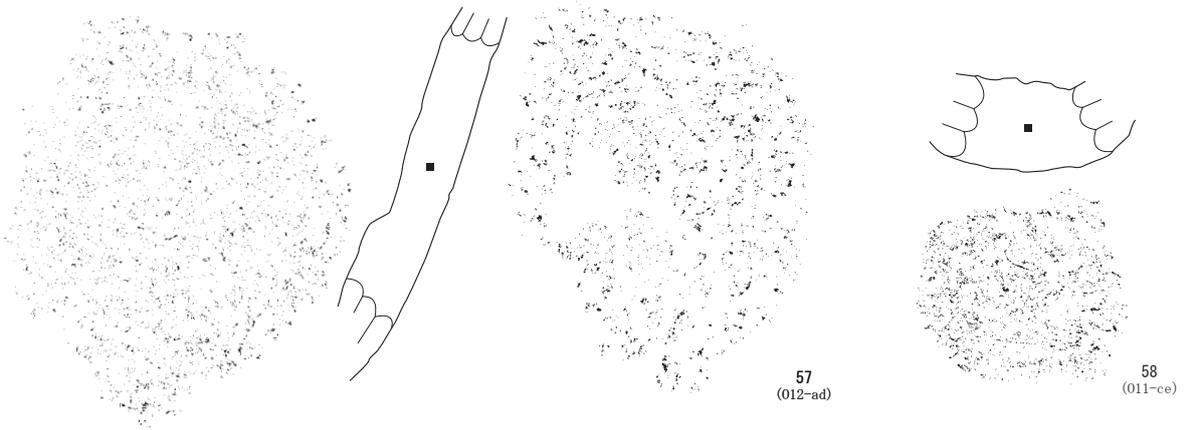
第Ⅱ群 第2類 纖維束擦痕



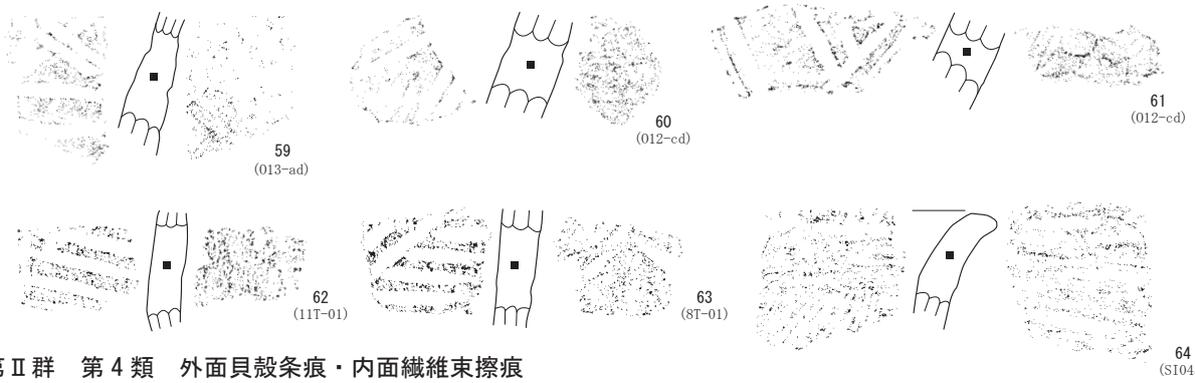
第20図 遺構外出土縄文土器(4)

0 (1:2) 5cm

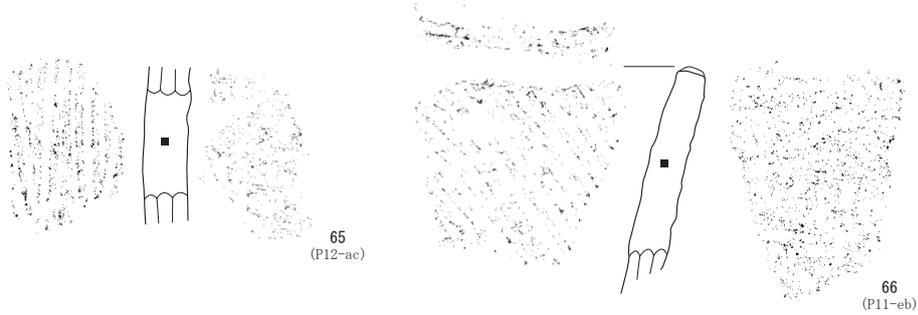
第Ⅱ群 第2類 纖維束擦痕



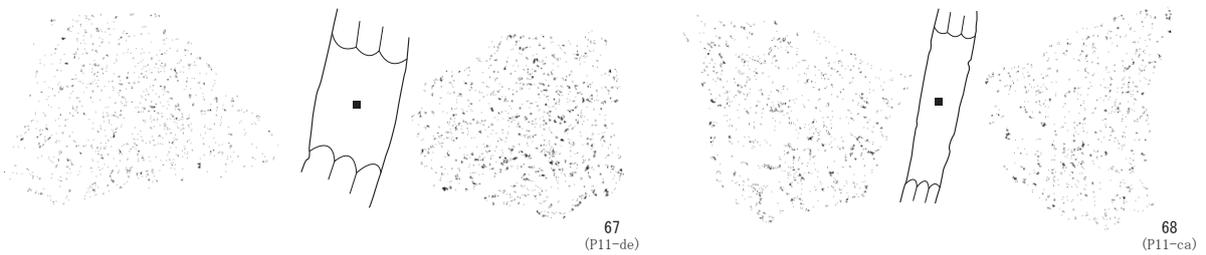
第Ⅱ群 第3類 太い沈線



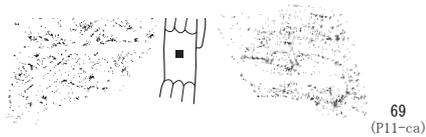
第Ⅱ群 第4類 外面貝殻条痕・内面纖維束擦痕



第Ⅱ群 第5類 外面纖維束擦痕・内面貝殻条痕



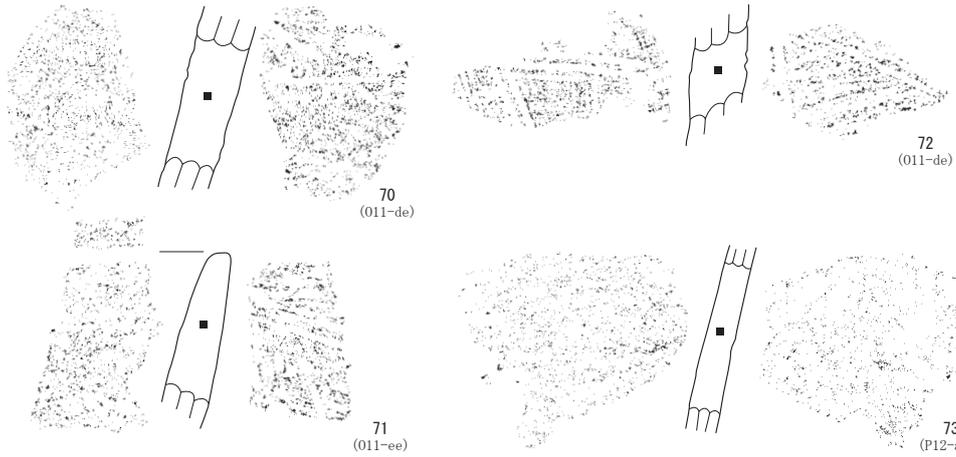
第Ⅱ群 第6類 扁平隆帯貼り付け



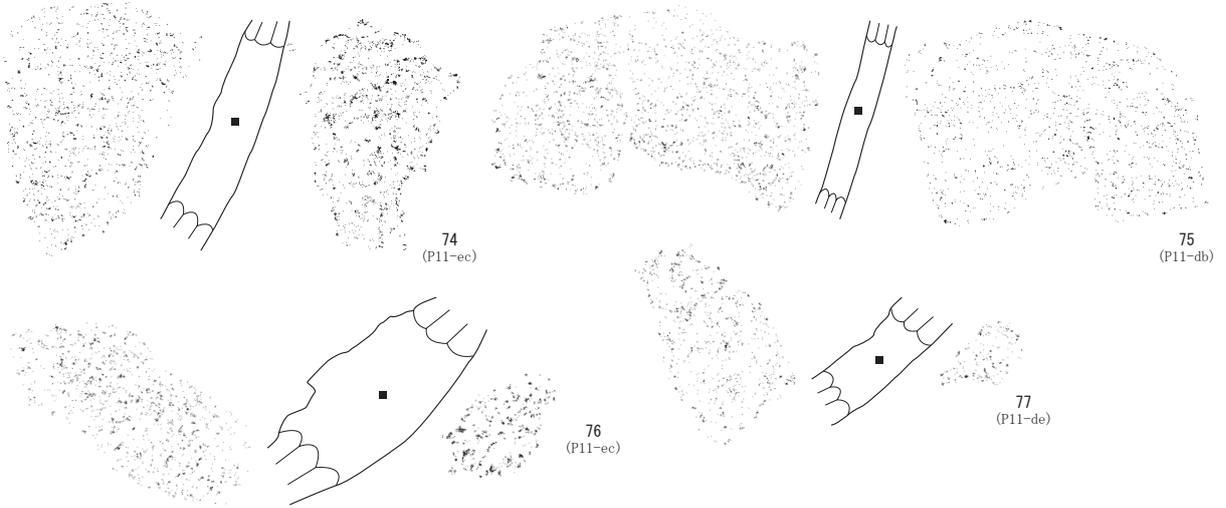
0 (1:2) 5cm

第21図 遺構外出土縄文土器(5)

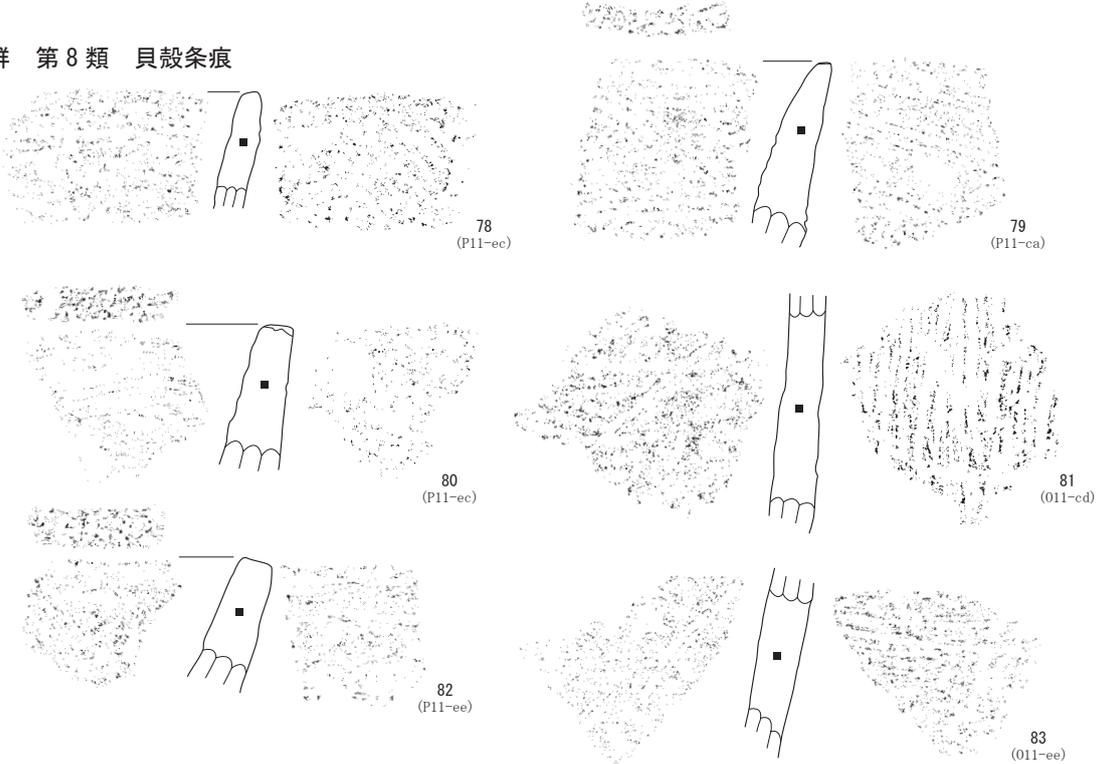
第Ⅱ群 第7類 擦痕・ナデ



第Ⅱ群 第7類 無文



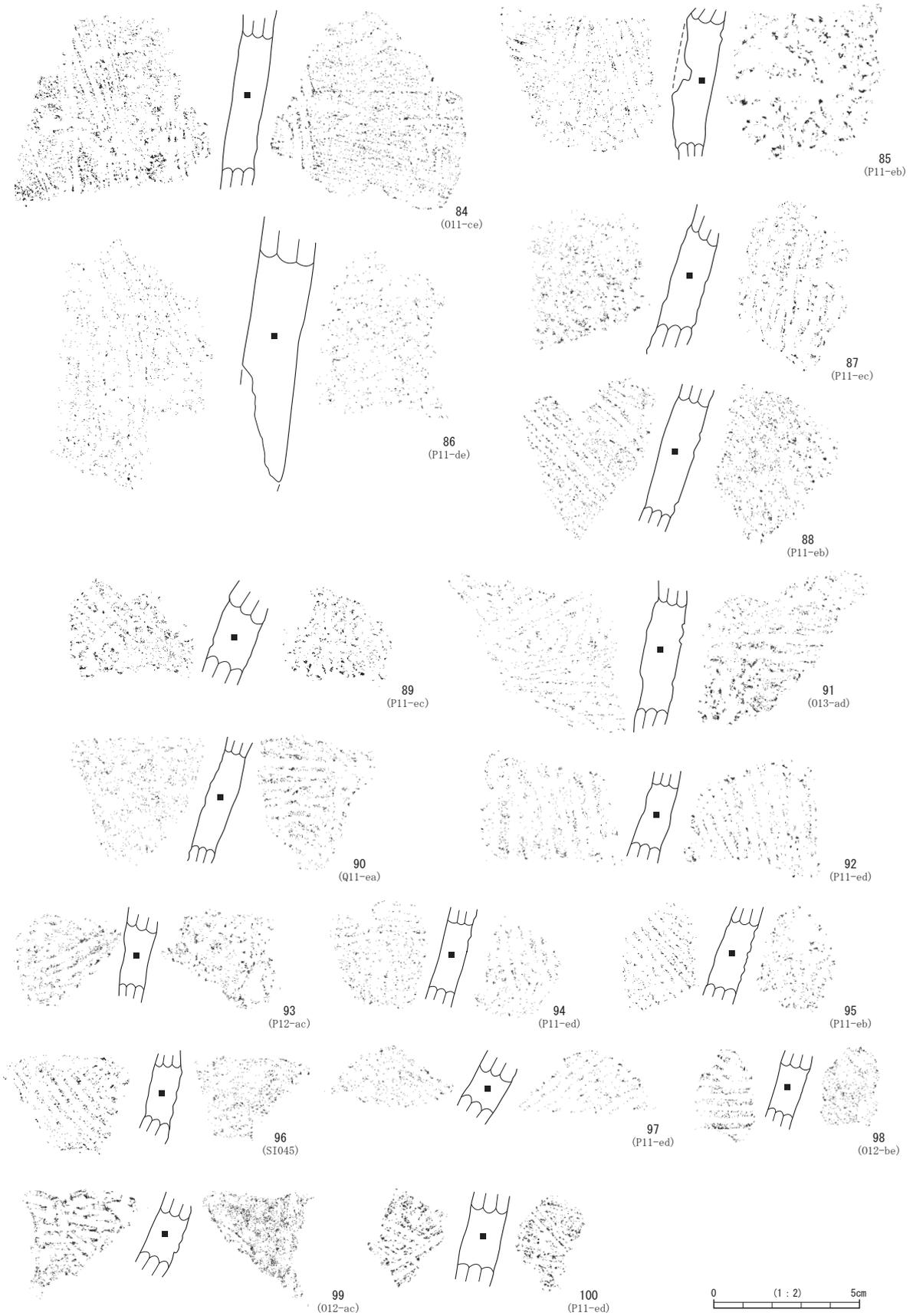
第Ⅱ群 第8類 貝殻条痕



第22図 遺構外出土縄文土器(6)

0 (1:2) 5cm

第Ⅱ群 第8類 貝殼條痕

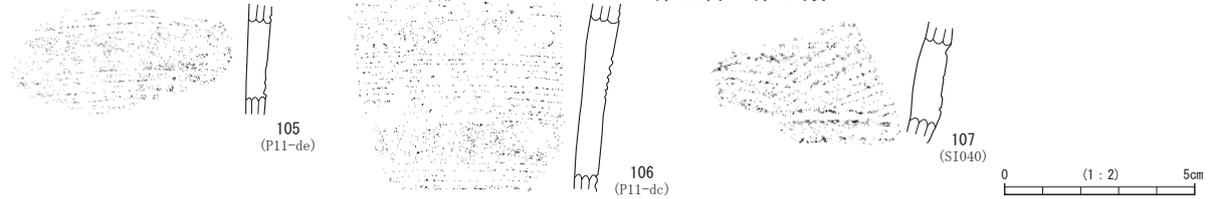


第23図 遺構外出土縄文土器(7)

第Ⅲ群 縄文前期後半（浮島式） 第1類



第Ⅲ群 第2類



第24図 遺構外出土縄文土器(8)

第6表 遺構外出土縄文土器観察表(1)

遺物番号	出土位置	注記番号	器種	残存	重量	整形・文様の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	SI040	2区上層0093	深鉢	胴部	33.1	上半には細い沈線が斜行し、下位には指によるものか、太い沈線が横走する。	白色粒子やや多い、黒色粒子少量、極小礫微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	田戸下層式
2	P12-ae	SI046付近カクラン	深鉢	胴部	20.1	口唇部は面取されて平坦になり、刻み目を有す。外面口縁直下には平行沈線が弧状に描かれ、内部に角棒状工具の端部による刺突列が施される。地文は内外共に無文。	繊維混入微量、白色粒子やや多い、黒色粒子微量。	内外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好	子母口式 1967 山内清男『日本先史土器図譜』116-1
3	Q11-eb	0007	深鉢	口縁部	19.8	やや外反する口縁部。口唇部は平坦に面取られた後貝殻復縁により刻みを施す。外面口縁直下には沈線により三角形の斜線が描かれ、内部に角棒状の工具による刺突列が充填される。内面は繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子・極小礫微量。	内外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好 二次焼成アリ	子母口式
4	O11-de	0044	深鉢	口縁部	47.8	口唇部は丸みを帯びる。口唇部には棒状工具による刺突が施される。外面は無文。内面は浅い貝殻条痕。	白色粒子多い、黒色粒子少量、極小礫微量。	内面 10YR4/1 灰褐 外面 10YR4/2 灰黄褐	良好	子母口式
5	N11-ce	0005-1	深鉢	口縁部	81.7	口縁部ではやや薄手で、胴部下半に向け急激に厚さを増す。口縁部は平坦で刻みが施されている。外面口辺にはへら状工具による2列刺突で「く」の字に区画を設け、内部に梯子状に同様の工具による刺突列が施される。内外面共のわずかながら擦痕状の痕跡が認められる。	繊維微量混入、白色粒子多い、黒色粒子・スコーリア少量、雲母微量。	内外面 10YR4/2 灰黄褐	良好	子母口式
6	P11-ec	0034-1	深鉢	口縁部	85.0	口縁部はほぼ直線的に開き、口唇部はやや面取られて平坦に整形された後、刻みが施される。器面は内外共に繊維束による横方向の条痕。	繊維微量混入、白色粒子多い、雲母・黒色粒子微量。	内面 10YR4/1 褐灰 外面 10YR5/2 灰黄褐	良好	子母口式
7	P11-ec	0033	深鉢	口縁部	25.2	口縁部は緩やかに外反して開く。口唇部は面取られたように平坦になる。内外共に繊維束による擦痕が外面で縦方向に、内面は横方向に施文される。	繊維微量混入、白色粒子少量、雲母・スコーリア微量。	内面 10YR4/3 にぶい黄褐 外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好	子母口式
8	O11-ce	0017	深鉢	口縁部	71.3	口唇部はやや内側が削がれ、端部には貝殻復縁による刺突が施される。器面は内外共に繊維束による横方向の擦痕が施された後、外面のみに並行沈線による曲線文様が描かれる。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子少量、極小礫微量。	内外面 10YR6/4 にぶい黄橙	良好 二次焼成アリ	子母口式

第7表 遺構外出土縄文土器観察表 (2)

遺物番号	出土位置	注記番号	器種	残存	重量	整形・文様の特徴	胎土	色調	焼成	備考
9	O11-ee	0030	深鉢	口縁部	21.8	緩やかに外反する口縁部で、口唇部は平坦に面取られた後、棒状の刺突列が加えられる。内外面共に繊維束による横方向に擦痕が施される。	繊維微量混入、白色粒子少量。	内面 7.5YR4/3 褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
10	P11-ec	0050-3	深鉢	口縁部	30.4	口縁は平坦に面取られる。器面は内外面共に繊維束による横方向の擦痕。	繊維微量混入、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・雲母微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
11	SI046	3区0061	深鉢	口縁部	24.9	口縁部は平縁で断面方形の隆帯が口唇よりやや突出するように付される。口唇部は平坦で、角棒状の工具により口唇部・隆帯上に刺突列が加えられる。また器面にも口縁直下に同様の施工工具による、6列の斜方向の刺突列が加えられる。地文は内外共に無文。	繊維微量混入白色粒子やや多い、黒色粒子微量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 10YR4/1 褐灰	良好	子母口式
12	P11-ec	0014-1	深鉢	口縁部	7.4	口縁部は丸みを帯びるが、刻みは施されていない。外面口辺は指による横方向のナデ。内面は浅い貝殻条痕が乱雑に施文される。	繊維微量混入、白色粒子少量、極小礫微量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式
13	P11-ec	0067	深鉢	口縁部	27.5	口縁はやや内湾気味に開く。口唇部は丸みを帯び、刻みは施されない。外面は無文。内面は繊維束による擦痕が粗雑に施文。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子少量。	内外面 10YR5/4 にぶい褐	良好 二次焼成あり	子母口式
14	P11-ed	0046	深鉢	口縁部	20.6	やや口径が小さい。口唇部はやや丸みを帯びている。外面は縦方向、内面は横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子少量。雲母微量。	内外面 5YR5/6 明赤褐	良好	子母口式
15	SI040	4区一括0004	深鉢	口縁部	14.4	大きく外反する口縁部の破片。口唇部は面取られたように平坦になる。外面胴部は明瞭な貝殻条痕が横走し、部分的に縦方向の沈線が観察される。内面は剥落している。	繊維微量混入、白色粒子多い、黒色粒子少量、スコリア・極小礫微量。	内面 7.5YR5/4 にぶい褐 外面 7.5YR4/3 褐	不良 二次焼成あり	子母口式
16	P11-ec	0026	深鉢	口縁部	18.7	口縁部は薄手で、胴部で肥厚する。口唇部はやや平坦に面取られる。器面は内外面共に繊維束による擦痕状の薄い条痕。	繊維微量混入、白色粒子少量、雲母微量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好 二次焼成あり	子母口式
17	P11-ec	0050-1	深鉢	口縁部	18.7	やや薄手。口縁は平坦に面取られる。外面は縦方向、内面は横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子・雲母微量。	内面 10YR4/1 褐灰 外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好	子母口式
18	N12-be	0005	深鉢	胴部	31.8	内面は繊維を束ねた浅い擦痕及びやや浅い条痕が斜方向に施文される。内面は横方向の繊維束の擦痕が観察される。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子・スコリア少量、極小礫微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐		子母口式
19	P11-ec	0027	深鉢	胴部	115.8	厚手。内外面共に繊維束による擦痕が縦・格子状に施文されている。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子少量、スコリア極小礫微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好 二次焼成あり	子母口式
20	N12-be	0003	深鉢	胴部	25.1	内面は繊維を束ねた浅い擦痕とやや浅い条痕が斜方向に施文。内面はやや深い条痕が縦方向に施文されている。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子少量、スコリア微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
21	N11-ee	0002	深鉢	胴部	53.9	厚手。内外面共に繊維を束ねたようなものによる擦痕が施される。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子・雲母少量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 10YR6/3 にぶい黄橙	良好	子母口式
22	O11-cd	0006	深鉢	胴部	25.9	内外面共に繊維束の擦痕が横方向に施される。	繊維微量混入、白色粒子多い、黒色粒子少量。極小礫微量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式
23	N12-be	0006	深鉢	胴部	25.3	外面は繊維束で横方向の擦痕を施した後、並行沈線により格子目文様を描く。内面は横方向の繊維束擦痕。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子微量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式

第8表 遺構外出土縄文土器観察表 (3)

遺物番号	出土位置	注記番号	器種	残存	重量	整形・文様の特徴	胎土	色調	焼成	備考
24	011-ce	0012	深鉢	胴部	22.7	外面は縦方向の浅い擦痕。内面は繊維束によるやや深い擦痕が横方向に施文される。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子・白色針状物質微量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
25	011-ee	0042-1	深鉢	胴部	22.8	外面繊維束擦痕。内面一部に浅い貝殻条痕。	繊維微量混入、白色粒子少量。	内面 10YR4/1 灰褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
26	011-cd	0020	深鉢	胴部	36.2	外面は縦方向の沈線状の条痕。内面は横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子微量。	内面 10YR6/4 にぶい黄橙 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
27	011-cd	0019	深鉢	胴部	32.9	底部付近だがやや薄手。外面は縦方向、内面は横方向の繊維束による擦痕カ。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子・小礫微量。	内面 10YR6/4 にぶい黄橙 外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好 二次焼成アリ	子母口式
28	011-be	0035	深鉢	胴部	42.2	外面は斜め方向の繊維束による擦痕。内面は無文。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子・スコリア微量。	内面 7.5YR4/1 褐灰 外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式
29	011-de	0024	深鉢	胴部	26	外面横方向の並行沈線が施される。内面繊維束による横方向の擦痕。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子微量。	内面 10YR4/2 灰黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
30	012-ad	0007-2	深鉢	胴部	47.1	外面は繊維束による縦及び横方向の擦痕。内面繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子少量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式
31	P11-ea	0013	深鉢	胴部	38.8	外面繊維束による擦痕。内面剥落。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子少量、スコリア・極小礫微量。	内外面 10YR6/4 にぶい黄橙	良好	子母口式
32	P11-ee	0045-2	深鉢	胴部	40.2	外面は繊維束による擦痕。内面は剥落。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子・雲母微量。	内面 10YR6/3 にぶい黄橙 外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好	子母口式
33	P12-aa	003-7	深鉢	胴部	28.2	内外面共横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子・極小礫少量、スコリア微量。	内面 10YR4/3 にぶい黄褐 外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好 二次焼成アリ	子母口式
34	P11-ea	0069	深鉢	胴部	22.2	外面無文。内面繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子・雲母・極小礫微量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/3 にぶい黄褐	良好 二次焼成アリ	子母口式
35	P11-eb	0064-2	深鉢	胴部	29.5	外面は縦方向の、内面は横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子・極小礫微量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
36	P11-ca	0058-4	深鉢	胴部	31.9	内外面共に繊維束による乱雑な擦痕。外面に並行沈線が1条縦に描かれる。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子少量、雲母微量。	内面 10YR4/2 灰黄褐 外面 7.5YR4/3 褐	良好	子母口式
37	P11-ca	0058-3	深鉢	胴部	41.1	内外面共に繊維束による乱雑な擦痕。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子微量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式
38	P11-ec	0049	深鉢	胴部	32.8	内外面共に繊維束による擦痕が横方向に施文される。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子・雲母微量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
39	P12-ba	0014-1	深鉢	胴部	30.2	外面縦及び横方向の繊維束擦痕。内面無文。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子少量、極小礫微量。	内面 10YR6/4 にぶい黄橙 外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好	子母口式
40	P12-bc	0016-1	深鉢	胴部	33.6	外面斜め方向、内面横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子少量、雲母微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
41	Q11-da	0005	深鉢	胴部	29.5	外面は斜め方向の、内面は横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子少量、極小礫微量。	内面 7.5YR5/4 にぶい褐 外面 10YR4/2 灰黄褐	良好	子母口式

第9表 遺構外出土縄文土器観察表 (4)

遺物番号	出土位置	注記番号	器種	残存	重量	整形・文様の特徴	胎土	色調	焼成	備考
42	P12-bc	0016-2	深鉢	胴部	31.5	外面は深い条痕による肋骨文状の文様が描かれ、内面は斜方向の繊維束による擦痕。	白色粒子・黒色粒子・極小礫少量。	内面 7.5YR5/4 にぶい褐 外面 5YR4/4 にぶい赤褐	良好	子母口式
43	Q12-ca	0009	深鉢	胴部	20.4	外面無文。内面横方向の繊維束による横方向の擦痕。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子・極小礫微量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好 二次焼成アリ	子母口式
44	P11-ec	0036	深鉢	胴部	13.9	内外面共に繊維束による擦痕が外面で縦方向に、内面は横方向に施文される。	繊維微量混入、白色粒子微量。	内外面 7.5YR5/3 にぶい褐	良好	子母口式
45	P11-ed	0047	深鉢	胴部	81.9	厚手。外面縦方向の繊維束による擦痕。内面は剥落。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子・雲母・白色針状物質微量。	内面 10YR4/2 灰黄褐 外面 7.5YR5/3 にぶい褐	良好	子母口式
46	O11-	0040	深鉢	胴部	26.3	底部付近。厚手。外面は無文、内面は繊維束擦痕カ。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子少量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
47	P11-de	0056-3	深鉢	胴部	11.9	やや厚手。外面は斜方向の繊維束擦痕。内面は無文。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子少量、スコリア微量。	内面 10YR4/2 灰黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
48	P11-dc	001-1	深鉢	胴部	38.3	外面繊維束による擦痕、内面は無文。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子やや多い、極小礫微量。	内外面 5YR5/6 明赤褐	良好	子母口式
49	O11-ce	0037-1	深鉢	胴部	36.3	外面は斜め方向の繊維束による擦痕。内面は無文。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子少量、スコリア微量。	内面 7.5YR4/2 灰褐 外面 7.5YR4/4 褐	良好	子母口式
50	P11-eb	0061-1	深鉢	胴部	17.4	外面は乱雑な繊維束による擦痕。内面は横方向の同様の擦痕。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子微量。	内面 10YR4/2 灰黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
51	O11-de	0021-1	深鉢	胴部	41.4	外面斜め方向、内面横方向の擦痕。	繊維微量混入、白色粒子・スコリア少量、黒色粒子微量。	内面 10YR6/4 にぶい黄橙 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
52	N12-ae	0001	深鉢	胴部	69.2	内外面共に繊維を束ねたようなやや深い擦痕が横方向に施される。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子少量、スコリア微量。	内面 7.5YR4/3 褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
53	O11-cd	0010	深鉢	胴部	17.9	外面は無文。内面は繊維束の擦痕横方向に施される。	繊維微量混入、黒色粒子やや多い、白色粒子少量、微小礫微量。	内面 7.5YR5/4 にぶい褐 外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式
54	P12-ee	0010-1	深鉢	胴部	98.8	厚手。外面は縦方向の、内面は横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、黒色粒子やや多い、白色粒子少量、雲母微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
55	P11-ea	002-3	深鉢	胴部	39.6	やや厚手。外面は斜方向の繊維束擦痕。内面は無文。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子・極小礫微量。	内面 10YR6/2 灰黄褐 外面 7.5YR6/3 にぶい褐	良好	子母口式
56	P11-ea	0015	深鉢	胴部	28.8	外面繊維束による擦痕。内面剥落。	繊維微量混入、白色粒子少量、雲母微量。	内面 10YR6/4 にぶい黄橙 外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式
57	O12-ad	0007-1	深鉢	胴部	146.1	底部付近の大破片。厚手。外面はわずかに繊維束による擦痕。内面は剥落が激しく不明。	繊維微量混入、黒色粒子多い、白色粒子やや多い、雲母・小粒礫微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
58	O11-ce	0015	深鉢	底部	54.1	丸底の底部。厚手。外面は繊維束による擦痕。内面は不明。	繊維微量混入白色粒子・黒色粒子少量、雲母微量。	内外面 10YR4/4 褐	良好	子母口式
59	O13-ad	一括-2	深鉢	胴部	16.4	外面は太い沈線による格子目及び横線が描かれる。内面はナデ。	白色粒子多い、スコリア少量、黒色粒子微量。	内面 7.5YR6/4 にぶい橙 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式

第 10 表 遺構外出土縄文土器観察表 (5)

遺物 番号	出土 位置	注記 番号	器種	残存	重量	整形・文様の特徴	胎土	色調	焼成	備考
60	012-cd	0002	深鉢	胴部	16.6	外面は太い沈線が斜方向に描かれる。内面は擦痕。厚手。	白色粒子・黒色粒子少量、雲母微量。	内面 7.5YR5/3 にぶい褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
61	012-cd	0006-1	深鉢	胴部	24.2	外面は太い沈線による V 字状の文様が描かれる。内面はナデ整形。	白色粒子やや多い、黒色粒子微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
62	11TR	11TR	深鉢	胴部	9.9	外面は斜方向の太い沈線。内面はわずかに擦痕が観察される。	白色粒子やや多い、黒色粒子少量、雲母・スコリア微量。	内外面 10YR6/4 にぶい黄橙	良好	子母口式
63	STR	STR	深鉢	胴部	14.7	外面は太い沈線により斜方向の文様が描かれる。内面は無文。	黒色粒子やや多い。白色粒子少量。雲母・スコリア微量。	内外面 7.5YR6/4 にぶい橙	良好	子母口式
64	SI045	0051	深鉢	胴部	21.5	口縁部分は大きく外反して開き、口唇部はやや平坦になる。外面口辺は繊維の束状のもので粗い横方向の擦痕。胴部には貝殻条痕が斜め方向に粗く施文される。内面は粗い繊維束状のもので横ナデされる。	繊維混入微量、白色粒子やや多い、雲母少量、黒色粒子・白色針状物質・スコリア・極小礫微量。	内面 10YR4/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
65	P12-ac	008	深鉢	胴部	22.8	外面縦方向のやや深い貝殻条痕。内面は横方向の繊維束擦痕。	白色粒子・黒色粒子やや多い、雲母少量。	内面 10YR4/3 にぶい黄褐 外面 5YR4/4 にぶい赤褐	良好	子母口式
66	P11-eb	0064-1	深鉢	口縁部	37.6	口唇部はやや平坦に面取られた後、刻みが施される。外面は斜め方向の深い貝殻条痕。内面は横方向の繊維束によるナデ。	白色粒子・黒色粒子やや多い、雲母少量、極小礫微量。	内外面 5YR4/6 赤褐	良好	子母口式
67	P11-de	0056-2	深鉢	胴部	89	厚手。やや底部に近い。外面は縦もしくは斜方向の繊維束擦痕。内面は縦方向の浅い貝殻条痕。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子やや多い、スコリア・中礫微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
68	P11-ca	0058-2	深鉢	胴部	39.1	外面は横方向の繊維束擦痕。内面は多方向の浅い貝殻条痕。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子・雲母微量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好 二次 焼成 アリ	子母口式
69	011-aa	0003	深鉢	胴部	17.1	器面には扁平で太い隆帯が付され、沈線が斜方向に描かれる。内外面共にナデ。	繊維微量混入、白色粒子多い、黒色粒子微量。	内面 7.5YR にぶい褐 外面 10YR 灰黄褐	良好	子母口式
70	011-de	0023	深鉢	胴部	40.1	外面無文。内面はわずかな擦痕。	繊維微量混入白色粒子少量、黒色粒子・雲母微量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式
71	011-ee	0041-2	深鉢	口縁部	20.1	口唇部は丸みを帯びる。口唇部の刻みは見られない。内外面共に擦痕。	繊維微量混入、白色粒子少量、小礫微量。	内外面 10YR6/4 にぶい黄橙	良好	子母口式
72	011-de	0022	深鉢	胴部	24.1	外面は 3 本 1 単位の平行沈線による格子目。内面は繊維束による横方向の擦痕。	繊維微量混入白色粒子・黒色粒子少量、極小礫微量。	内面 10YR4/1 褐灰 外面 10YR6/4 にぶい黄橙	良好	子母口式
73	P12-ac	0010-2	深鉢	胴部	27.6	薄手。内外面共に無文。	繊維微量混入、白色粒子多い、黒色粒子少量、雲母微量。	内面 10YR3/2 黒褐 外面 10YR4/3 にぶい黄褐	良好 二次 焼成 アリ	子母口式
74	P11-ec	0035	深鉢	胴部	41.1	底部付近の破片。厚手。外面は縦方向の擦痕。内面は横方向の浅い条痕。	繊維微量混入、白色粒子多い、黒色粒子・極小礫微量。	内面 10YR6/4 にぶい黄橙 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好 二次 焼成 アリ	子母口式
75	P11-db	009	深鉢	胴部	46.9	底部付近の資料。やや薄手で内外面共に無文。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子・極小礫微量。	内面 10YR4/2 灰黄褐 外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式
76	P11-ec	0037	深鉢	底部付近	56.2	内外面共に無文。厚手。	繊維微量混入、白色粒子微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
77	P11-de	0052-2	深鉢	尖底部付近	20.6	厚手。内外無文。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、雲母少量、黒色粒子微量。	内面 10YR3/2 黒褐 外面 7.5YR4/2 灰褐	良好	子母口式

第 11 表 遺構外出土縄文土器観察表 (6)

遺物番号	出土位置	注記番号	器種	残存	重量	整形・文様の特徴	胎土	色調	焼成	備考
78	P11-ec	0028-1	深鉢	口縁部	19.1	口縁部は丸みを帯びる。やや薄手で、外面は無文。内面は一部に浅い斜方向の貝殻条痕文が施文される。	繊維微量混入、白色粒子少量。	内面 10YR4/1 灰褐 外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好	子母口式
79	P11-ca	0058-1	深鉢	口縁部	34.2	外反気味に開く口縁。口唇部は平坦に面取られた後、貝殻腹縁による刺突が施される。外面は浅い貝殻条痕により区画帯を設け内部に格子目の文様を描く。内面は斜め方向の浅い貝殻条痕。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子微量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	子母口式
80	P11-ec	0045-1	深鉢	口縁部	23.9	口縁部は直線的に開き口唇部は平坦に整形された後、貝殻の腹縁による刻みが施される。外面は浅い貝殻条痕。内面は横方向の擦痕。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子少量。	内面 10YR4/2 灰黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
81	011-cd	0005-1	深鉢	胴部	23.7	外面は浅い条痕。内面は明瞭な貝殻条痕が縦方向に施文される。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子多い。	内外面 10YR6/4 にぶい黄橙	良好	子母口式
82	P11-ee	0071-2	深鉢	口縁部	25.9	直線的に開く口縁。口唇部は平坦に面取られ、貝殻腹縁による刺突が加えられる。外面は斜め方向の、内面は横方向の繊維束による擦痕。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子少量、スコリア微量。	内面 10YR5/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
83	011-ee	0029	深鉢	胴部	30	外面は細い平行沈線による格子目文様が描かれる。内面は横方向の浅い貝殻条痕。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
84	011-ce	0016	深鉢	胴部	57.7	外面は横方向の擦痕の後、縦方向に並行沈線が複数描かれる。工具は貝殻と判断される。内面は横方向の繊維束による擦痕の後、貝殻と判断される条痕がわずかに観察される。	繊維混入し、白色粒子・黒色粒子やや多い、極小礫微量。	内面 10YR6/3 にぶい黄橙 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
85	P11-eb	0066-1	深鉢	胴部	31.6	外面は乱雑な浅い貝殻条痕。内面は剥落。	白色粒子少量、黒色粒子・雲母微量。	内面 10YR3/2 黒褐 外面 10YR4/3 にぶい黄褐	良好	子母口式
86	P11-de	0056-1	深鉢	胴部	894	厚手。外面胴部は縦方向の繊維束擦痕に部分的に貝殻条痕が斜方向に施文。内面は横方向の繊維束擦痕。	繊維微量混入白色粒子やや多い、黒色粒子・雲母・スコリア・白色針状物質・極小礫微量。	内面 7.5YR4/2 灰褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
87	P11-ec	0028-2	深鉢	胴部	28.4	外面は無文。内面はやや粗い貝殻条痕が斜め方向に施文される。	繊維微量混入、白色粒子少量。	内面 10YR4/2 灰黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
88	P11-eb	0031	深鉢	胴部	28.7	外面は深い貝殻条痕が斜め方向に施文される。内面は無文。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子・雲母少量。	内面 7.5YR4/4 褐 外面 5YR5/6 明赤褐	良好	子母口式
89	P11-ec	0032	深鉢	胴部	19.6	外面は斜方向の貝殻条痕。内面剥落。厚手。	繊維微量混入、白色粒子・雲母微量。	内外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好	子母口式
90	Q11-ea	0006	深鉢	胴部	21.2	底部に近い破片。やや薄手。外面無文。内面深い貝殻条痕が横方向に施文。	繊維微量混入、白色粒子少量、黒色粒子微量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好 二次焼成アリ	子母口式
91	013-ad	一括-1	深鉢	胴部	34.7	外面は粗雑な貝殻条痕文が施文。内面は繊維束による擦痕カ。	白色粒子やや多い、黒色粒子少量、極小礫微量。	内面 7.5YR5/3 にぶい褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
92	P11-ed	0068	深鉢	胴部	22.8	やや薄手。内外面共に幅の広い貝殻条痕が深く縦方向に施文される。	白色粒子・黒色粒子少量、雲母微量。	内面 10YR4/2 灰黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
93	P12-ac	009-1	深鉢	胴部	12.2	やや外反する胴部破片。外面は太い貝殻条痕。内面は剥落。	白色粒子少量。	内面 10YR4/1 褐灰 外面 7.5YR5/3 にぶい褐	良好	子母口式

第 12 表 遺構外出土縄文土器観察表 (7)

遺物番号	出土位置	注記番号	器種	残存	重量	整形・文様の特徴	胎土	色調	焼成	備考
94	P11-ed	0054-2	深鉢	尖底部付近	12.3	外面上半は横方向の貝殻条痕。下半は繊維束擦痕。内面は縦方向の貝殻条痕。	繊維微量混入、白色粒子少量、雲母微量。	内面 10YR6/3 にぶい黄橙 外面 10YR5/2 灰黄褐	良好 二次焼成あり	子母口式
95	P11-eb	0030	深鉢	胴部	13.1	外面は深い貝殻条痕が斜め方向に施文される。内面は無文。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、雲母少量。	内外面 10YR3/3 暗褐	良好	子母口式
96	SI045	1区上層0001	深鉢	胴部	13.1	胴部破片。条痕はやや弧状に引かれている。下端部にヘラで削られたような平坦面が見られるが詳細は不明。内面は無文。	繊維微量混入、白色粒子やや多い、黒色粒子少量。	内面 10YR5/4 にぶい黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
97	P11-ed	0062	深鉢	胴部	12.4	内外面共に浅い貝殻条痕が斜方向に施文される。	繊維微量混入、白色粒子やや多い。	内外面 10YR4/2 灰黄褐	良好	子母口式
98	012-be	0005	深鉢	胴部	9.1	外面貝殻条痕。内面擦痕。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子やや多い、雲母微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
99	012-ac	グリッド一括0001-1	深鉢	胴部	14.4	外面浅い貝殻条痕。内面無文。	繊維微量混入、黒色粒子やや多い、白色粒子少量。	内外面 5YR5/6 明赤褐	良好	子母口式
100	011-de	0025	深鉢	胴部	12	内外面共にやや浅い貝殻条痕を粗雑に施文。	繊維微量混入、白色粒子・黒色粒子少量。	内面 10YR5/2 灰黄褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	子母口式
101	P11-dc	0039	深鉢	口縁部	19.9	口縁は緩やかに外反して開き、口唇部は丸く整形された後刻みが施される。外面は条線が横方向に施文される。内面は横方向のミガキ。	白色粒子少量、黒色粒子・雲母微量。	内面 5YR5/6 明赤褐 外面 7.5YR4/4 褐	良好	前期浮島式カ
102	P11-dc	0025-3	深鉢	口縁部	7.2	口唇部は丸味を帯び、外端部に縦方向の刻みが施される。口縁直下には櫛歯状工具による条線が横方向に緻密に施文される。内面は横方向のミガキ。	白色粒子・黒色粒子・雲母微量。	内外面 5YR5/6 明赤褐	良好	前期浮島式カ
103	P11-dc	0025-4	深鉢	胴部	16.8	外面は櫛歯状施文具による条線が横方向に緻密に施文される。内面は横方向のミガキ。	白色粒子やや多い、黒色粒子少量、雲母・極小礫微量。	内面 5YR5/6 明赤褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	前期浮島式カ
104	P11-dc	0038	深鉢	胴部	28.4	外面条線が横方向に施文される。内面は横方向のミガキ。	白色粒子・黒色粒子・雲母少量。	内面 5YR5/6 明赤褐 外面 5YR5/4 にぶい赤褐	良好	前期浮島式カ
105	P11-de	0040	深鉢	胴部	16.5	外面条線が横方向に施文される。内面は横方向のミガキ。	白色粒子・黒色粒子・雲母少量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	前期浮島式カ
106	P11-dc	0041	深鉢	胴部	32.8	外面条線が横方向に施文される。内面は横方向のミガキ。	白色粒子・黒色粒子やや多い。雲母少量。	内面 5YR5/6 明赤褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	前期浮島式カ
107	SI040	1区床下0085	深鉢	胴部	14.8	平行沈線による斜方向の沈線が描かれ、下位には変形爪形文が施文される。	白色粒子・赤色粒子やや多い、黒色粒子少量。	内面 7.5YR7/6 橙 外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	浮島2式



第25図 縄文時代遺構外遺物出土状況図（田戸下層式）



第26図 縄文時代遺構外遺物出土状況図（子母口式）

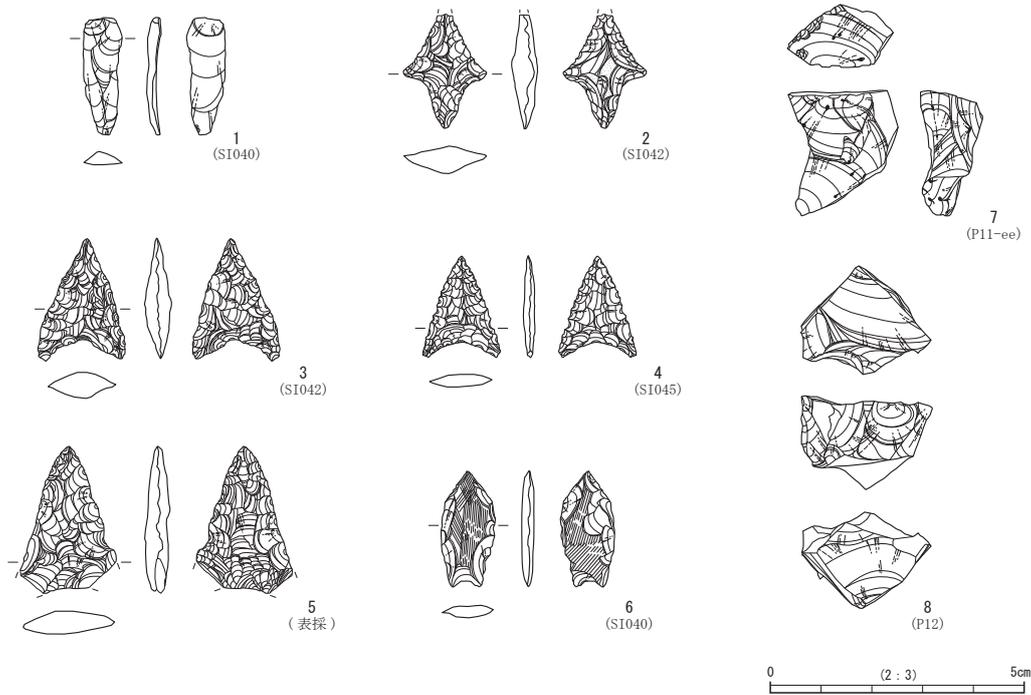


第27図 縄文時代遺構外遺物出土状況図（浮島式）

(2) 石器

本調査で出土した遺物ではマイクロブレイド (1) と、縄文草創期の前三舟台遺跡 (富津市) などでは類例が検出された十字型の有舌尖頭器 (2) の、縄文時代直前段階から草創期に関わる石器が 2 点出土し、その他の石器は出土地点から概ね子母口式土器に共伴すると判断される。

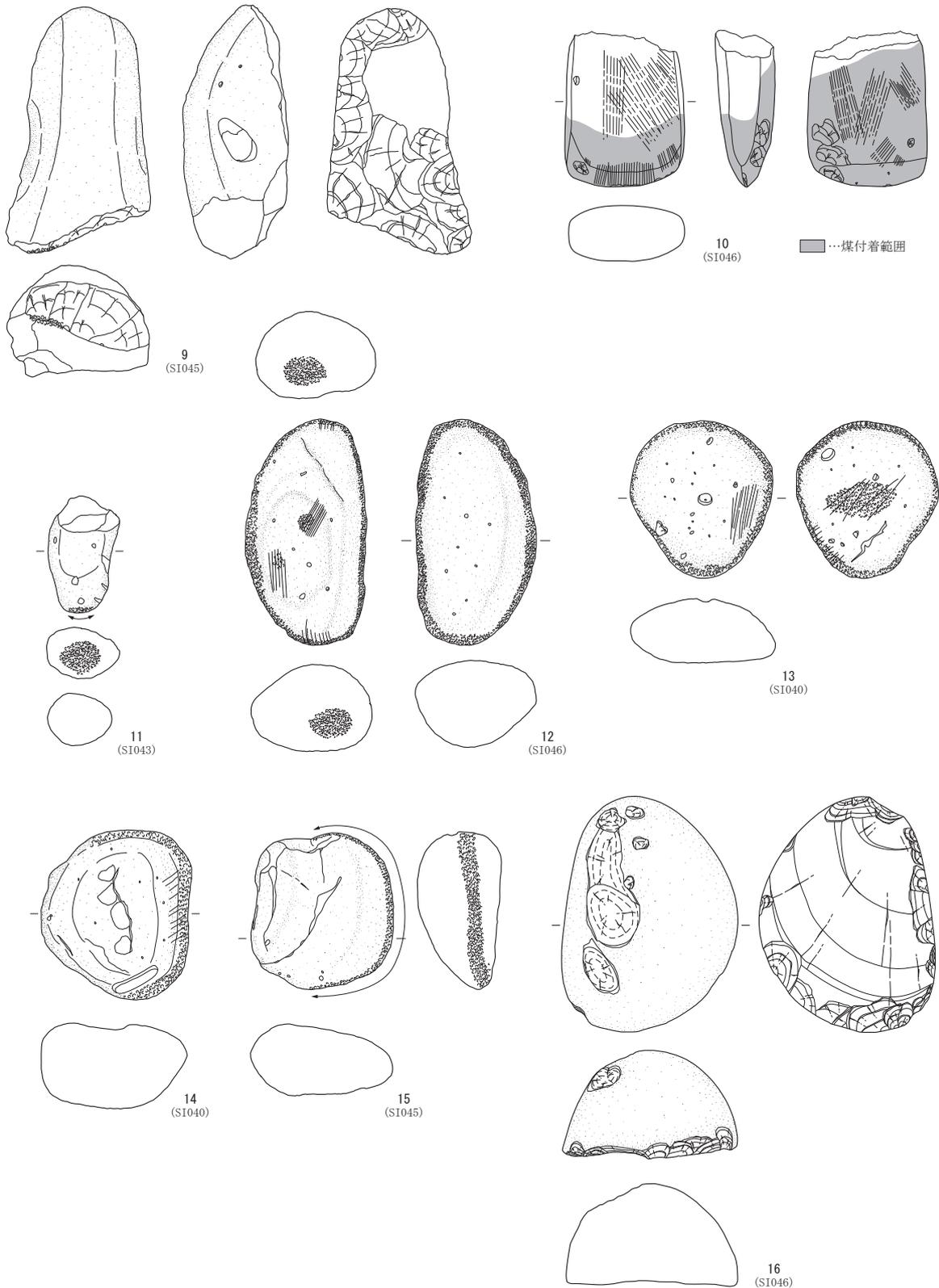
スタンプ型石器とした 9 は形状にやや疑問が残るため未成品としたが、撚糸文土器・押型文土器は今回の調査では検出されなかったものの、本遺跡他地点の調査で確認されており、齧齧はないものと考えられる。



第 28 図 遺構外出土石器 (1)

第 13 表 遺構外出土石器観察表 (1)

遺物番号	出土位置	注記番号	種類	器種	残存	重量	整形の特徴	材質
1	SI040	一括	石器	剥片	完形	0.4	縦長の剥片で、小型の核から剥離されたものである。背面の稜線は 1 本で、上端部からのみ剥離が行われている。マイクロブレイドの可能性もある。	珪質頁岩
2	SI042	1 区下層 0014	石器	石鏃	完形	0.9	縄文草創期の十字形尖頭器に類似している。先端部はわずかに欠損し、側縁は外反する。舌部は突起部直下で外反した後先端部でやや内湾する。	珪質頁岩
3	SI042	4 区一括 0009	石器	石鏃	完形	1.3	側縁は緩やかに内湾し、先端部でわずかに外反気味に尖る。やや厚みがある。基部は浅く抉られる。凹基三角族。	黒曜石
4	SI045	4 区上層	石器	石鏃	完形	0.5	薄手で丁寧な製作が行われている。側面は平行剥離が整然と並びやや内湾する。挟りは弧状になり浅い。薄手。前期東北地方に多くみられる赤褐色のチャートを用いている。	チャート
5	012-ac	表採	石器	石鏃	脚欠損	1.8	大型の凹基三角鏃脚部はいずれも折損している。側縁はほぼ直線的で先端付近でわずかに内湾して尖る。側縁は平行剥離が丁寧に行われている。	黒曜石
6	SI040	一括	石器	石鏃	完形	0.8	板状の素材を製作した後、両側面から剥離するが、剥離は中心部に届かずステップを起こす。先端部で直線的に尖るが、基部側に向かい内湾し、基部は浅く抉られる。この種の鏃は縄文早期にも見られ、また弥生期の有孔磨製石鏃にも類似している。凹基三角鏃。	粘板岩
7	P11-ee	0045-4	石器	残核	—	4.4	上端はほぼ平坦。部分的に微細な剥離が観察され、上端からの打撃による剥離は最終剥離の 1 枚のみで、裏面には下位からの剥離も見られる。上下方向から剥離が行われた剥片である。	黒曜石
8	P12 一括	G21-0018	石器	残核	—	5.3	上下面は折り取られたようになり、打点の調整は行われていない。側面の最終剥離は 1 枚のみ確認できる。	珪質頁岩



第 29 図 遺構外出土石器 (2)

第 14 表 遺構外出土石器観察表 (2)

遺物 番号	出土 位置	注記番号	種類	器種	残存	重量	整形の特徴	材質
9	SI045	0090	石器	スタンプ 型石器	未成品	308.9	中央部分が緩やかに窪む、大形の円盤状の礫を打ち欠いて形状を整えている。表皮部分は摩滅により研磨されたように光沢を有す。下端部は、多方向からの剥離が観察され、稜線部分に敲きによる潰れが観察される。	斑礫岩
10	SI046	0031	石器	磨製石斧	基部 欠損	201.0	定角式磨製石斧。刃部は緩やかな弧状を呈し、側面は平坦に磨かれる。基部側は折損する。全体に被熱を受けており、煤付着範囲と赤褐色に熱変した範囲が分かれ、柄に装着されていた状況を示す可能性がある。	北陸系魚川を中心とする変質蛇紋岩の可能性はある。
11	SI043	2区一括 0002	石器	敲石	基部 欠損	56.6	棒状に近い断面楕円形礫の下端部をハンマーに用いている。端部は敲打により潰れが観察される。基部側は欠損している。	凝灰岩
12	SI046	0019	石器	敲石	完形	384.6	楕円形を呈する自然礫。断面形はやや丸味を帯びた三角形を呈し、両端部に敲打による潰れが観察される。	凝灰岩
13	SI040	床直 0068	石器	敲石	完形	236.5	やや扁平な卵形を呈し、側面は全面に渡り敲打が行われる。また、上面にも僅かながら表皮の磨耗が観察される。	凝灰岩
14	SI040	0092	石器	敲石	完形	373.0	やや扁平で三角形に近い楕円形を呈し、側面は周縁に敲打痕が行われている。底面に表皮がはがれたような摩滅痕が僅かながら観察される。	凝灰岩
15	SI045	0017	石器	敲石	完形	566.2	扁平に近い円形の自然礫を用いるもので、側端部の一縁辺部のみ使用されており、褐色の表皮が剥落して白色の帯状の摩滅痕が認められる。	チャート
16	SI046	0032	石器	搔器	—	654.1	球形の礫を2分割にし、破損面の外周を刃部になっている。表皮側への剥離は僅かで、分割面に細かな剥離が残される。全体に被熱しており、分割は熱による可能性が高い。	斑礫岩

(3) 礫

礫の重量別分布図については、第 31 図に掲載した。本調査では 5,505.3g の礫が出土している。

出土範囲は包含層部分に集中しており、大半が被熱を受けている。遺物の出土状況から、第 II 群子母口式土器に伴う可能性が高い。一方で、炉穴との位置関係においては、011-ee グリッドの FP262 および P11-ea グリッドの FP261 で近接するものの、他は積極的な関連性は認められない。



第 30 図 縄文時代遺構外石器出土状況図



第31図 縄文時代遺構外礫出土状況図

- ~ 10g
- 10g ~ 100g
- 500g
- 1000g



2. 古墳時代以降

A. 住居跡

本調査で住居跡は7軒確認された。このうちSI041・042・044の3軒では、壁は遺存していなかった。

本項では住居跡ごとに遺構図面と所見、実測遺物、遺物観察表を掲載し、各住居跡出土の土師器の器種ごとの重量と総量については、本項末に第24表で掲載する。

SI040 (第32～34図、第15・16表、Ph.3・4・19)

調査区西端付近・大グリッドN11の中央に位置し、地山Ⅲ層から掘り込んで、縄文時代の陥穴SK144と重複する。規模は、主軸が5.50m、副軸が5.75mの平面隅丸正方形である。壁高は、北西が17cm、北東が23cm、南東が20cm、南西が25cmを測る。主軸方位はN-37°-Wである。床の硬質面は中央部に存在する。周溝は幅12～35cm、深さ15cm前後で全周する。

主柱穴はP1からP4に至る4基である。それぞれの規模はP1が掘り方で長径48cm×短径40cm、柱幅10cm、深さ55cm。P2が掘り方で45cm×35cm、柱幅12cm、深さ50cm。P3が掘り方で43cm×38cm、柱幅12cm、深さ56cm。P4が掘り方で44cm×40cm、柱幅14cm、深さ45cmでアタリは明瞭でない。

梯子穴・貯蔵穴は、平面長方形区画に存在する。南東コーナーに寄ったベッド状遺構上に113cm×95cm、高さ6～8cmの長方形区画が存在し、内部には貯蔵穴(P6)が穿たれ、南西には梯子穴(P5)が接する。梯子穴は長径50cm×短径26cmの平面楕円形であり、深さ29cmを計る。貯蔵穴は長径74cm×短径65cmの平面円形で、ベッド状遺構上から地山にかけて50cm掘り込んでいた。

地床炉は北西壁に寄った箇所に構築される。長径93cm×短径68cmの平面楕円形をなし、深さ12cmを測る。覆土は、焼土を主体とし、炭化材を混入した土層である。底部の被熱は厚さ約10cmを測り、硬化していた。

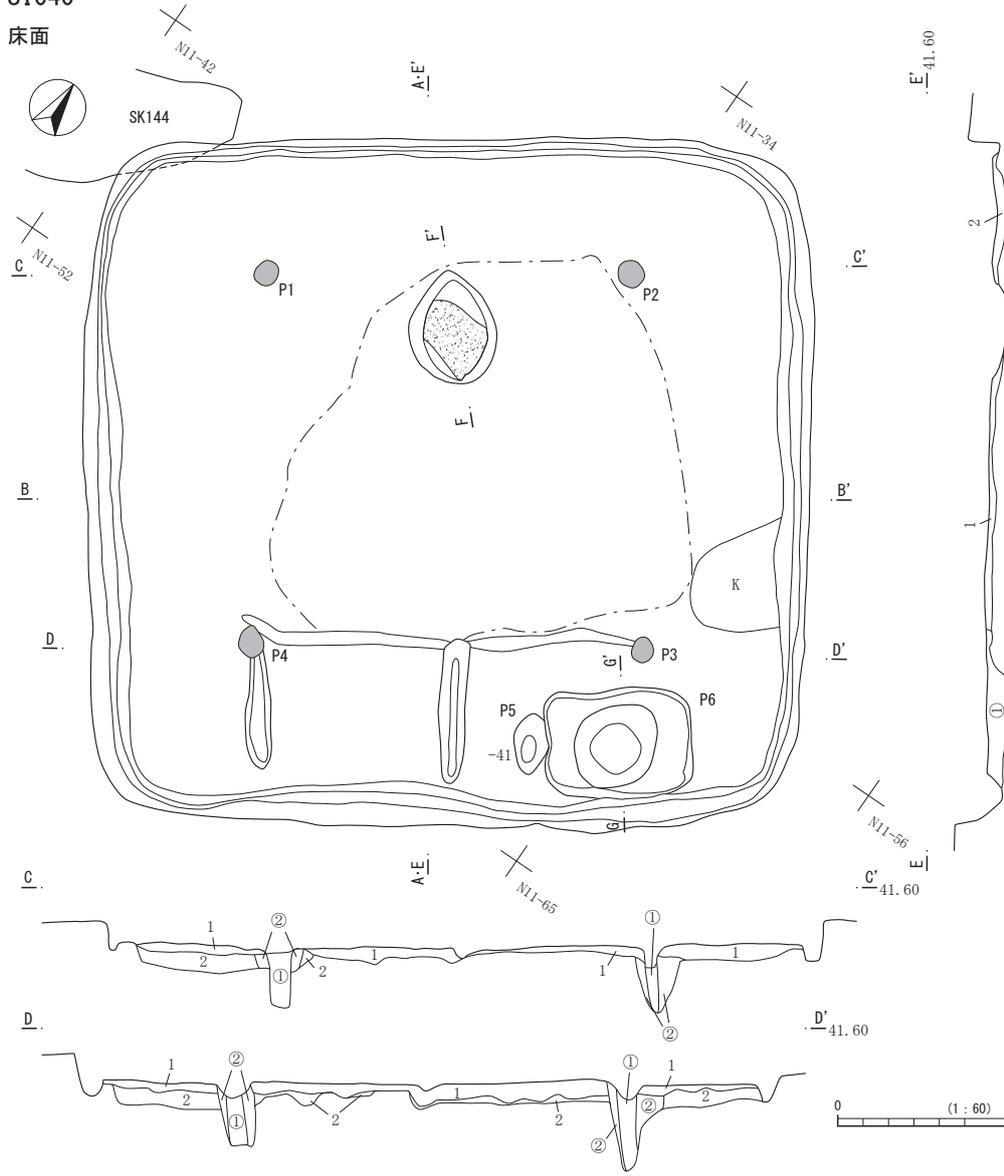
住居掘り方は4面の幅93～200cmの溝状に、地山を5～10cm掘り込んで巡らせていた。ベッド状遺構は南東壁際に存在する。幅は周溝から130～150cm、高さは3～8cmを測る。

覆土は黒褐色土から黒色土に至る4層からなり、第2層の焼土は遺構のほぼ全面を覆って中央部付近では炭化材を内包しつつ床に接している。直下に炭化材が検出された。焼土層は壁際が床から最大30cm浮いた状態で、中央部は床面に着いている。炭化材は中央部より北西壁から北東壁に寄った床面上で多く遺存している。根太はベッド状遺構上でこれに直交して確認された。長さ120cm、幅15～20cm、深さ3～8cmを測る。

遺物は、第1層黒色土においては碎片が少量みられ、第2層焼土層にはほとんどみられず、第3・4層及び貯蔵穴(P6)においてまとまりをもっている。貯蔵穴から、土師器〔3甕、11脚付鉢(埴)〕が出土している。

S1040

床面



S1040 掘り方

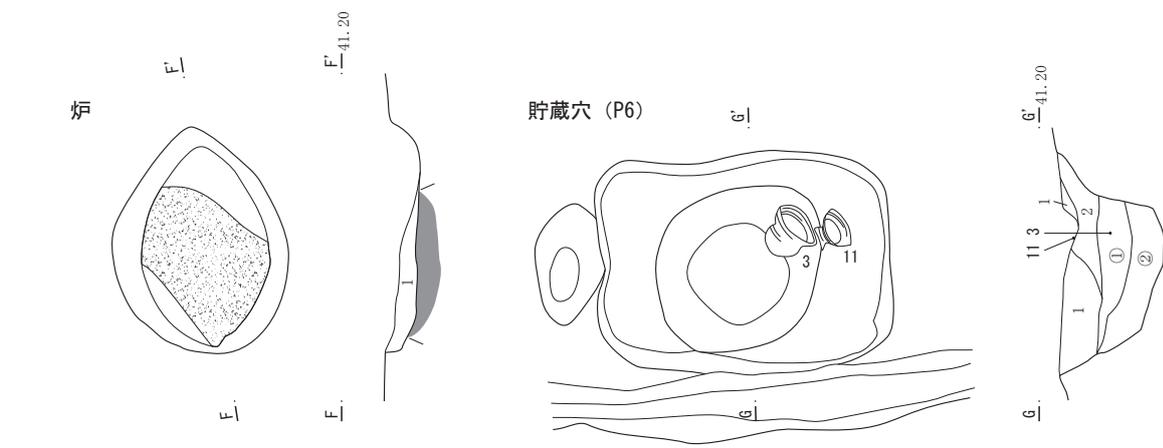
- 1層 7.5VR4/4 褐色土 粘性中、しまり強、ロームブロックφ 2-10mm 主体、黒色土ブロックφ 2-10mm 多量
- 2層 7.5VR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロックφ 2-10mm 中量

S1040 柱穴

- ①層 7.5YR1.7/1 黒色土 粘性弱、しまり弱、灰主体、炭化物φ 2-10mm 少量、炭化材拳大が稀に入る
- ②層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性弱、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 主体

S1040 根太

- ①層 7.5YR2/3 極暗褐色土 ロームブロックφ 2-10mm 多量



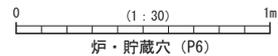
S1040 炉

- 1層 焼土 10R5/8 赤色土 粘性なし、しまり強、地山被熱

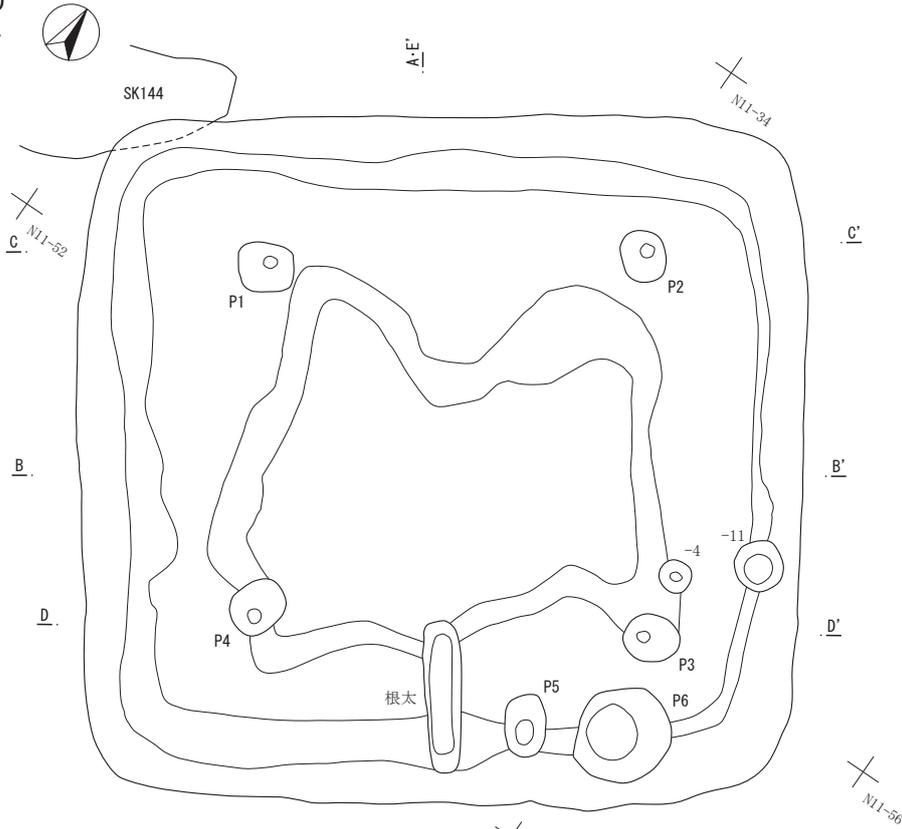
S1040 貯蔵穴 (P6)

- 1層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性中、しまり中、焼土粒子少量
- 2層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性中、しまり中、ローム粒子少量、焼土粒子少量

第 32 図 SI040 (1)



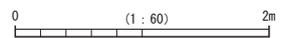
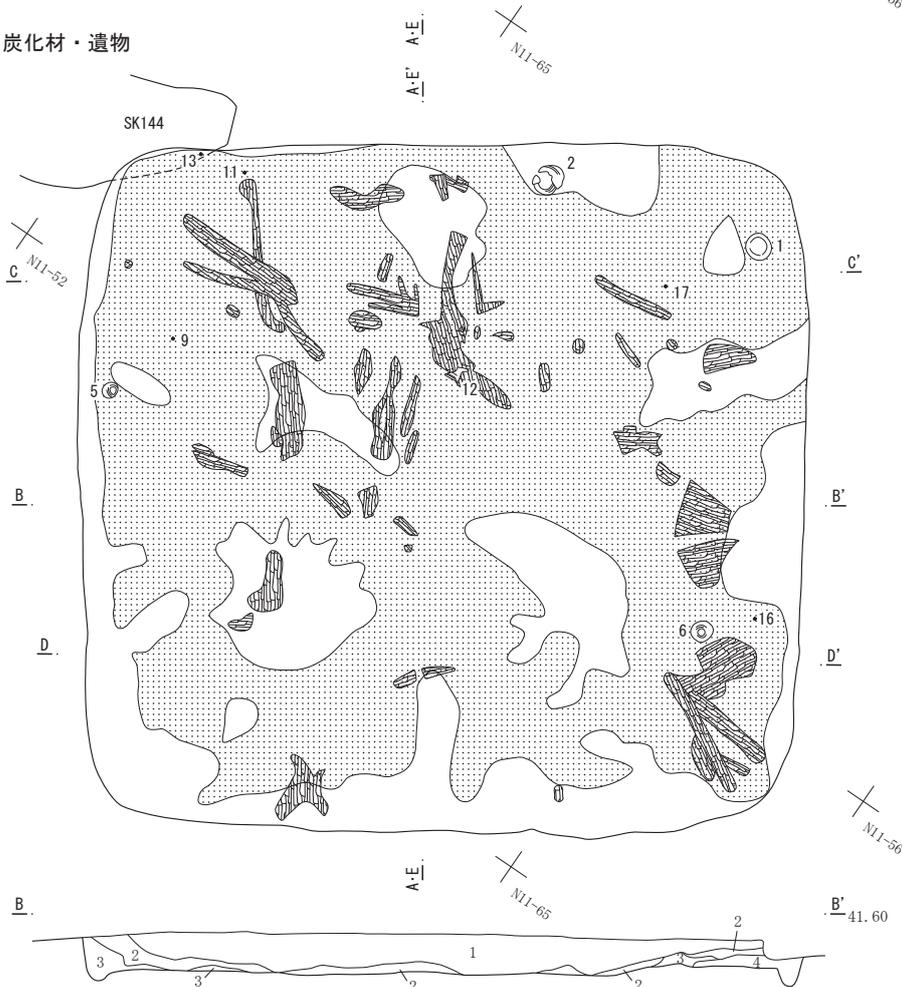
S1040
掘り方



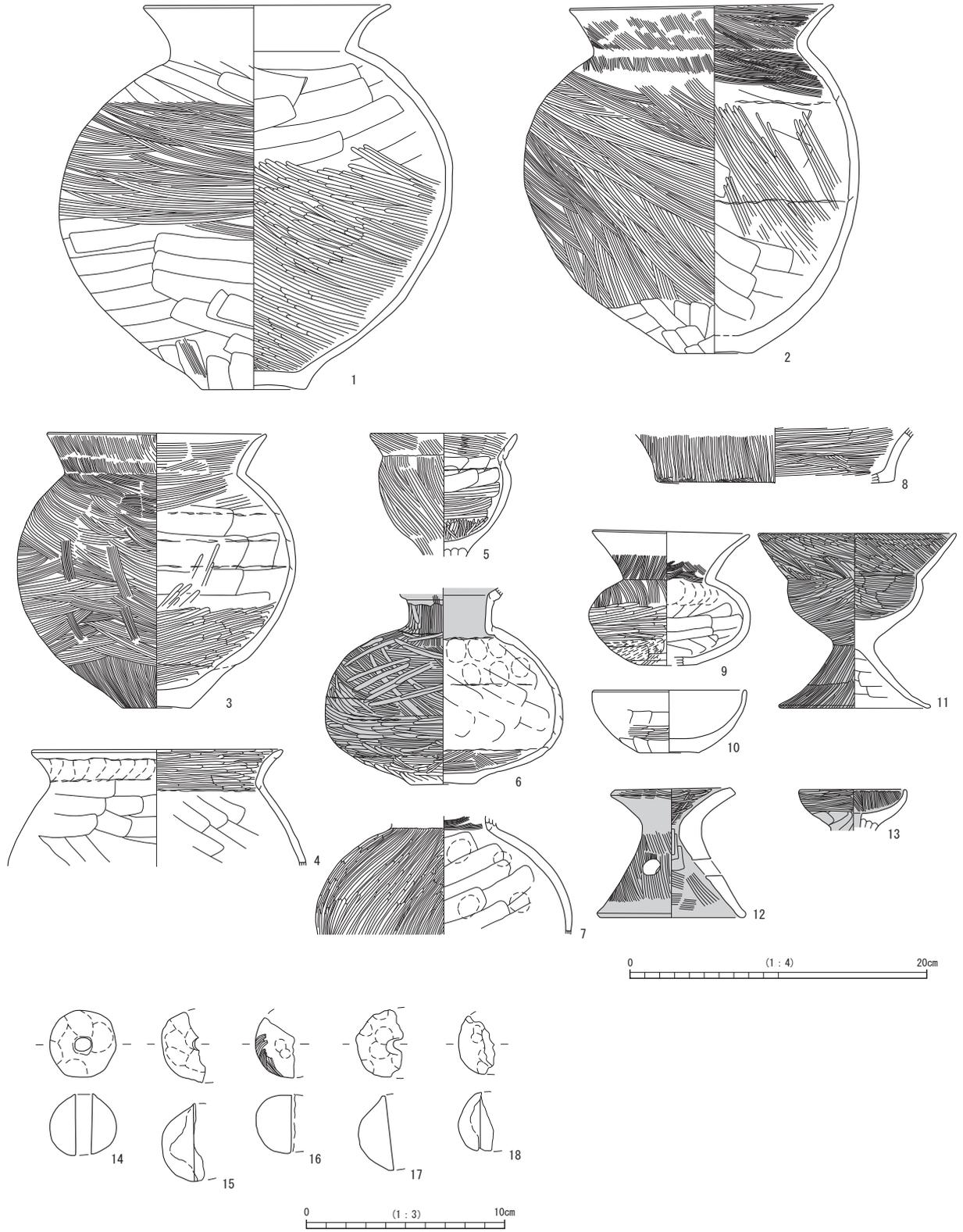
S1040 覆土

- 1層 7.5YR2/3 黒褐色土 粘性中、しまり弱、ロームブロック・粒子φ2-10mm中量、炭化物・粒子φ2-10mm少量、焼土ブロック・粒子φ2-10mm少量、細片遺物が少量ある
- 2層 赤褐色土 粘性なし、しまり強、炭化物・粒子φ2-10mm少量、焼土ブロック・粒子φ2-10mm主体
- 3層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり弱、炭化物・粒子φ2-10mm多量、焼土ブロック・粒子φ2-10mm少量
- 4層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm少量、炭化物・粒子φ2-10mm少量、焼土ブロック・粒子φ2-10mm主体

焼土・炭化材・遺物



第33図 S1040 (2)



第34图 SI040 出土遗物

第 15 表 SI040 出土遺物観察表 (1)

遺物番号	注記番号	種類	器種	残存	口径 器高 底径	重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	2区 0014	土師器	甕	口縁 1/2 欠損	16.5 25.4 7.0	1580.4	胴部は球形、頸部で強く「く」の字に屈曲した後、口縁は緩やかに外反し開く。	底部は平底で胴部下半と共にヘラケズリ、下端付近に部分的に刷毛が確認される。上半頸部直下はナデ整形後に粗い刷毛が施されている。口縁は内外面共に横ナデ。内面上位ナデ整形後に底部にかけてミガキ。	雲母・白色 粒子多い。	内外面 10YR6/4 にぶ い黄橙	良好 二次 焼成 アリ	
2	2区 0015	土師器	甕	口縁 1/2 強・ 胴部 下半	(17.8) 22.9 5.4	1138.6	胴部は球形、最大径をやや上位に有するものの歪みがある。頸部で「く」の字に屈曲した後、口縁は緩やかに外反気味に開く。	底部は平底で板状工具によるケズリ、胴部は刷毛整形、頸部直下はナデ整形後、短い縦方向の刷毛、下端ヘラケズリ、口縁は斜方向の粗い刷毛。内面口縁は粗い横方向の、頸部直下は比較的細かい刷毛、胴部はナデ整形後わずかにミガキが確認される。	雲母・白色 粒子多い。	内外面 10YR6/4 にぶ い黄橙	良好 二次 焼成 アリ	
3	3区 0034	土師器	甕	胴部 一部 欠損	14.6 18.1 4.7	892.1	胴部は球形、頸部で「く」の字に屈曲した後、口縁は緩やかに外反し開く。	底部は平底でヘラケズリ、胴部は斜方向の刷毛、接合痕より下は縦方向の刷毛整形、口縁は二段の細かい刷毛整形。内面口縁から頸部直下にかけて粗い横方向刷毛、胴部上位はナデ整形後わずかにミガキが確認される。下半はミガキ。	雲母・白色 粒子やや多 い。	内外面 10YR5/4 にぶ い黄褐	良好 二次 焼成 アリ	
4	2区 0096	土師器	甕	口縁 1/4	(16.9) <7.8> -	88.2	胴部は球形カ。口縁は頸部で「く」の字に屈曲し緩やかに外反し開く。	外面胴部はヘラケズリ、口縁の整形は粗雑で、輪積痕を磨り消す事も無く指頭による圧痕が廻る。内面胴部はナデ整形、口縁は横ナデ後丁寧なミガキ。	白色粒子や や多い。	内面 10YR4/2 灰黄 褐 外面 7.5YR4/3 褐	良好 二次 焼成 アリ	
5	1区 0016	土師器	鉢 (小型 甕)	口縁 1/2・ 脚台 部欠 損	9.9 <8.3> -	173.95	小型。内面口縁は折返し確認される、胴部は最大径をやや上位に有し下端で窄まる。	外面は口縁～胴部は粗雑な刷毛整形。胴部は板状工具によるナデ、下端はミガキ。	雲母少量。 白色粒子や や多い。	内面 7.5YR4/3 褐 外面 10YR4/2 灰黄 褐	良好 二次 焼成 アリ	
6	3区 0013	土師器	壺	口縁 部欠 損	- <12.9> 4.4	551.5	底部は平底、胴部は潰れた球形を呈し最大径を下位に有す。頸部は直立する。口縁は外傾するものの形状は不明。	外面底部はヘラケズリ、頸部及び胴部は刷毛整形後ミガキ、下半はミガキ、部分的に刷毛を残す。内面基部は細かい刷毛、胴部はナデ整形、上位に指頭圧痕、接合痕より下位は刷毛整形が行われている。	雲母・白色 粒子やや多 い。小礫少 量含む。	内面 7.5YR4/3 褐 外面 10YR5/3 にぶ い黄褐	良好 二次 焼成 アリ	外面赤彩 の痕跡有 り
7	3区下 層一括 0081	土師器	壺	胴部 上半 1/3	- <7.8> 126.2		胴部は球形カ。残存する頸部は強く屈曲している。	外面は丁寧なミガキが施されている。が部分的にわずかに刷毛が確認される。内面頸部は横方向の刷毛、胴部はナデ整形・指頭圧痕が観察される。	黒色粒子微 量。スコリ ア少量。	内面 7.5YR6/6 橙 外面 10YR6/4 にぶ い黄橙	良好 二次 焼成 アリ	
8	床直 0042・ 2区下 層一括 0080	土師器	壺	屈曲 部	- <3.75> 57.4		有段口縁壺の破片資料。屈曲した後緩やかに外反する。	外面はミガキ、下端の屈曲部分にわずかに刷毛が確認される。内面は刷毛後ミガキカ。	雲母・黒色 粒子やや多 い。白色粒 子・白色針 状物質少 量。スコリ ア微量。	内面 10YR6/4 にぶ い黄橙 外面 7.5Y5/4 にぶ い褐	良好 二次 焼成 アリ	脚部内面 以外赤彩

第 16 表 SI040 出土遺物観察表 (2)

遺物番号	注記番号	種類	器種	残存	口径 器高 底径	重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
9	1区 0017	土師器	壺 (埴)	口縁 2/3・ 胴部 下半 1/2 欠損	(10.5) (8.8) (3.5)	210.9	胴部は潰れた球形を呈し、最大径を中位に有す。頸部で窄まり「く」の字に屈曲した後、口縁は外反し大きく開く。	外面胴部はヘラケズリ後ミガキ、上位刷毛、口縁は上位1/3程斜方向の刷毛後横ナデ、1/3は縦方向の丁寧な刷毛。内面胴部はナデ整形、頸部直下は指頭圧痕、口縁は横ナデ後下位刷毛。	雲母・白色粒子やや多い。白色針状物質・スコリア少量。	内面 2.5Y5/2 暗灰黄 外面 2.5Y5/3 黄褐	良好 良好 二次 焼成 アリ	
10	3区 下層 0082・ 0094	土師器	鉢 (埴)	口縁 ～体 部1/7 欠損・ 底部 完形	(10.3) 4.2 4.0	66.7	底部は平底、体部は緩やかに内湾し口縁に至る。	外面底部はヘラケズリ後ナデ、体部はナデを施し、下半は磨いた後手持ちヘラケズリが行われている。	雲母・白色粒子微量。白色針状物質微量。	内面 10YR6/4 にぶい黄橙 外面 2.5Y5/4 黄褐	良好 二次 焼成 アリ	
11	1区 下層 0022・ 0033	土師器	脚付 鉢 (埴)	口縁 1/4 欠損・ 裾部 1/3 欠損	13.5 11.9 10.2	356.2	胴部は浅く最大径を上位に有した後、やや窄まる。口縁は直線的に開き、頸部は沈線状に凹む。	内外面共に丁寧なミガキ、脚台内面はナデ整形。	雲母・白色粒子少量。黒色粒子微量。	内外面 5YR5/4 にぶい赤褐	良好 二次 焼成 アリ	脚部内面 以外赤彩
12	3区 0032	土師器	器台	受部 1/2 欠損	7.9 8.7 9.6	285.3	器受部はやや外反し開く。脚柱は直線的に開いた後、端部でわずかに外反する。貫通孔有り。孔は外から内に3孔穿たれている。器壁は厚い。	外面器受部は全面横ナデが行われているが、口辺に刷毛が残る、脚柱部外面は刷毛、内面も疎らな刷毛整形、裾部は内外面共に横ナデ。	雲母少量。白色粒子多い。	内面 5YR4/4 にぶい赤褐 外面 7.5Y4/2 にぶい灰褐	良好 二次 焼成 アリ	内外面 赤彩
13	1区 0021	土師器	器台	受部 1/3	(7.0) (2.7) -	23	器受部は緩やかに内湾し口辺で短く立つ。貫通孔をほぼ中央に有す。	内外面共にミガキ、外面器受部下端ナデ整形が観察される。	雲母・白色粒子やや多い。	内面 5YR4/3 にぶい赤褐 外面 5YR5/4 にぶい赤褐	良好 二次 焼成 アリ	内外面 赤彩
14	4区 下層 0084	土製品	土玉	完形	縦3.4 横3.4 孔径 0.85	31.2	球形を呈する、ほぼ中央に穿孔。	手・指による整形。	雲母微量。白色粒子少量。	10YR5/3 にぶい黄褐	良好 二次 焼成 アリ	
15	床直	土製品	土玉	1/2	縦4.0 横- 孔-	23.4	球形を呈するものカ。	手・指による整形。	白色粒子少量。	10YR4/3 にぶい黄褐	良好 二次 焼成 アリ	
16	床直 0058	土製品	土玉	1/2	縦2.9 横- 孔-	15	球形を呈するものカ。	手・指による整形。	雲母・白色粒子微量。	10YR3/2 黒褐	良好 二次 焼成 アリ	
17	床直 0041	土製品	土玉	1/2	縦3.8 横- 孔-	17.7	球形を呈するものカ。	手・指による整形。	雲母・白色粒子微量。	10YR4/3 にぶい黄褐	良好 二次 焼成 アリ	
18	3区 下層 0094	土製品	土玉	1/4	縦2.9 横- 孔-	12.8	球形を呈するものカ。	手・指による整形。	白色粒子微量。	10YR5/3 にぶい黄褐	良好 二次 焼成 アリ	

SI041 (第 35 図、第 17 表、Ph. 4・5)

調査区西端付近・大グリッド N11 の中央からやや東よりに位置しており、床面のみが検出された。南東コーナーと北西隅で攪乱と重複している。規模は、主軸が 3.40 m、副軸が 3.36 m であり、平面正方形を呈する。梯子穴・貯蔵穴・周溝は確認されなかった。主軸方位は N-40° -W である。

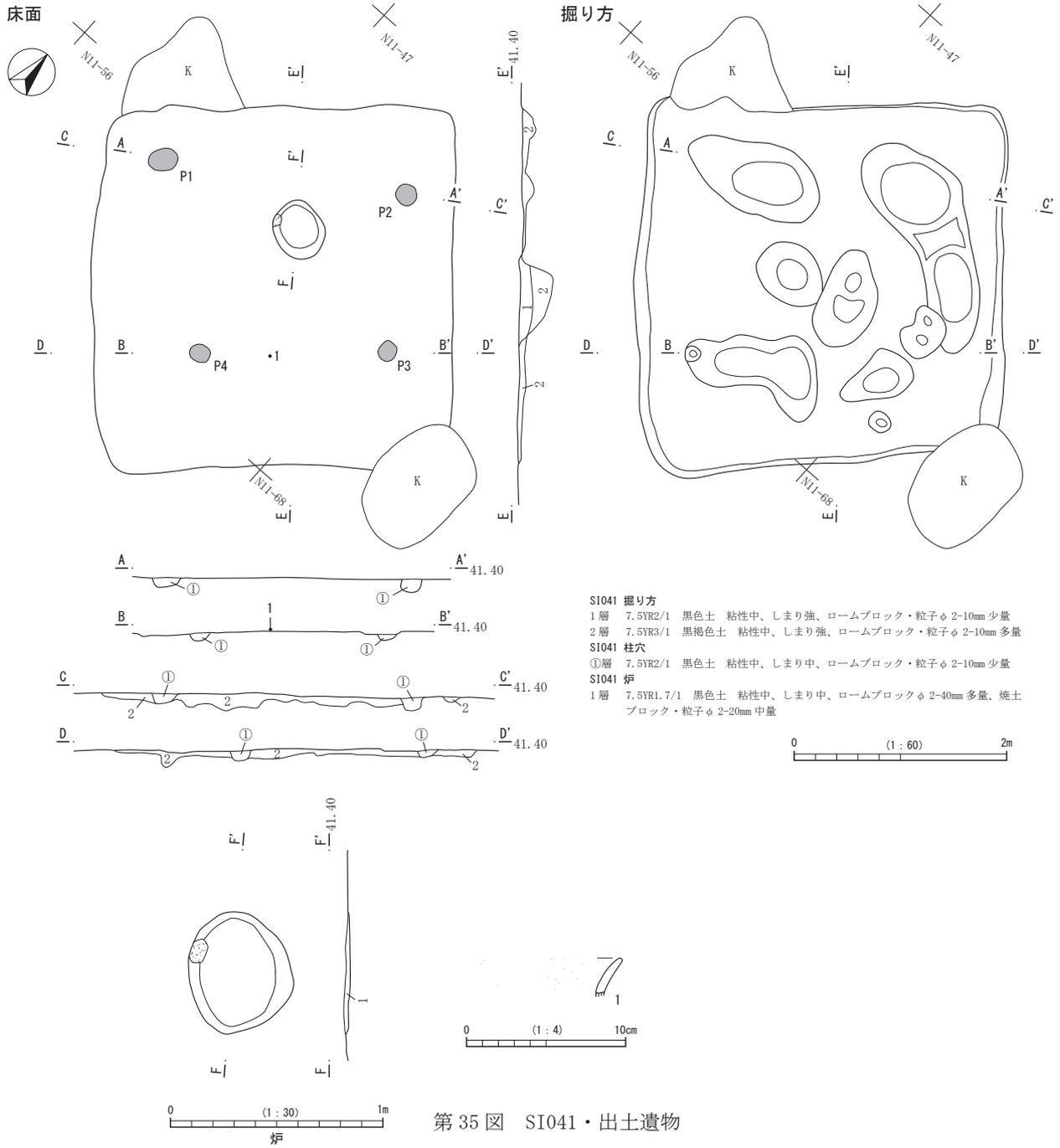
明瞭な主柱穴とは言い難いが、相当する位置に 4 基のピットが確認された。明瞭な掘り方はなく、底部にアタリはない。それぞれの規模は P1 が長径 26 cm×短径 20 cm、深さ 8 cm。P2 が 20 cm×18 cm、深さ 14 cm。P3 が 18 cm×16 cm、深さ 6 cm。P4 が 19 cm×17 cm、深さ 13 cm である。

地床炉は 58 cm×46 cm、深さ 4 cm で、覆土は焼土粒子を少量混入する黒色土で単層である。住居掘り方は 7 つ

の土坑状の掘り込みで構成される。床面は耕作により削平されており硬質面は検出されなかった。

遺物は床面から土師器破片が少量出土している。

SI041



第 35 図 SI041・出土遺物

第 17 表 SI041 出土遺物観察表

掲載番号	注記番号	種類	器種	残存	口径 器高 底径	重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	0001	土師器	甕	口縁部 細片	- - -	7.4	わずかに外反する口縁部細片。	外面は縦方向、内面は斜方向の刷毛整形。	白色粒子・白色針状物質微量。	内面 7.5YR5/4 にぶい褐色 外面 10YR3/1 黒褐色	良好 二次焼成 アリ	

SI042 (第36・37図、第18表、Ph.5)

調査区西端付近・大グリッドN12の南東に位置する。床面のみが確認された。また、本住居跡はソフトローム層を掘り込まない。規模は、主軸が4.75m、副軸が4.95mの平面正方形である。主軸方位はN-65°-Wである。床の硬質面は4柱穴間である1号炉から入口にかけて存在する。周溝は幅8~15cm、深さ3~8cmで全周する。

主柱穴の規模は、P1は柱幅15cm、掘り方で長径30cm×短径25cm(残存部)、深さ7cm。P2が20cm×12cm、深さ10cm。P3が柱幅13cm、掘り方で35cm×28cm、深さ10cm。P4が柱幅15cm、掘り方で30cm×25cm、深さ7cmである。梯子穴・貯蔵穴は確認されなかった。

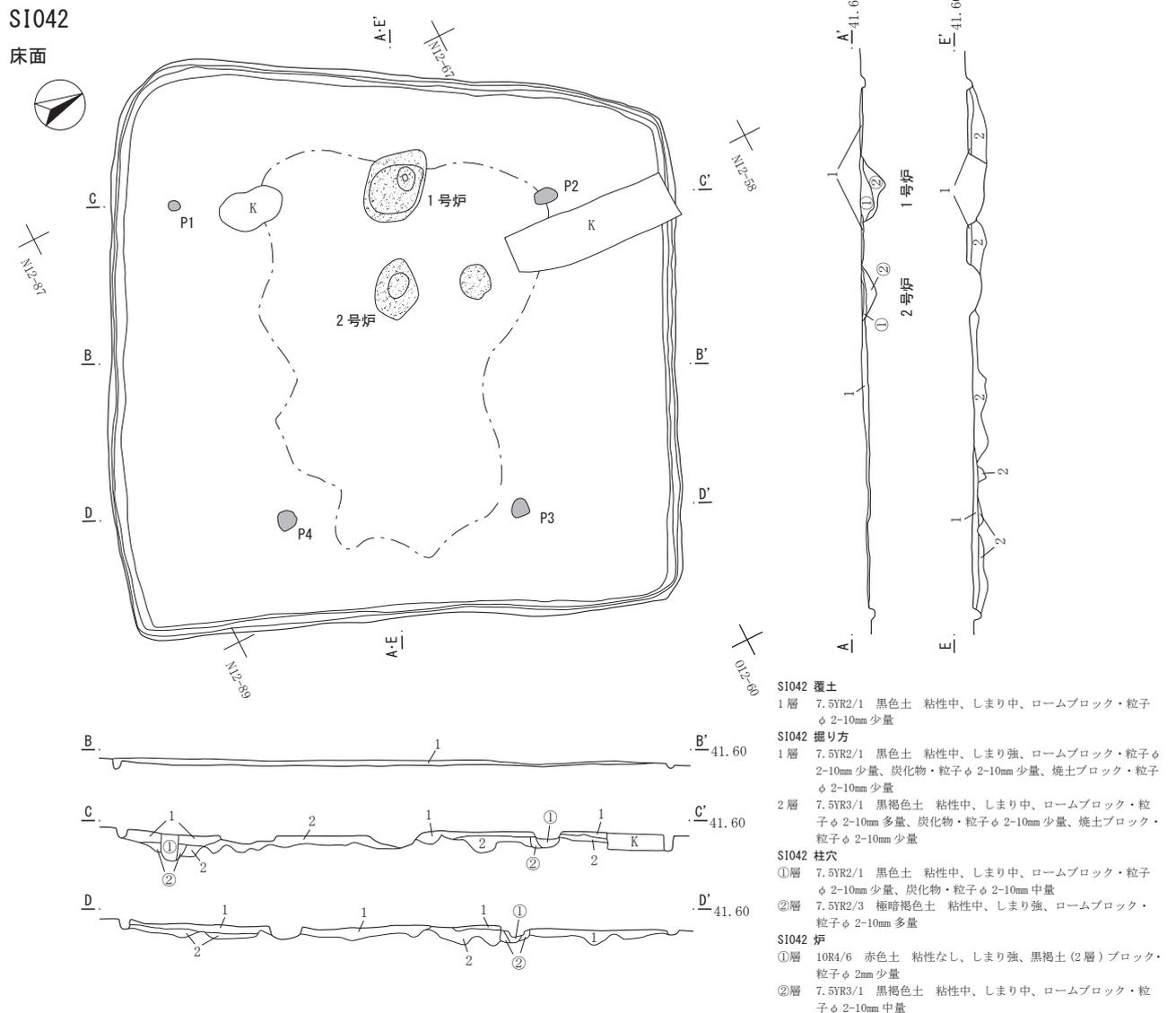
地床炉は2基確認された。1号炉は75cm×52cm、深さ52cm。2号炉は55cm×40cm、深さ12cm。また、2号炉右手に幅32cm×26cmの範囲で床が被熱している。

住居掘り方は、幅120~170cm、深さ1~10cm前後で4面の壁下を全周している。

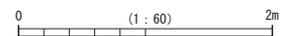
遺物は床面から土師器が少量出土している。

SI042

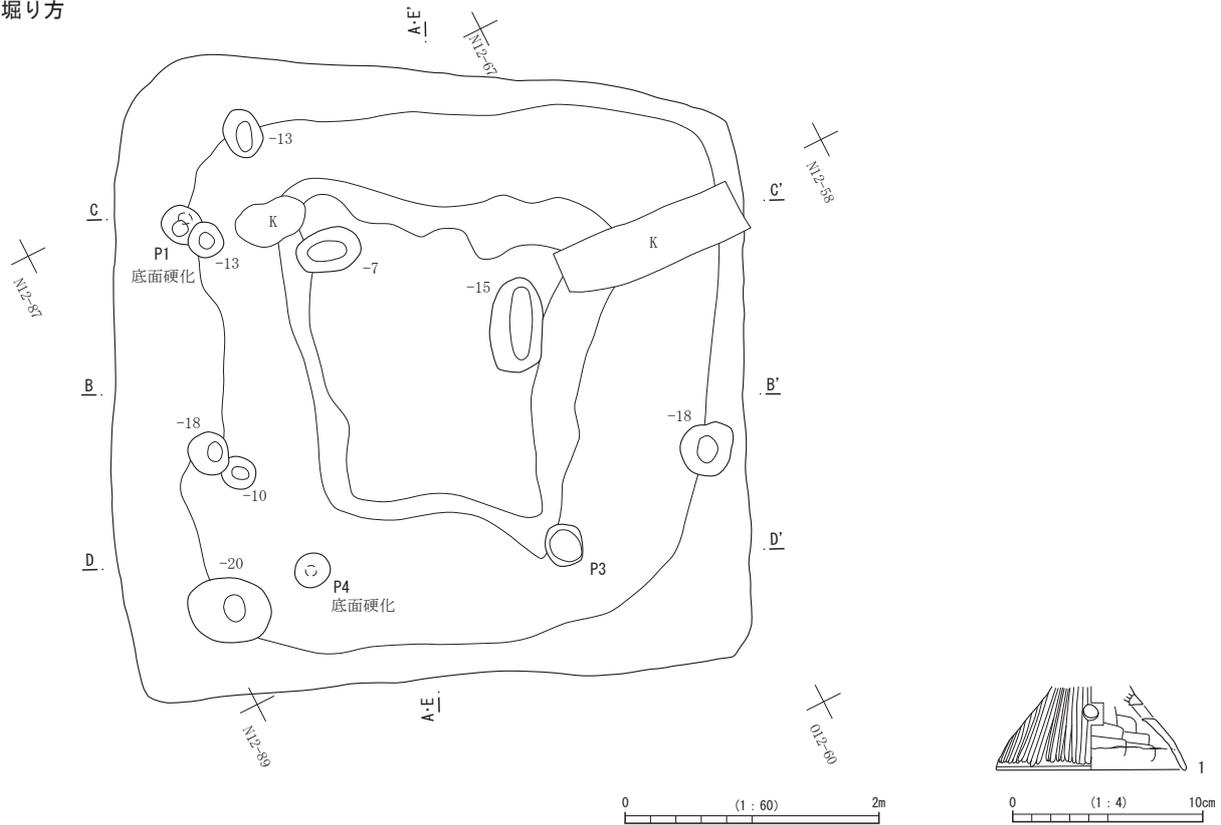
床面



第36図 SI042 (1)



掘り方



第37図 SI042 (2)・出土遺物

第18表 SI042 出土遺物観察表

掲載番号	注記番号	種類	器種	残存	口径 底径 器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	0013	土師器	高坏	脚部 1/3	- <4.5> (9.9)	28.6	脚部はわずかに内湾気味。孔は外から内へ穿たれているが単位は不明。	外面は縦方向の丁寧なミガキ、内面はナデ整形。裾は内外面共に横ナデ。	白色粒子微量。白色針状物質少量。	内外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好	穿孔アリ

SI043 (第38・39図、第19表、Ph.6・19)

調査区南壁際中央付近・大グリッド012の南よりに位置する。規模は、主軸が4.70m、副軸が4.60mの平面正方形である。壁高は、北西が24cm、北東が28cm、南東が22cm、南西が14cmを測る。主軸方位はN-23°-Wである。床の硬質面は4柱穴間の床面及びベッド状遺構の一部に存在する。周溝は幅14～34cm、深さ2～11cmで全周する。

支柱穴の規模は、P1が柱幅18cm、掘り方で長径45cm×短径40cm、深さ14cm。P2が柱幅12cm、掘り方45cm×45cm、深さ14cm。P3が柱幅25cmで、掘り方がなく25cm×20cmで深さ9cm。P4が柱幅20cmで深さ20cmを測る。梯子穴(P5)の確認は床面では明瞭でなく、掘り方で検出された。規模は58cm×42cm、深さ25cmを測る。貯蔵穴(P6)は85cm×65cmの平面長方形で深さ5cmを穿った浅い掘り込みの中央内部に48cm×46cmの平面円形ピットを深さ34cm掘り込んでいる。

地床炉は64cm×57cmの平面円形で、8cmの深さで穿たれる。

ベッド状遺構は北西壁際に幅120cmで確認され、床面からの高さは2cmを測る。

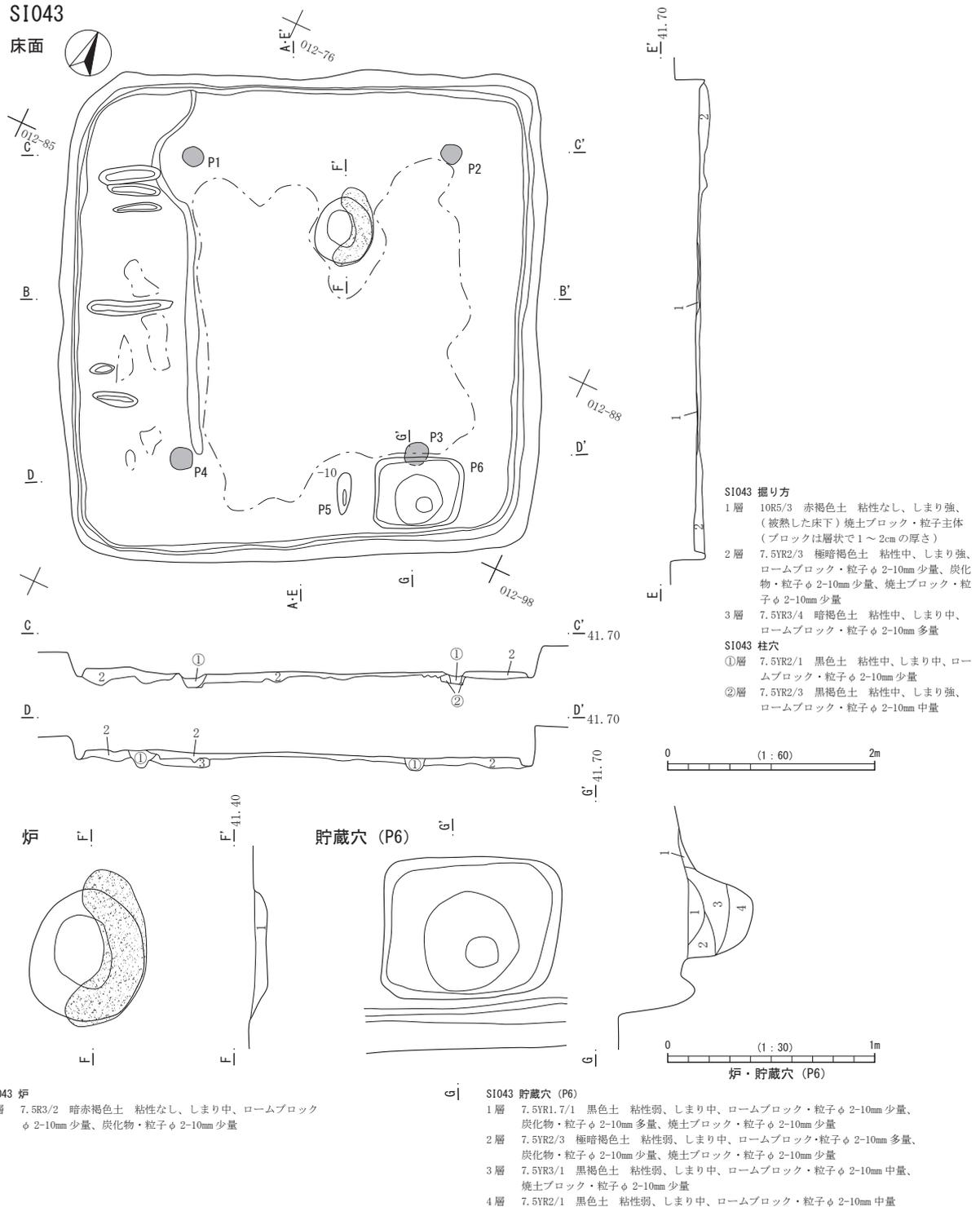
覆土は住居の炎上に伴う崩落による人為堆積の様相を示している。焼土は、厚さ5～10cmで、ほぼ全面を覆っており、遺構中央部では床に接し、壁際では弓なりに20cm以上浮いた状態で堆積している。炭化材は南西壁・南東壁際に検出された。大半が焼土層下と床面において検出されている。壁際では5cm前後、中央部では床から

1 cm前後浮いた状態で検出された。

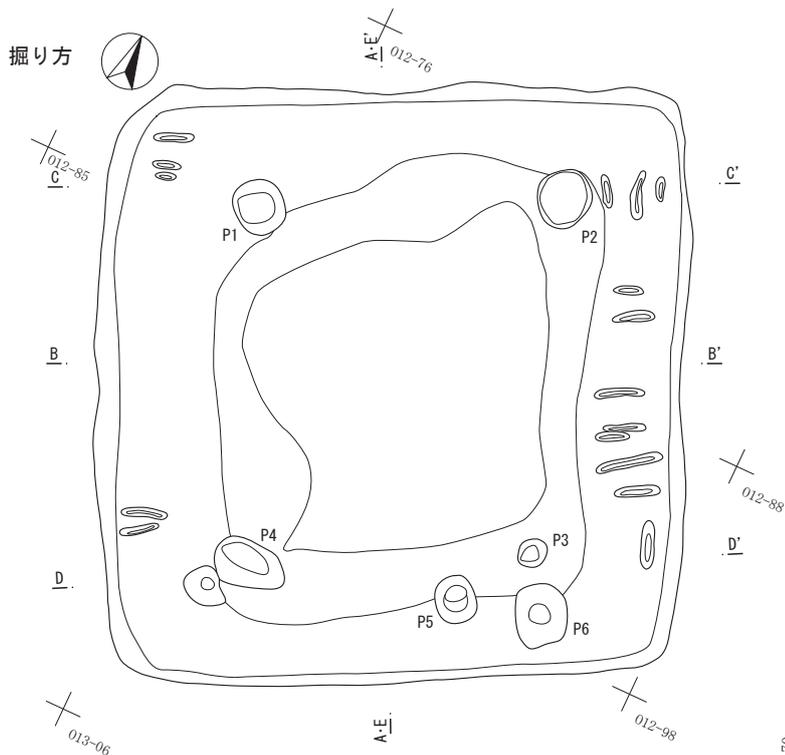
根太は、南西壁際のベッド状遺構上で、横に置いた状態（副軸方向）、さらに溝状に穿った掘り方において、主軸方向及び副軸方向で、主に北東壁において検出された。幅 5 cm前後、深さ 5 cm前後である。

住居掘り方は、中央部で 5 cm弱、4 面の壁下を 110 cm× 160 cmの規模で深さ 10 cm弱の掘り込みがあり、壁下を溝状に巡っている。

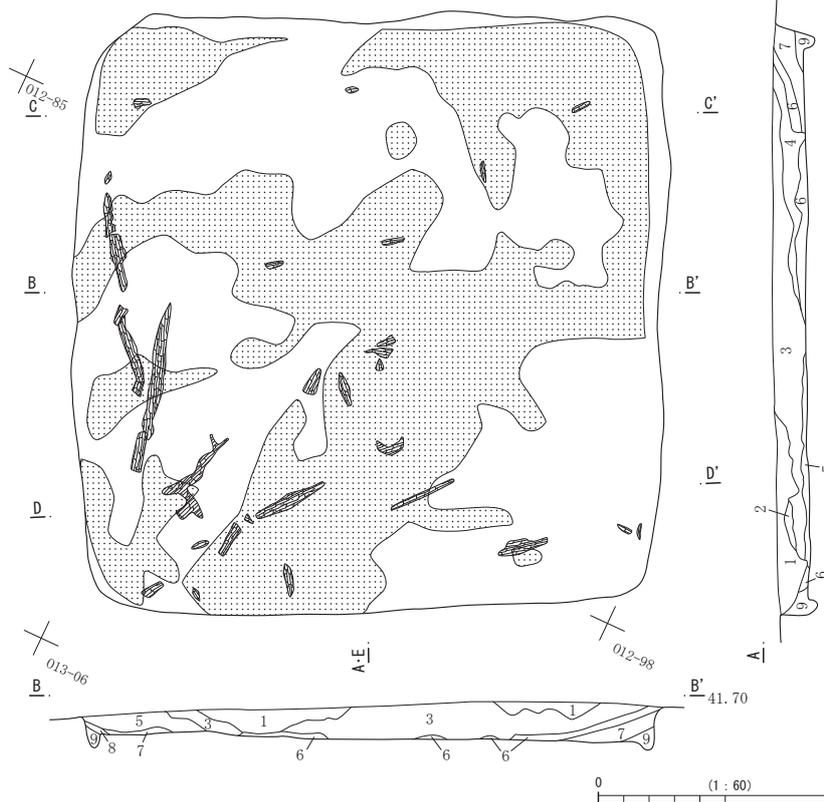
遺物は覆土中から床面にかけて土師器が少量出土している。



第38図 SI043 (1)



焼土・炭化物・遺物



SI043 覆土

- 1層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm少量、炭化物・粒子φ2-10mm中量、焼土ブロック・粒子φ2-10mm少量
- 2層 7.5YR1.7/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm少量、炭化物・粒子φ2-10mm少量
- 3層 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm少量、炭化物・粒子φ2-10mm少量、焼土ブロック・粒子φ2-10mm少量
- 4層 2層に類似 黒色土 粘性中、しまり中
- 5層 1層に類似 黒色土 粘性中、しまり中
- 6層 10R4/6 赤色土 粘性なし、しまり強、炭化物・粒子φ2-10mm少量、焼土ブロック・粒子φ2-10mm少量(層状ブロックで主体をなす)
- 7層 2層に類似 黒色土 粘性中、しまり中
- 8層 10R3/2 暗赤褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ2-10mm少量、炭化物・粒子φ2-10mm中量、焼土ブロック・粒子φ2-10mm中量
- 9層 1層に類似 黒色土 粘性中、しまり中

第39図 SI043 (2)・出土遺物

第19表 SI043 出土遺物観察表

掲載番号	注記番号	種類	器種	残存	口径 底径 器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	3区下層一括0008	土師器	壺	口縁部	(18.2) <5.4> -	29.3	折返し口縁。緩やかに外反し開いた後、口辺で受け口となる。	内外面に共にミガキ、外面口縁は羽状細縄文、折返し部分端部は貝殻による刺突カ。	白色粒子少量。白色針状物質・雲母微量。	内面 5YR4/4 にぶい赤褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	内面赤彩

SI044 (第40～42図、第20表、Ph. 7・20)

調査区は調査区西端付近・大グリッドP・Q12の南よりに位置する。規模は、主軸が5.75 m、副軸が5.60 mの平面正方形である。壁は遺存せず、耕作により床面の大部分が削平された状態で確認された。このため硬質面の状況は不明である。主軸方位はN-75° -Eである。周溝は幅8～16 cm、深さ5 cm前後で全周する。

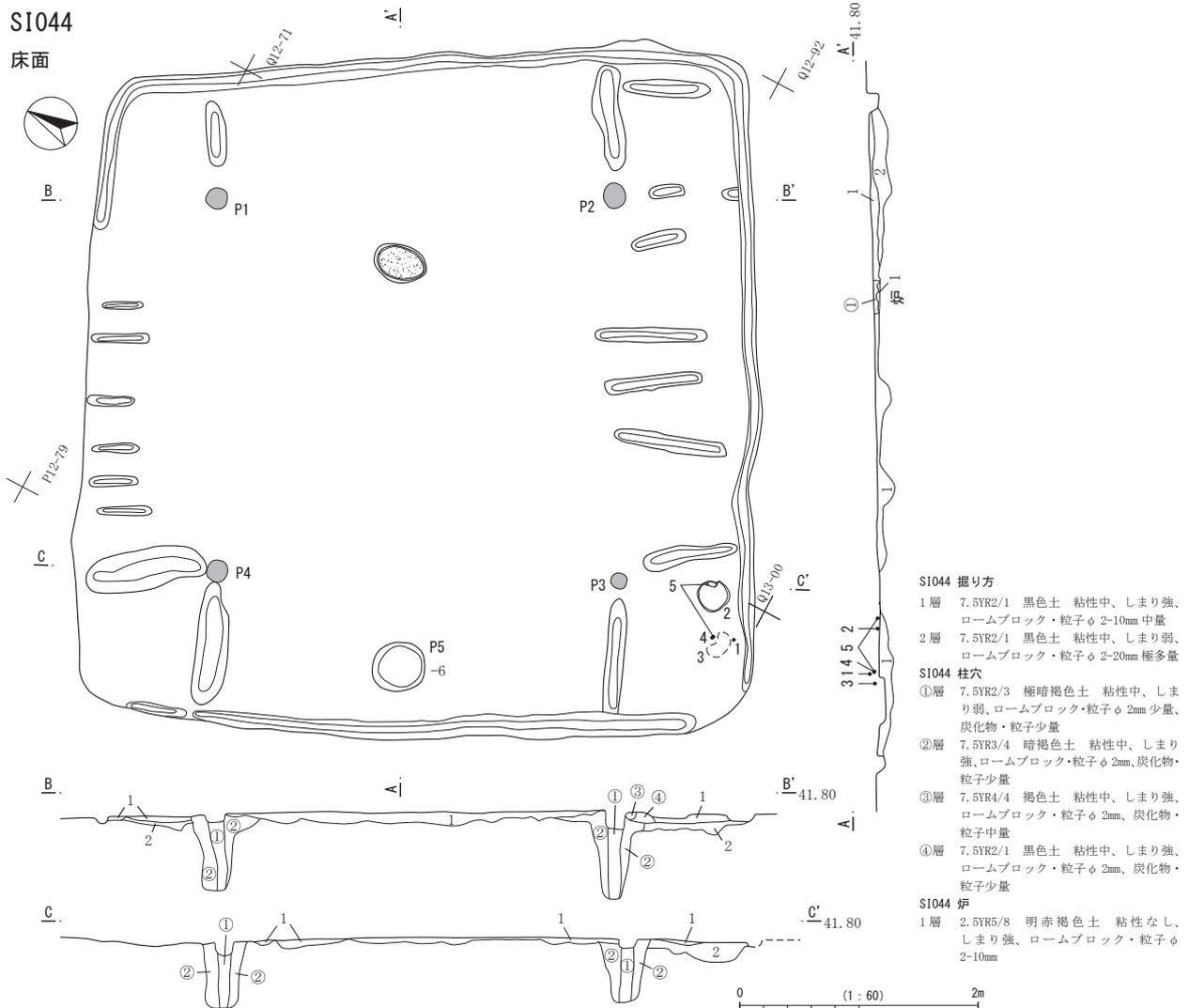
主柱穴の規模は、P1が柱幅18 cm、掘り方で長径70 cm×短径60 cm、深さ65 cm。P2が柱幅18 cm、掘り方で55 cm×48 cm、深さ52 cm。P3が柱幅13 cm、掘り方で42 cm×38 cm、深さ53 cm。P4が柱幅18 cm、40 cm×36 cm、深さ57 cmである。

梯子穴(P5)は45 cm×40 cmの平面円形で深さ6 cmと、痕跡をとどめるのみであった。貯蔵穴(P6)は85 cm×45 cmの平面楕円形をした、深さ17 cmの掘り込みが北西コーナー付近で検出されている。P6は掘り方調査の段階で確認されたが、本住居跡では少ない遺物量ながら、上層には台付甕の破片がまとまって検出されており、他の住居跡の例から、貯蔵穴と判断した。

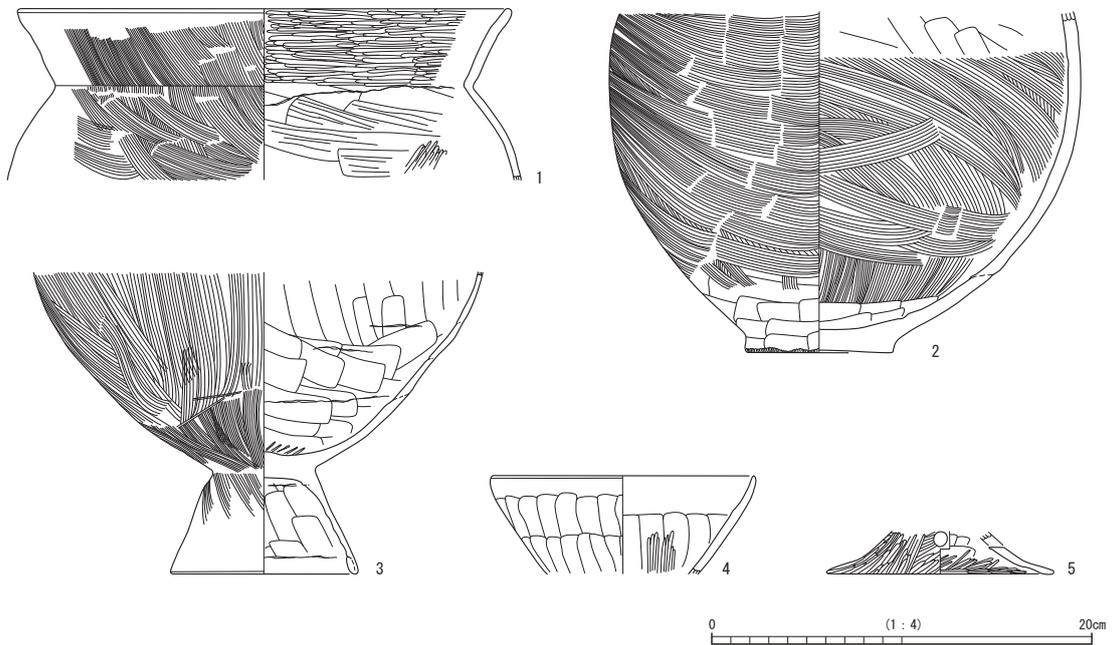
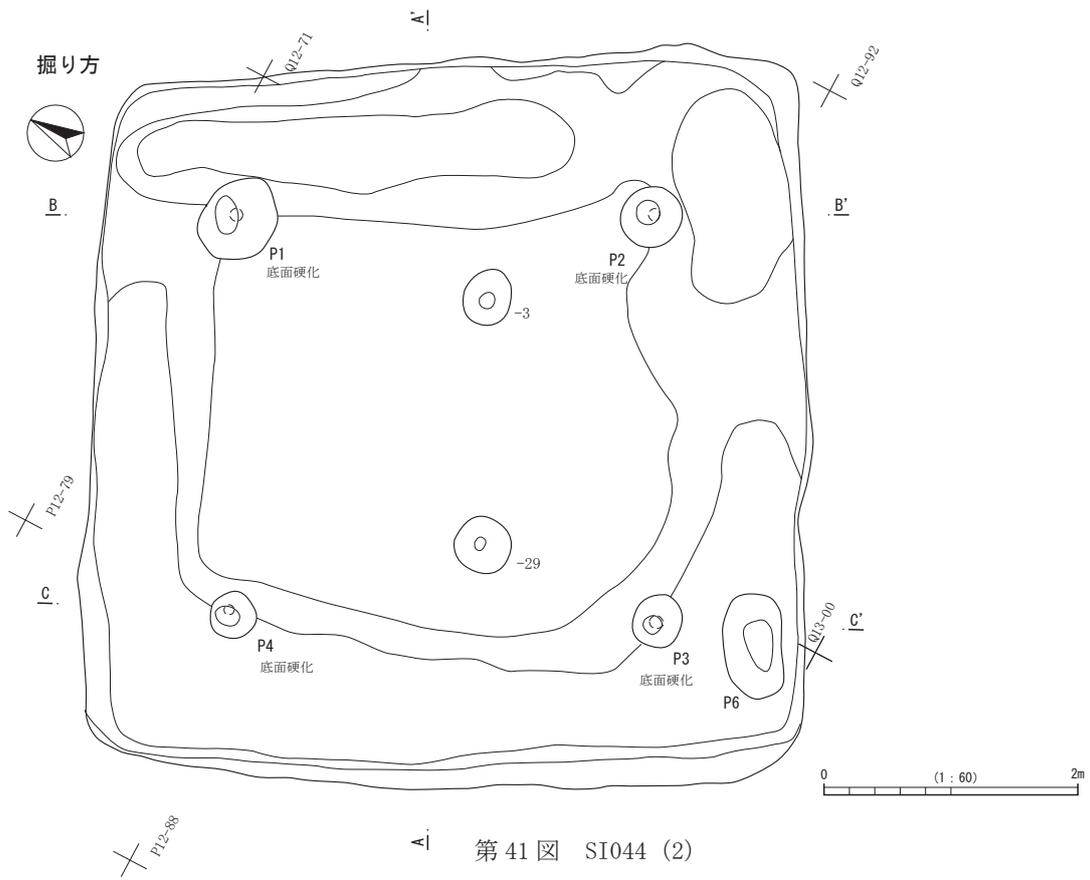
地床炉は48 cm×35 cmで火床面までは4.8 cm、火床面下では3.6 cmの掘り込みがある。

住居掘り方は幅100～130 cm、深さ5 cm前後の規模で四壁の下を巡る。根太は長さ35～85 cm、幅5～15 cm、深さ5 cm弱の規模のものを北西壁及び南東壁際で大半を検出した。壁に対して副軸方向に配置されている。

各主柱穴を基点に、幅17～35 cm、深さ5 cm弱の間仕切り溝が存在する。



第40図 SI044 (1)



第 20 表 SI044 出土遺物観察表

掲載番号	注記番号	種類	器種	残存	口径 器高 底径	重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	3区 上層 0005	土師器	甕	口縁部 1/8	(25.7) <9.1> -	97.5	胴部は球形カ、口縁は頸部で「く」の字に屈曲した後直線的に開き、口辺でわずかに内湾する。	外面胴部は刷毛、口縁は刷毛整形後、口辺横ナデ。内面は板状工具によるナデ、口縁は横方向の丁寧なミガキ。	白色粒子やや多い。小礫含む。	内面 7.5YR5/3 にぶい褐 外面 10YR5/3 にぶい黄褐	良好 二次 焼成 アリ	
2	3区 上層 0003	土師器	甕	胴部 下半～ 底部	- <18.0> 7.6	1009.9	底部は平底、円盤状でやや高さがある、胴部は球形カ、下端部に接合痕を有す。	外面底部無調整、わずかにヘラケズリが確認されるのみ、胴部は丁寧な刷毛、下端はナデ、底部端部に刷毛目有り。内面胴部上位にナデ整形を施した後刷毛、底部付近はナデ。	雲母・白色粒子・黒色粒子少量。スコリア微量。	内外面 10YR5/4 にぶい黄褐	良好 二次 焼成 アリ	
3	0006・ 3区 上層 0004	土師器	台付 甕	胴部上 半欠損	- <16.0> 9.5	421.9	胴部は球形カ、下端に接合痕を有す。器壁は薄い。脚台は直線的に開くが端部でやや内湾する。	外面胴部は刷毛、脚台は斜方向の疎らな刷毛。胴部内面はナデ整形、底部に木口痕有り、脚台はナデ、端部は折り返される。	黒雲母・白色粒子多い。小礫含む。	胴部 内外面 10YR4/1 褐灰 脚部 内外面 10YR6/3 にぶい黄橙	良好 二次 焼成 アリ	S字甕 C類
4	3区 上層 0003・ 下層 一括 0003	土師器	高坏	口縁～ 胴部 1/3・ 底部 欠損	(13.8) <5.2> -	55.2	体部は直線的に開き、口縁でわずかに内湾する。	外面ヘラケズリ、内面ナデ整形、部分的にミガキ有り。口縁は内外面共に横ナデ。	雲母微量。 白色粒子・ 白色針状物 質少量。	内外面 10YR6/3 にぶい黄橙	良好 二次 焼成 アリ	
5	3区 上層 0003・ 3区 掘方 0004	土師器	高坏	裾部 1/3	- <2.3> (11.8)	29.6	ラップ状に大きく開き裾部で水平に近くなる。穿孔は外から内に行われているが単位は不明。	外面ミガキ、内面はナデ整形後ミガキ、裾部は横方向のミガキが廻る。	雲母・白色粒子・白色針状物質微量。	内外面 10YR6/4 にぶい黄橙	良好 二次 焼成 アリ	穿孔アリ

SI045 (第 43～46 図、第 21・22 表、Ph. 7～9・20・21)

調査区西端付近、大グリッド Q12 のやや南西よりに位置する。規模は、主軸が 6.97 m、副軸が 6.66 m の平面正方形である。壁高は北西が 38 cm、北東が 34 cm、南東が 34 cm、南西が 28 cm を測る。主軸方位は N-21° -W である。硬質面は 4 柱穴間床面とベッド状遺構上面に存在する。周溝は幅 13～28 cm、深さ 10 cm 前後で全周する。

主柱穴の規模は、P1 が柱幅 14 cm、掘り方で径 32 cm×32 cm、深さ 48 cm。P2 が柱幅 13 cm、掘り方で 53 cm×53 cm、深さ 38 cm。P3 が柱幅 11 cm、掘り方で 70 cm×63 cm、深さ 38 cm。P4 が柱幅 14 cm、掘り方で 69 cm×52 cm、深さ 37 cm である。

梯子穴・貯蔵穴は、コの字形をしたベッド状遺構の南東壁際に構築されている。梯子穴 (P5) は 48 cm×34 cm の平面楕円形で、深さ 20 cm である。貯蔵穴 (P6) は、96 cm×84 cm で 5 cm 前後掘り込んだ平面方形区画の内を、さらに 60 cm×48 cm の平面方形に掘り込んで設けられており、深さは 35 cm を測る。

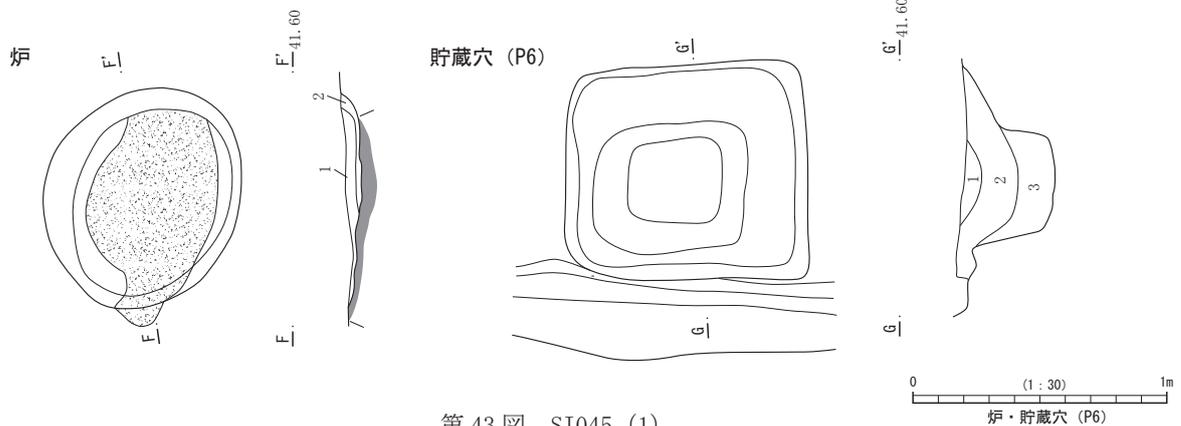
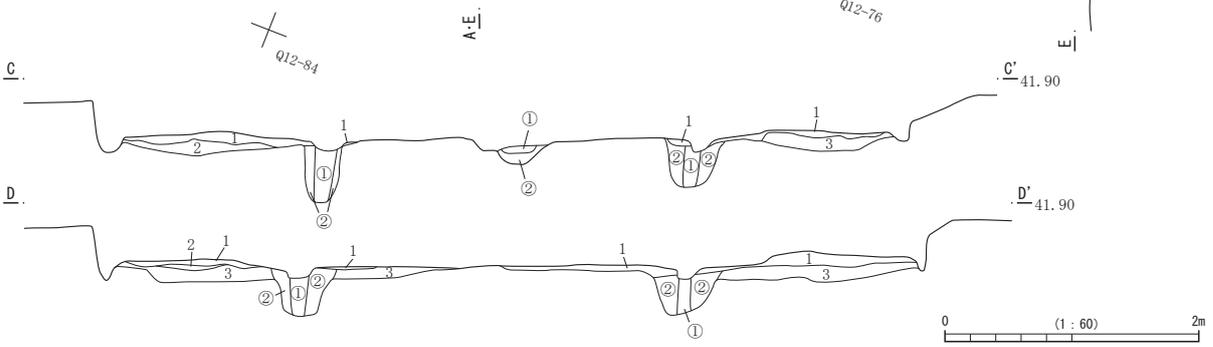
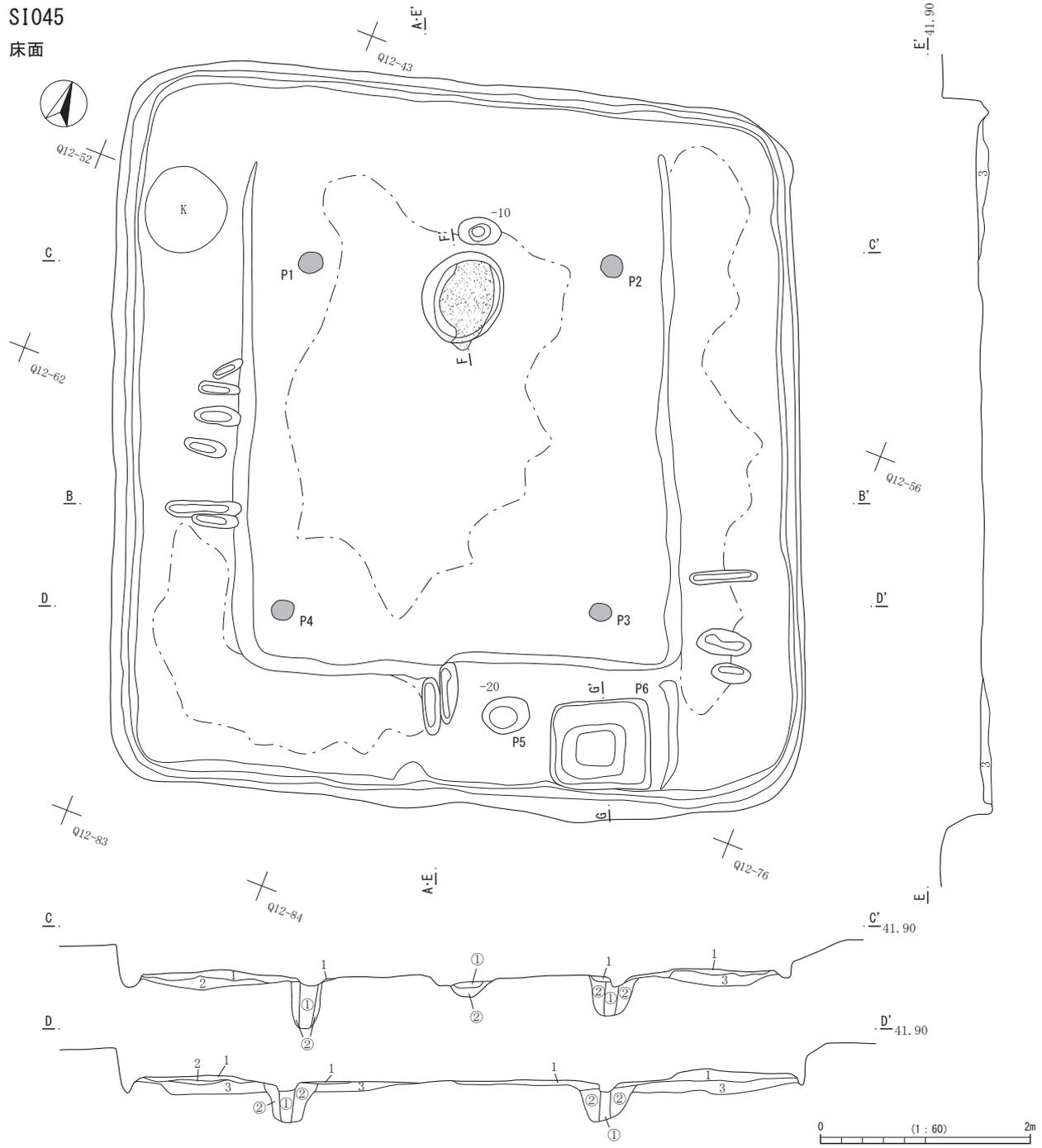
地床炉は 92 cm×76 cm の平面楕円形で深さ 6 cm を測る。炉床は、5 cm ほど地山が被熱を受けている。

ベッド状遺構は、主軸方向の奥側である北西壁を除く 3 方に位置している。幅は 110～120 cm、高さは 6 cm 未満である。

住居掘り方は、幅 150～185 cm、深さ 15 cm 前後で四壁下を巡る。

SI045

床面

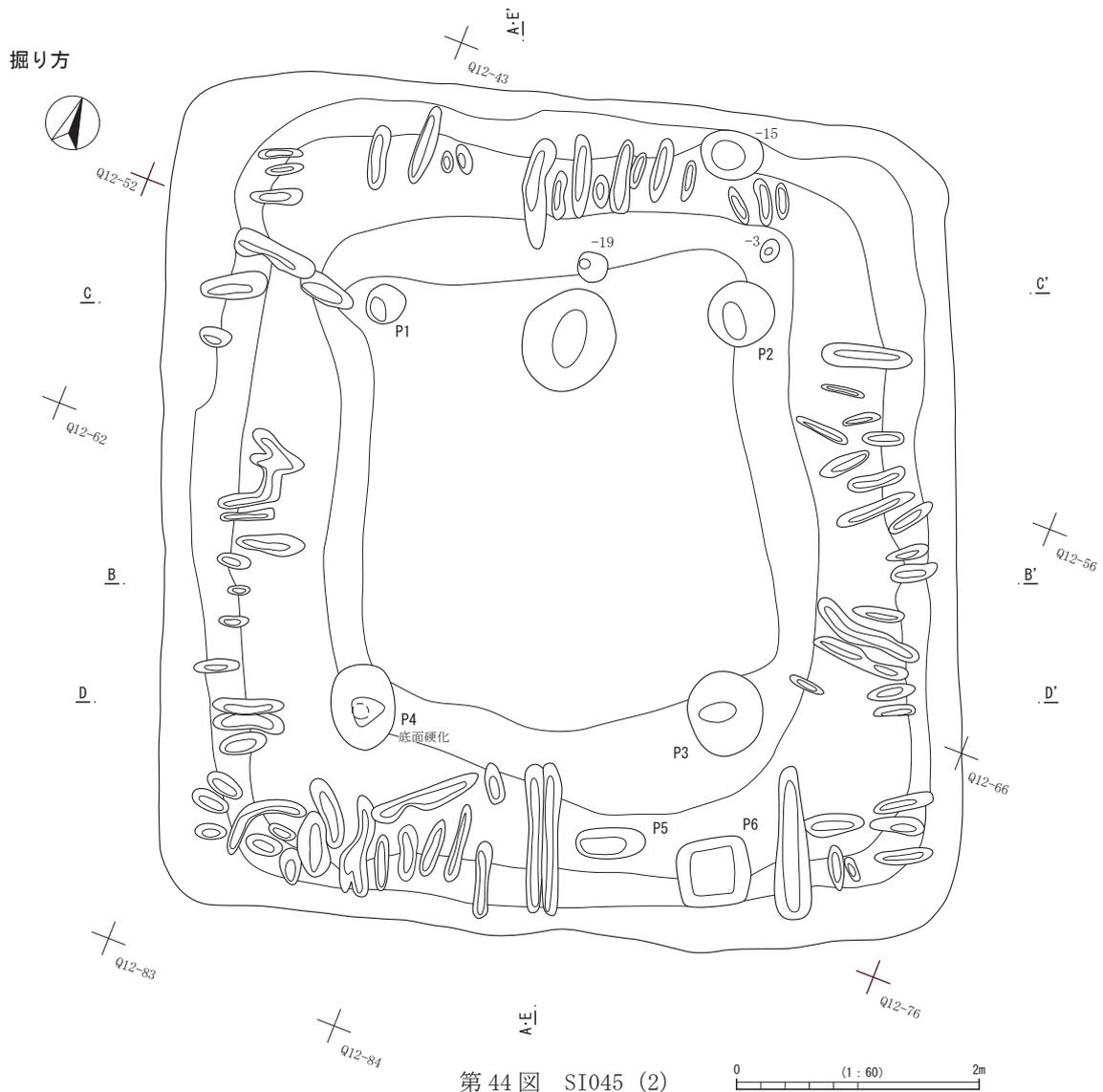


第43図 SI045 (1)

根太はベッド状遺構の長軸に対して直行した形状で配置されている。長さ 35 ~ 125 cm、幅 8 ~ 30 cm、深さは概ね 5 cm 前後を測り、ベッド状遺構上面と掘り方において検出される。ベッド状遺構上では少なく、掘り方で多く検出された。

覆土は、極暗褐色土から黒褐色土に至る人為堆積 6 層からなっている。焼土は第 5 層で、厚さ 10 cm 前後を測る。壁際・確認面上面から中央部床面にほぼ接し、弓なりにたわんだ状態で、検出された。遺構のほぼ全体を覆っている。炭化材の遺存は悪く、焼土層の下から検出されている。

遺物は、焼土層上面のものはほぼ碎片で、まとまっているものは焼土層の下面・床面上から検出されている。



第 44 図 SI045 (2)

SI045 掘り方

- 1 層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性中、しまり強、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量、炭化物・粒子φ 2-10mm 多量、焼土ブロック・粒子φ 2-10mm 少量
- 2 層 7.5YR4/4 褐色土 粘性中、しまり強、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 多量
- 3 層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量、炭化物・粒子φ 2-10mm 多量

SI045 柱穴

- 1 層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり強、炭化物・粒子φ 2-10mm 多量、焼土ブロック・粒子φ 2-10mm 少量
- 2 層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性中、しまり強、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量

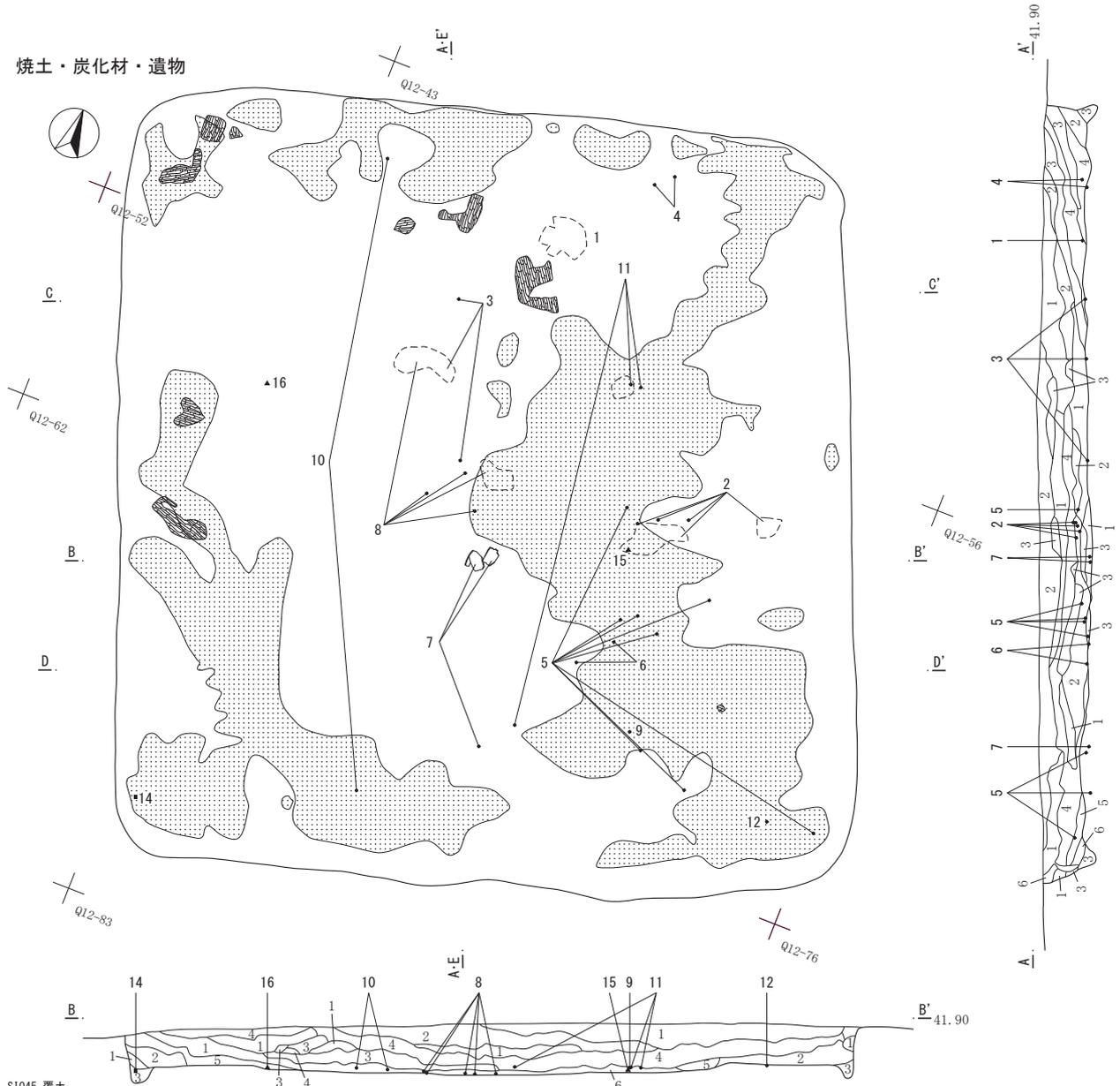
SI045 炉

- 1 層 焼土 7.5YR1.7/1 黒色土 粘性中、しまり中、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、赤色土ブロックφ 2-10mm 少量
- 2 層 2.5YR5/8 明赤褐色土 粘性なし、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、ソフトロームに類似した土に焼土が入る

SI045 貯蔵穴 (P6)

- 1 層 2.5YR5/8 明赤褐色土 粘性なし、しまり強、炭化物・粒子φ 2-10mm 多量、赤色土ブロックφ 2-10mm 多量
- 2 層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性中、しまり中、ローム粒子φ 2-10mm 少量、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、赤色土ブロックφ 2-10mm 少量
- 3 層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性弱、しまり中、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、赤色土ブロックφ 2-10mm 少量

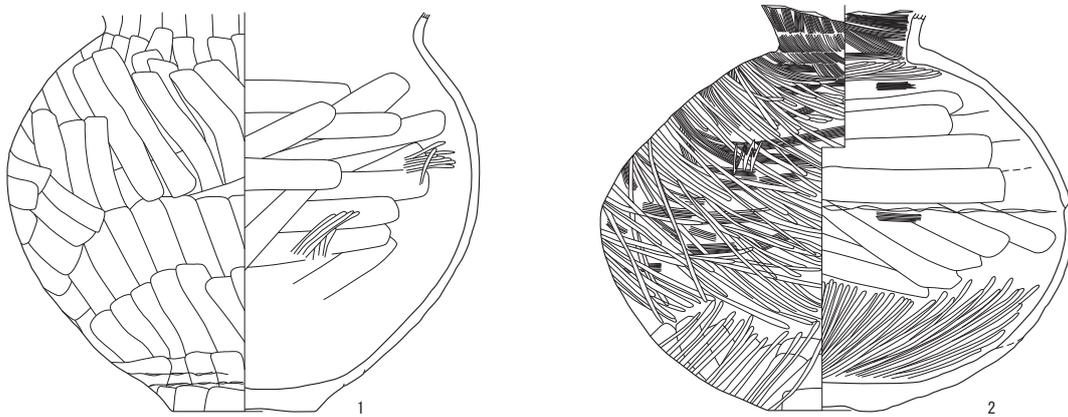
焼土・炭化材・遺物



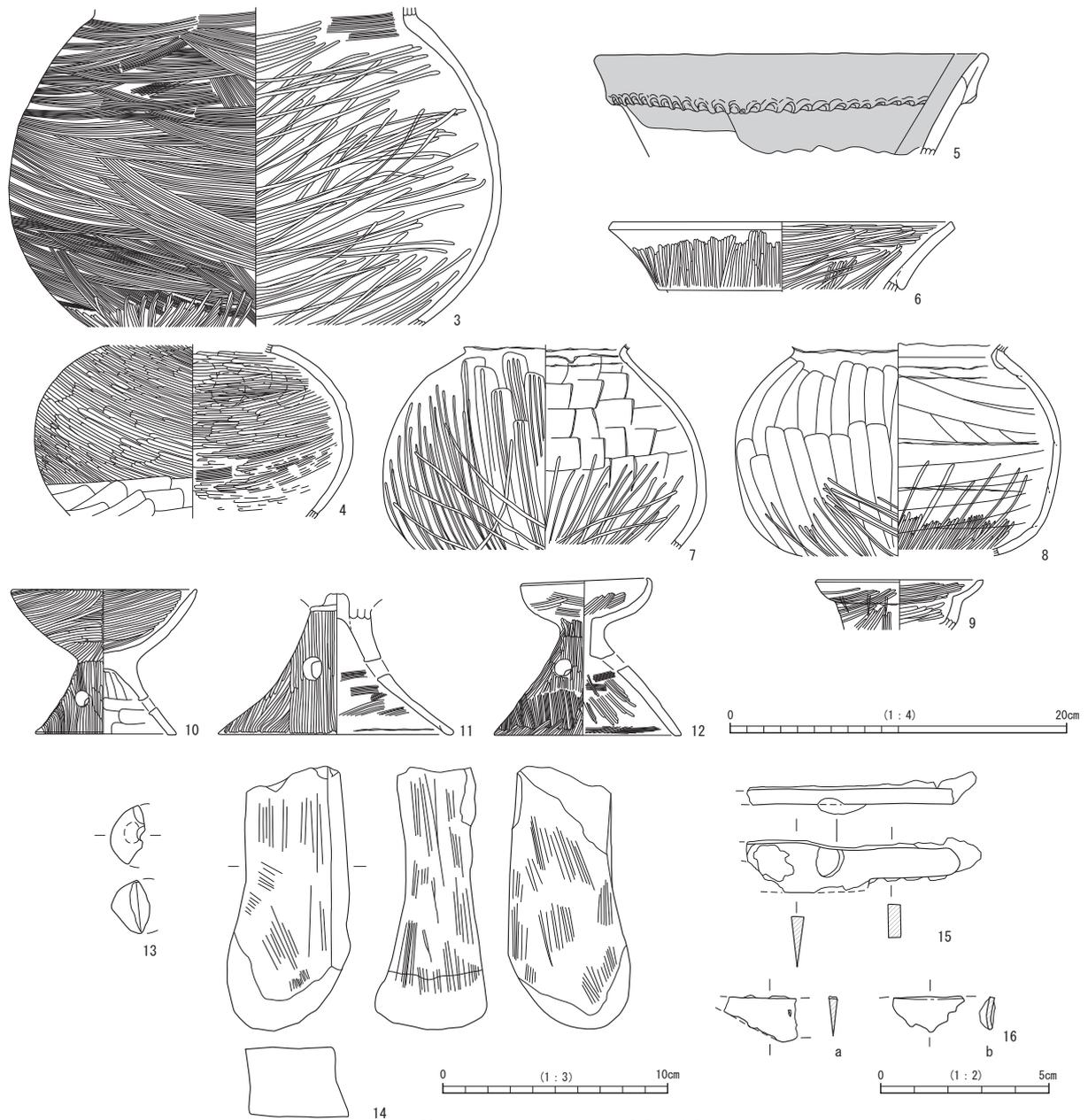
SI045 覆土

- 1層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、焼土ブロック・粒子φ 2-10mm 少量
- 2層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性中、しまり強、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量
- 3層 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性中、しまり強、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 多量、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量
- 4層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、焼土ブロック・粒子φ 2-10mm 少量
- 5層 7.5R3/2 暗赤褐色土 粘性なし、しまり中、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、焼土ブロック・粒子φ 2-50mm 多量
- 6層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、焼土ブロック・粒子φ 2-10mm 中量

第45図 SI045 (3)



第46図 SI045 出土遺物 (1)



第 47 図 SI045 出土遺物 (2)

第 21 表 SI045 出土遺物観察表 (1)

掲載 番号	注記 番号	種類	器種	残存	口径 器高 底径	重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	115	土師器	甕	口縁部 欠損	- <21.1> 7.5	1199.1	底部は平底、胴部は球形を呈し最大径をやや上位に有する。頸部は緩やかに外反する。	外面胴部はヘラケズリ後ナデ整形カ底部はヘラケズリ。内面は板状工具によるナデ、部分的にミガキが観察される。下端部は剥落。	白色粒子少量。	内外面 10YR6/4 にぶい黄橙	良好 二次 焼成 アリ	
2	1区 上層 0001・ 0022・ 0025・ 0026・ 0027・ 0075・ 0105	土師器	壺	口縁部 欠損	- <20.9> 6.0	1559.6	底部は上底気味の平底。胴部はやや潰れた球形を呈し、最大径を中位に有する。頸部は「く」の字に屈曲し立ち上がる。下端に接合痕を有す。	底部は輪台技法カ。外面胴部刷毛整形後ミガキ、下端部はヘラケズリ後ミガキ、茎部は細かい刷毛。内面ナデ整形、下端はナデ後ミガキ、頸部は斜方向の刷毛後、括れ直下はミガキが確認される。	白色粒子やや多い。	内外面 5YR4/3 にぶい赤褐	良好 二次 焼成 アリ	
3	0059・ 0060・ 0065	土師器	壺	胴部大 破片	- <19.0> -	585.9	胴部は球形カ。やや大形。	外面胴部丁寧な刷毛整形、下端部ミガキ。内面はナデ後粗いミガキ、頸部付近刷毛。	白色粒子微量。小礫含む。	内面 2.5Y4/1 黄灰 外面 2.5Y3/1 黒褐	良好 二次 焼成 アリ	

第22表 SI045 出土遺物観察表 (2)

掲載番号	注記番号	種類	器種	残存	口径 器高 底径	重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
4	0112・0113	土師器	壺	胴部 1/2	- <10.3> -	330.6	胴部はやや潰れた球形を呈するものカ。下端に接合痕有り。	胴部外面は斜方向のミガキ、下端部はヘラケズリが行われている。内面はミガキ、部分的に刷毛が観察される、上位に指頭圧痕有り。	白色粒子やや多い。白色針状物質少量、小〜中礫含む。	内面 2.5Y4/2 暗灰黄 外面 10YR6/4 にぶい黄橙	良好 二次 焼成 アリ	
5	0014・0016・2 区床直 0028・4 区上層 0044・ 0077・ 0081・ 0093・ 0094・ 0097	土師器	壺	口縁部	23.0 <6.0> -	431.1	口縁はわずかに外反気味に開き、折り返した後、端部には棒状工具による刺突が行われる。	口縁及び頸部は内外面共にミガキ。	白色粒子多い。雲母やや多い。	内面 5YR5/4 にぶい赤褐 外面 7.5YR6/4 にぶい橙	良好 二次 焼成 アリ	内外面 赤彩
6	0010・0078・0080	土師器	壺	口縁部 1/3	(20.2) <4.2> -	98.4	口縁は緩やかに外反気味に開き、口唇は面取りが行われておりやや内湾する。	外面縦方向のミガキ、内面横方向・斜方向のミガキ。	雲母微量。白色粒子少量。角閃石微量。	内外面 10YR6/4 にぶい黄橙	良好 二次 焼成 アリ	
7	2区上層 0002・ 0072・ 0073・ 0083	土師器	甕	口縁・ 底部 欠損	- <1.9> -	456.6	胴部は球形カ。接合痕有り。	外面縦方向のヘラケズリ後粗いミガキ、内面は木口圧痕が多くナデ整形が主であるが、下半から下端にかけてミガキ。	白色粒子少量。	内面 10YR3/2 黒褐 外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好 二次 焼成 アリ	
8	2区下層一括 0040・ 0060・ 0064・ 0066・ 0067・ 0069	土師器	甕	胴部 1/2	- <12.4> -	305.9	胴部は球形カ。接合痕有り。	外面縦方向のヘラケズリ後粗いミガキ、内面は木口圧痕が多くナデ整形が主であるが、下半から下端にかけてミガキ。	白色粒子やや多い。	内面 7.5YR4/4 褐 外面 10YR4/3 にぶい黄褐	良好 二次 焼成 アリ	
9	0007・ 3区下層一括 0041	土師器	鉢 (碗)	口縁部 のみ	9.9 <2.9> -	52.4	体部は緩やかに内湾し、口縁は受け口となる。口唇は粗く面取りが行われている。	内外面共にミガキ。	白色粒子やや多い。小礫含む。	内外面 7.5YR4/4 褐	良好 二次 焼成 アリ	
10	0019・0049	土師器	高坏	口縁部 一部欠 損・脚 部2/3 欠損	11.0 <8.6> (8.5)	144.3	上腕は緩やかに内湾し口縁に至る、脚柱は直線的に開き穿孔は3単位、外から内に穿たれている。	外面はヘラケズリ後ミガキ、内面上腕はミガキ、脚柱はナデ整形。	雲母少量。白色粒子やや多い。黒色粒子・白色針状物質・小礫微量。	内面 5YR4/6 赤褐 外面 5YR4/3 にぶい赤褐	良好 二次 焼成 アリ	
11	008・0030・0031	土師器	高坏	脚部 のみ	- <7.6> (13.5)	221.6	脚柱はラップ状に大きく開く。穿孔は3単位、外から内に穿たれている。上腕部とのソケットが確認される。	外面は丁寧なミガキ、内面はナデ、部分的にミガキが観察される。	黒雲母・白色粒子少量。白色針状物質含む。	内外面 10YR6/4 にぶい黄褐	良好 二次 焼成 アリ	
12	0096	土師器	器台	ほぼ 完形	7.5 8.5 11.3	197.3	器受部はやや強く内湾し口縁に至る。脚柱は直線的に開く。中央に貫通孔有り。孔は外から内に3孔穿たれている。	口縁は内外面共に横ナデ。外面上腕はナデ整形後部分的に刷毛・ミガキが観察される、脚柱はミガキ後下半は刷毛、端部はミガキ。内面上腕はミガキ、脚柱はヘラケズリ後刷毛、部分的にミガキ、端部は刷毛。	雲母・白色針状物質・黒色粒子少量。白色粒子やや多い。	内外面 10YR6/4 にぶい黄褐	良好 二次 焼成 アリ	
13	2区上層 0002	土製品	土玉	1/3	縦2.4 横- 孔-	7.5	球形を呈するものカ。	ミガキ。	白色粒子少量。	10YR5/4 にぶい黄褐	良好 二次 焼成 アリ	
14	0045	石製品	砥石		縦11.9 横5.4 厚3.2	384.7	長方形を呈するもので、自然礫を使用するものであろう。上下両面共に弧状にすり減っている。材質は青緑色の凝灰岩。					
15	0118	鉄製品	刀子	基部	長 <6.3> 幅1.5 厚0.4	18.3	茎部から刃部の一部の破片。関は片関で茎部は断面が長方形を呈する。					
16	0117	鉄製品	不明	断片		3.7	2片に破損しているが接合しない。薄い板状を呈する。長さ a<2.1>・b<2.0>、幅 a1.3・b<1.1>、厚さ a0.2・b0.2					

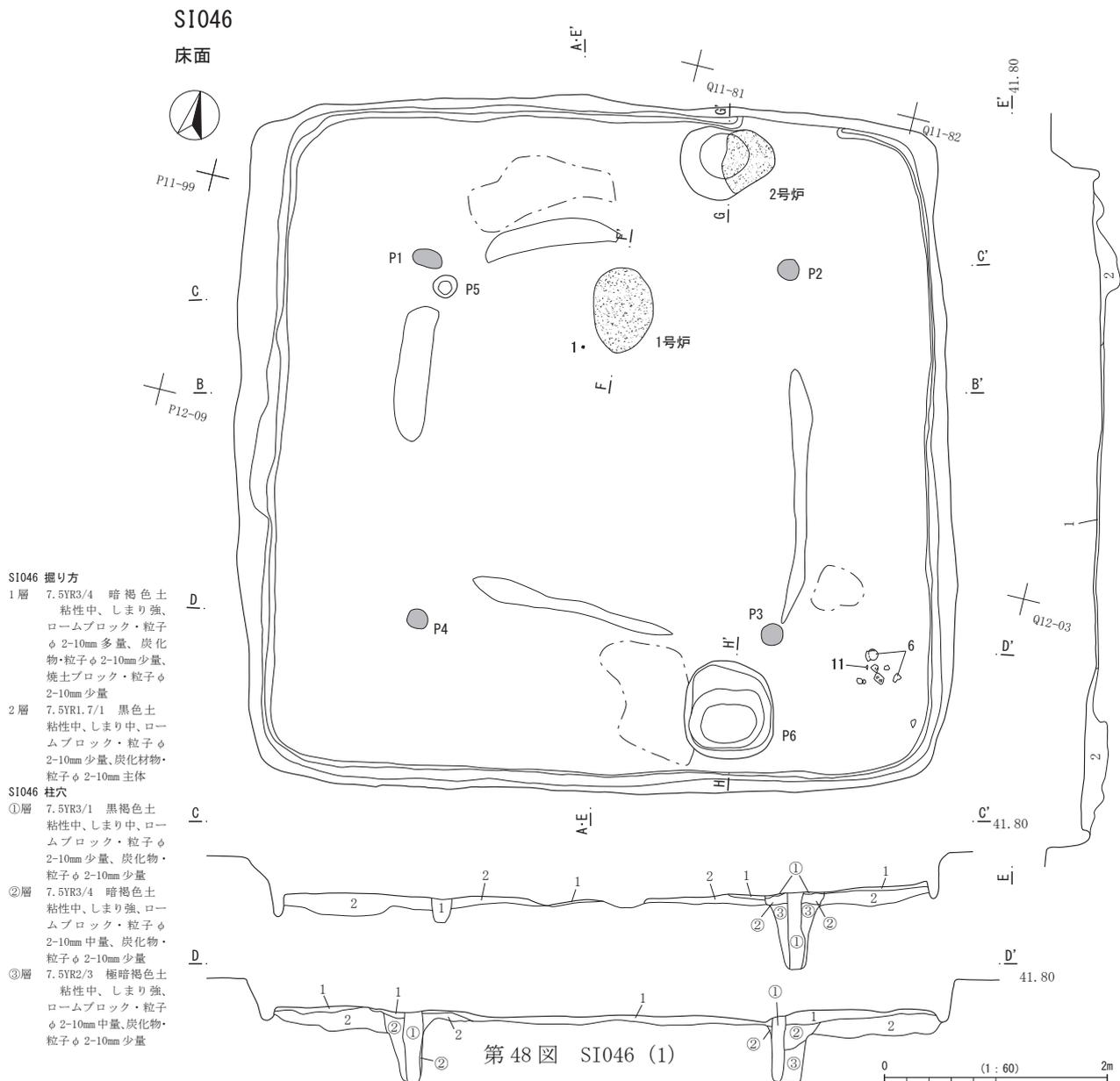
SI046 (第 48 ~ 51 図、第 23 表、Ph. 9・10・21)

調査区北東付近・大グリッドP・Q11・12に位置する。規模は、主軸が6.25m、副軸が6.37mの平面正方形である。壁高は、北西が36cm、北東が30cm、南東が30cm、南西が32cmを測る。主軸方位はN-15° -Wである。周溝は幅12~45cmあり、概ね20cmを測る。深さは6~16cmで四壁下を全周する。4支柱穴間に硬質面はなく、貯蔵穴の西側に幅1m弱の狭い範囲で存在するほか、住居北側と東側のいずれもベッド状遺構上に一部確認されたのみである。

支柱穴の規模は、P1が柱幅不明、掘り方で長径48cm×短径28cm、深さ34cm。P2が柱幅12cm、掘り方で58cm×48cm、深さ68cm。P3が柱幅12cm、掘り方で50cm×32cm、深さ58cm。P4が柱幅16cm、掘り方で52cm×47cm、深さ66cmである。各支柱穴底部にはアタリが確認された。

貯蔵穴(P6)は幅94cm×80cmの隅丸方形区画を8cm掘り込み、その内部に幅70cm×58cmの平面楕円形で、26cm掘り込んで設けられている。

炉は2基が存在する。1号炉は76cm×53cmの平面楕円形で、9cmの掘り込みがあり、さらに地山を8cm掘り込んでいる。2号炉は径86cm×69cmの平面楕円形で、10cmの掘り込みがある。



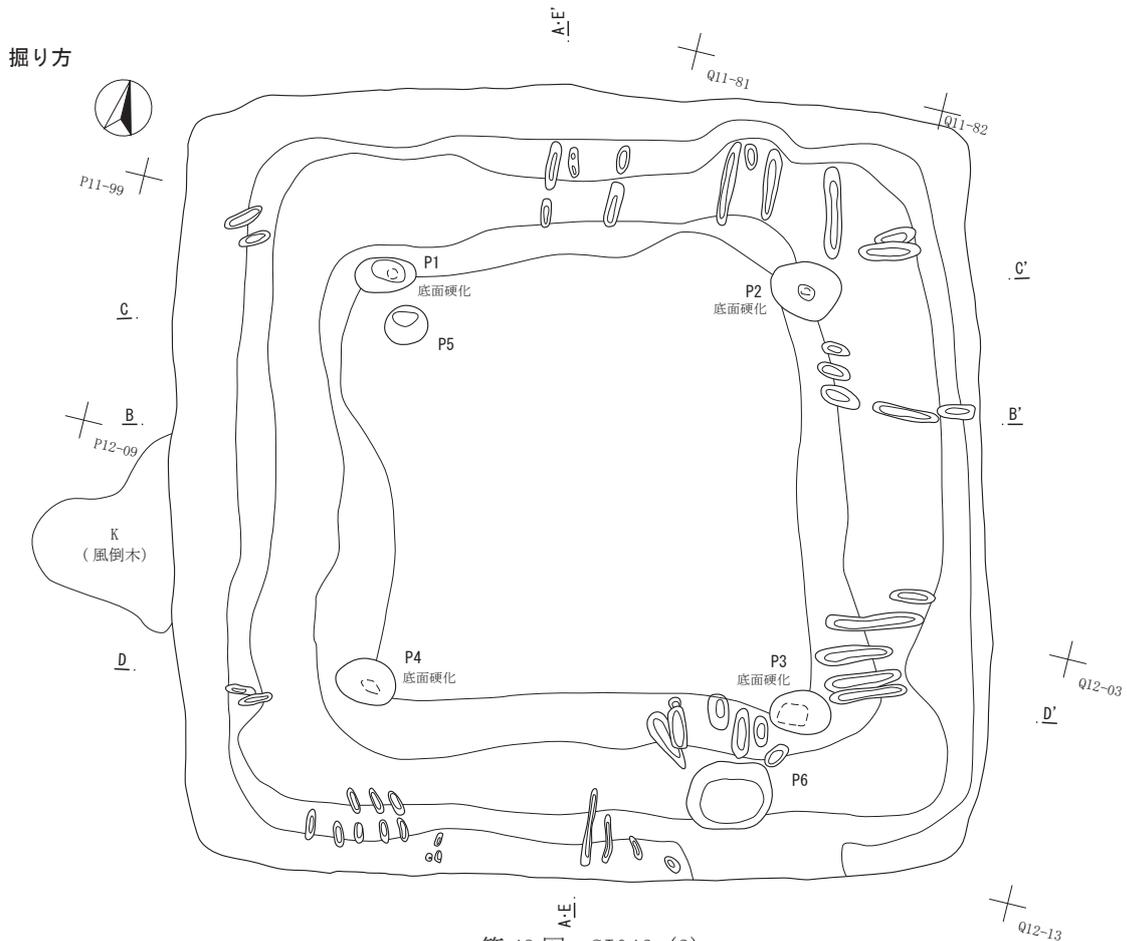
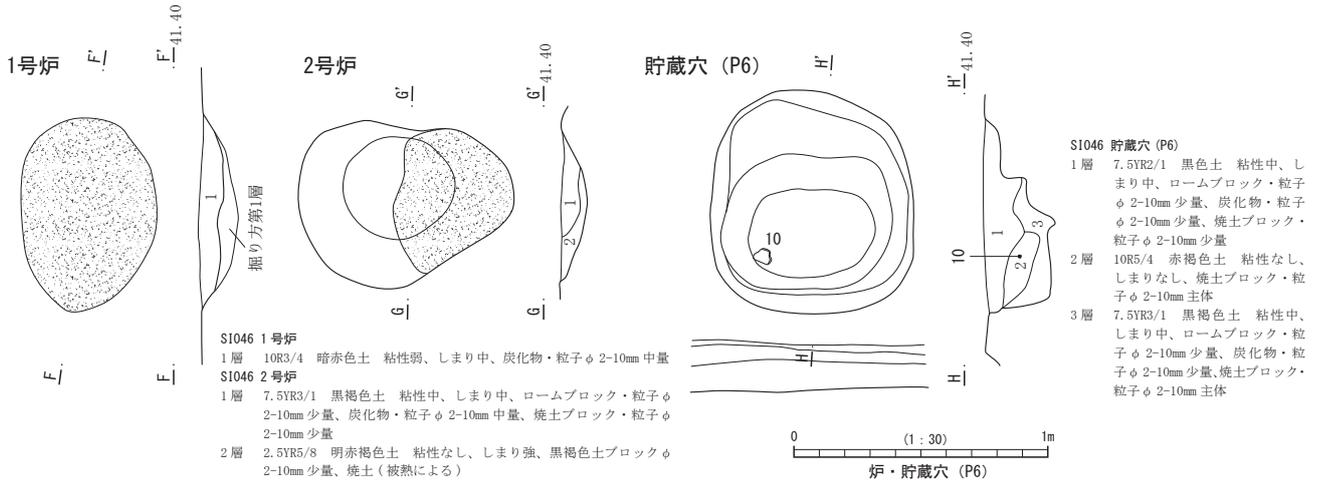
住居の掘り方は幅 104 ~ 145 cm、深さ 10 ~ 35 cm の掘り込みがあり、四壁際を巡っている。

ベッド状遺構は幅 110 ~ 150 cm の規模で四壁際を巡り、床面からの高さは 6 ~ 8 cm を測る。

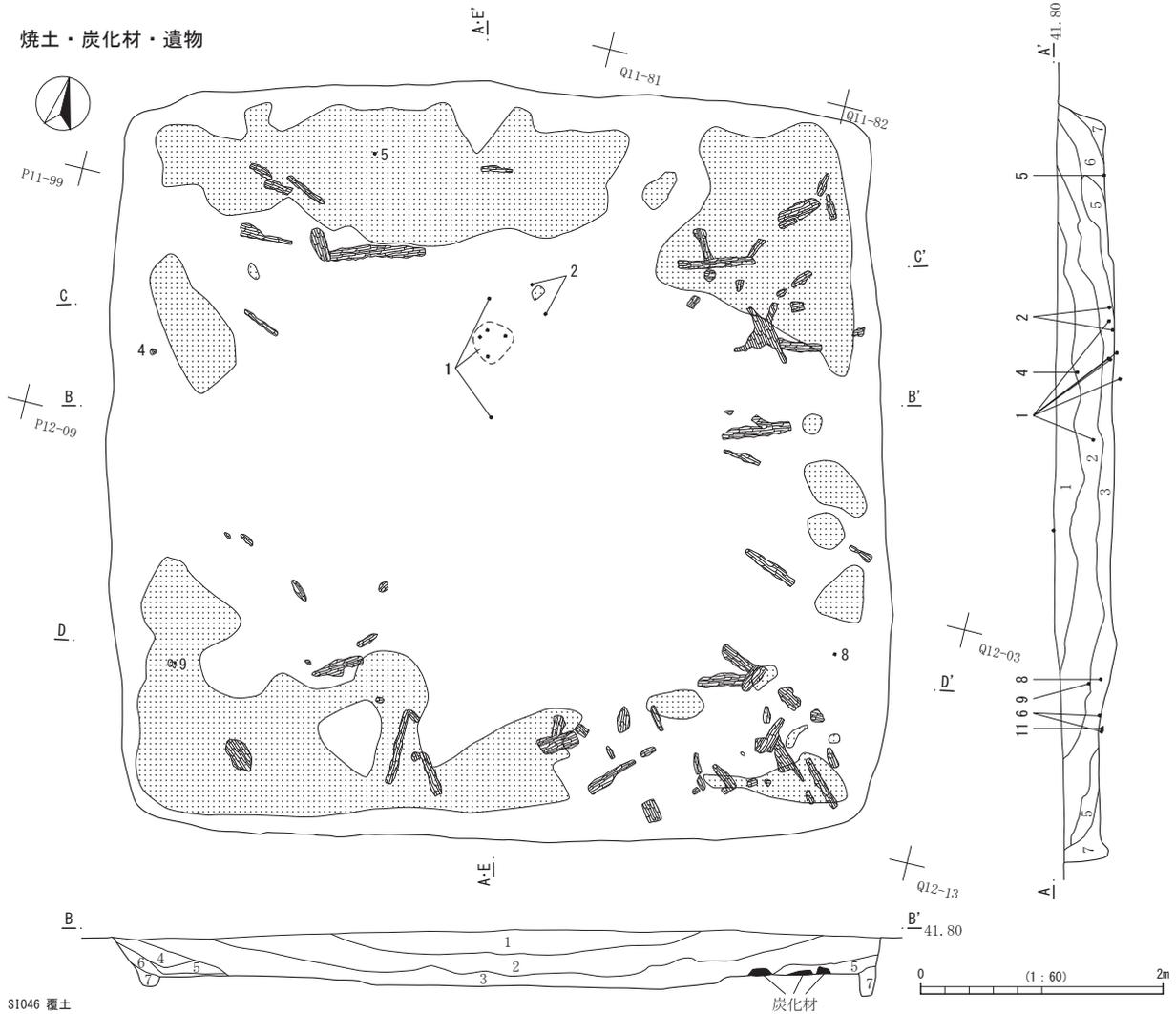
根太は全て掘り方で検出された。長さ 25 ~ 80 cm、幅 5 ~ 15 cm、深さ 5 cm 前後を測る。

覆土は黒色土から極暗褐色土に至る 7 層からなる。焼土層は第 5 層で四壁際でのみ堆積している。直下の第 6 層黒褐色土層中からは炭化材が検出されており、やはり四壁際で、焼土層直下でのみ検出された。プラン中央部の炉が検出された面は地山のソフトローム層である。土層断面は、第 3 層が、第 4・5 層を壊し、床面表面・硬質面を削平した形状である。つまり、住居の焼失後に、再度遺構を掘り下げたものと考えられる。

遺物は、焼土より上の第 1 ~ 3 層は碎片が多く、一方で床面壁際及び貯蔵穴では良好な状態で検出されている。



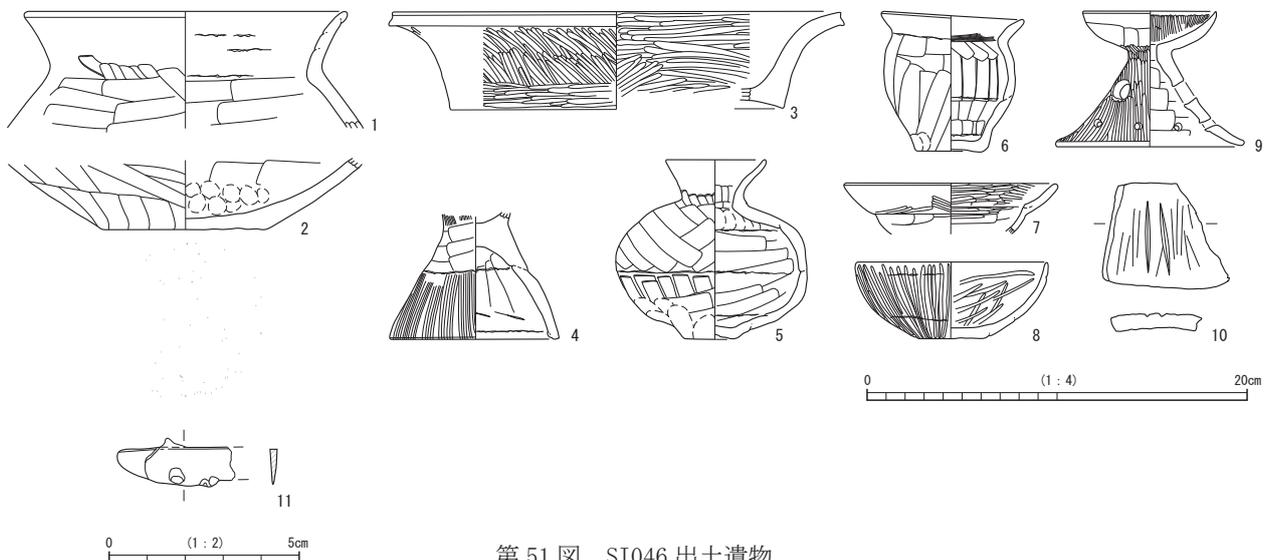
焼土・炭化材・遺物



SI046 覆土

- 1層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量
- 2層 7.5YR1.7/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、焼土ブロック・粒子φ 2-10mm 少量
- 3層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、焼土ブロック・粒子φ 2-10mm 少量
- 4層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、焼土ブロック・粒子φ 2-10mm 中量
- 5層 10R4/6 赤色土 粘性なし、しまり強、炭化物・粒子φ 2-10mm 少量、焼土ブロック・粒子φ 2-50mm(主体) 多量
- 6層 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量
- 7層 7.5YR2/3 極暗褐色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量

第50図 SI046 (3)



第51図 SI046 出土遺物

第23表 SI046 出土遺物観察表

掲載番号	注記番号	種類	器種	残存	口径器高底径	重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	3区上層一括 0003・0026・0037・0039・0040・0058	土師器	甕	口縁部 3/4	16.6 <6.25> -	216.4	頸部で「く」の字に屈曲し口縁はやや外反し開く。	胴部は内外面共にナデ整形、外面口縁は斜方向の粗雑な整形痕と輪積痕等が横ナデ後も残る、内面は横ナデ。	雲母・黒色粒子・白色針状物質・角閃石やや多い。白色粒子少量。	内外面 7.5YR6/6 橙	良好 二次焼成 アリ	
2	下層 0012・0024	土師器	甕	胴部下 端～底 部1/2	- <3.7> 8.6	171.6	底部は平底で、胴部下 端は緩やかに内湾す る。	外面底部木葉痕、胴部 下端ヘラケズリ、内面 はナデ、底部は指頭圧 痕が目立つ。	雲母・白色 粒子・白色 針状物質・ 角閃石やや 多い。	内面 10YR6/4 にぶ い黄橙 外面 10YR5/4 にぶ い黄褐	良好	
3	3区貯 蔵穴一 括 0009	土師器	壺	口縁部	(23.4) <5.2> -	69.8	上腕部破片、下半は直 線的に開き上半で外反 し、口唇は摘み上げら れる。	内外面共にミガキ。	白色粒子や や多い。白 色針状物質 含む。	内面 10YR5/4 にぶ い黄褐 外面 7.5YR5/4 に ぶい褐	良好 二次焼成 アリ	
4	上層 0002	土師器	台付 甕	台部	- <6.7> 8.6	158.5	脚柱は内湾気味に開 き、やや上位に接合痕 が確認される。	外面接合痕下は縦方向 の刷毛整形、上位はナ デ。内面は板状工具等 によるナデ。	白色粒子や や多い、礫 混入。	内面 7.5YR5/4 に ぶい褐 外面 10YR5/4 にぶ い黄褐	良好 二次焼成 アリ	
5	0034	土師器	壺	胴部一 部欠損	5.4 9.5 2.7	277.9	底部は狭く、やや円盤 状に高さが有り輪台技 法を用いている。胴部 は潰れた球形を呈し最 大径を上位に有す、口 縁は頸部で強く窄まり 「C」の字に外反し口 辺でわずかに内湾する。 接合痕有り。	底部はナデ、外面胴部 上半ナデ整形、下半は 木口痕が観察されるこ とからヘラナデ、下端 は指頭圧痕、口縁は横 ナデ、頸部付近ヘラナ デ。内面ナデ整形、頸 部直下は指頭圧痕、口 縁横ナデ後下半ヘラケ ズリ。	雲母少量。 白色粒子や や多い。白 色針状物質 含む。	内外面 2.5Y4/2 暗灰 黄	良好 二次焼成 アリ	
6	0047・ 0050	土師器	鉢 (小型 甕)	胴部一 部欠損	7.5 7.2 3.7	106	小形。底部は平底、輪 台技法カ。胴部はやや 縦長で最大径を上位に 有す、口縁は折返され た後直線的に開く。接 合痕有り。	底部はナデ、胴部はヘ ラナデ後ナデ整形を 行っている。口縁は内 外面共に横ナデ、内面 頸部は細かい刷毛整形 が短く施されている、 胴部はヘラナデ・ ナデが観察される。	雲母微量。 白色粒子少 量。白色針 状物質含む。	内外面 10YR6/4 にぶ い黄橙	良好 二次焼成 アリ	
7	3区貯 蔵穴一 括 0009	土師器	小型 鉢 (埴)	口縁部	(11.0) <2.7> -	11.8	体部は緩やかに内湾 し、口縁は受け口とな る。	外面体部はヘラナ デカ、口縁は横ナデ後 下端ミガキ。内面体部 はナデ後ミガキ、口縁 はミガキ。	雲母・白色 粒子少量。 白色針状物 質含む。	内外面 10YR6/4 にぶ い黄橙	良好 二次焼成 アリ	
8	0022	土師器	鉢 (埴)	口縁部 1/4 欠損	10.0 4.1 4.0	108.2	底部は平底で体部は緩 やかに内湾し口縁でや や直立する	底部はヘラナデ、外面 体部はナデ後縦方向の ミガキ。内面はナデ後 疎らなミガキ。	雲母・白色 粒子・白色 針状物質や や多い。	内面 7.5YR4/4 褐 外面 10YR5/4 いに ぶ黄褐	良好 二次焼成 アリ	
9	上層 0001	土師器	器台	脚部 1/2 欠損	7.0 7.1 10.0	104.6	器受部は緩やかに内湾 し口縁に至る。脚柱は ラッパ状に開く。中央 に貫通孔有り。孔は2 段確認され、何れも外 から内に向かい上段は 3孔、下段は3～4mm 程の小さな孔が5孔穿 たれている。	外面上腕は横ナデ後ナ デ整形、下端から脚柱 は縦方向のミガキ。内 面上腕はミガキ、脚柱 はヘラナデ後端部は横 ナデ。	雲母微量。 白色粒子少 量。白色針 状物質・小 礫含む。	内面 10YR2/1 黒 外面 10YR545 にぶ い黄褐	良好 二次焼成 アリ	
10	0052	土師器	甕 転用 砥石	胴部	縦5.6 横6.7 厚0.9	34.5	わずかに内湾する胴部 片。	刃物による傷が複数付 され、砥石として使用 されたものと思われる。	雲母少量。 白色粒子微 量	内面 2.5Y3/2 黒褐 外面 2.5Y4/3 オ リーブ褐	良好	
11	0049	鉄製品	刀子	切っ先	縦1.4 横<3.2> 厚1.6	3.1	刃部は緩やかに湾曲する もので先端もやや丸みを 帯びる。関部、基部は欠 損している。					

第 24 表 古墳時代土師器内訳表

出土遺構・位置	器種	甕	台付甕	鉢 (小型甕)	壺	小型壺・鉢 (埴)	脚付鉢 (埴)	鉢 (埴)	高坏	器台	不明	遺構別総量
SI040		5,677.5	10.8	173.9	57.4	778.3	356.2	115.8	121.5	308.3	-	7,599.6
SI041		10.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10.7
SI042		347.8	-	-	-	-	-	21.7	32.0	-	372.9	774.4
SI043		-	-	-	29.3	-	-	-	12.0	-	-	41.3
SI044		1,319.7	1,009.9	-	-	-	-	61.9	50.7	-	240.1	2,682.3
SI045		4,123.6	-	-	3,768.1	75.8	-	115.7	429.2	197.3	-	8,709.7
SI046		2,345.4	158.5	106.0	277.9	133.1	-	180.8	131.4	104.6	-	3,437.7
遺構外一括		1,021.7						13.9		34.3		1,074.0
器種別総量		14,846.4	1,353.1	106.0	4132.7	987.2	356.2	521.8	768.9	644.5	613.0	24,329.7

※単位はすべてグラム (g)

B. 掘立柱建物跡

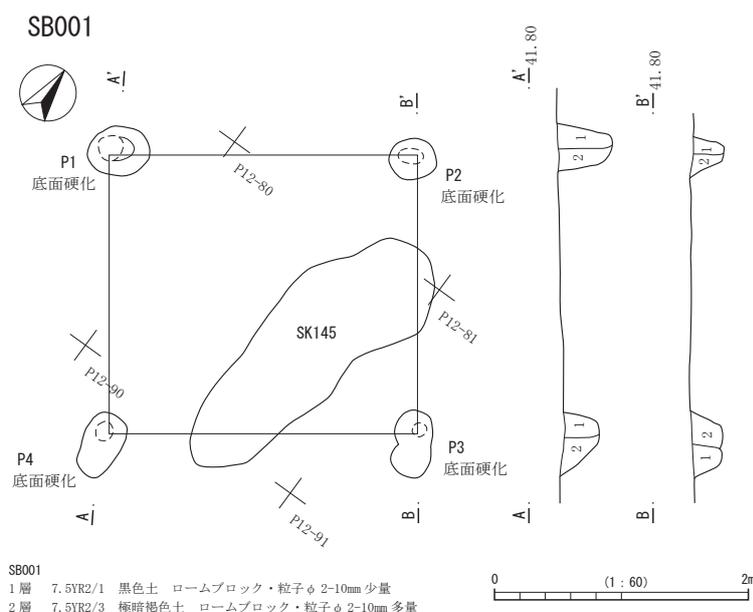
SB001 (第 52 図、Ph. 10)

調査区中央から南に寄った大グリッド 0・P12 の南側に位置する。桁行 1 軒×梁行 1 軒で構成され、桁行を主軸として、主軸方位は N-53° -E である。

柱穴は P1 から P4 の 4 基である。それぞれの柱穴間の距離は P1-P2 または P3-P4 間の桁行 2.45 m、P1-P4 及び P2-P3 間の梁行 2.20 m である。柱穴の規模は、P1 は柱幅 14 cm、掘り方で長径 50 cm×短径 35 cm、深さ 44 cm。P2 は柱幅 24 cm、掘り方で 33 cm×31 cm、深さ 26 cm。P3 は柱幅 24 cm、掘り方で 53 cm×29 cm、深さ 24 cm。P4 は柱幅 14 cm、掘り方で 52 cm×32 cm、深さ 26 cm を測る。

覆土は黒色土から極暗褐色土の 2 層で構成され、各柱穴ピット底部には厚さ 2 cm のアタリが存在する。本遺構は現状から、掘立柱建物跡として報告したが、平面形状から 1 軒の住居跡に伴う支柱穴の可能性も考えられる。

本遺構から遺物は検出されていない。



第 52 図 SB001

C. 柵列

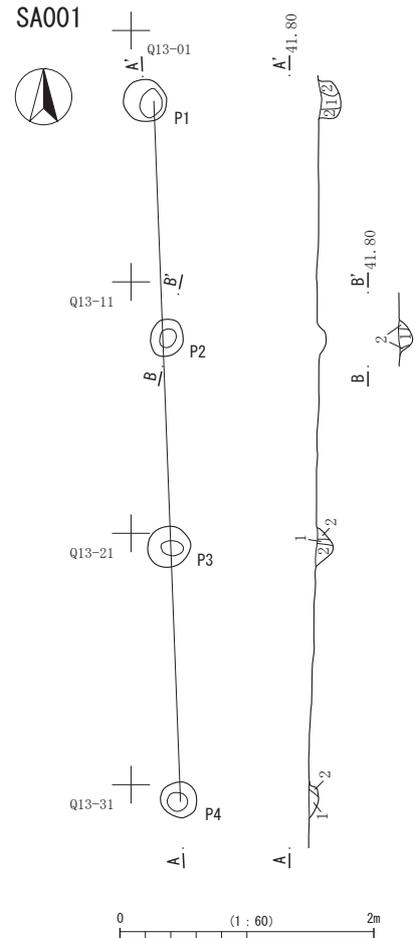
SA001 (第 53 図、Ph. 11)

調査区南東隅付近、大グリッド Q13 の北西寄りに位置する。ほぼ南北方向に並ぶ 4 基のピットによって構成される。ピット間の距離は P1-P2 間 1.72 m、P2-P3 間 1.70 m、P3-P4 間 2.00 m で全長 5.62 m となる。主軸方位は N-2° -W である。

それぞれのピット間の規模は、P1 は柱幅 25 cm、掘り方で長径 33 cm × 短径 32 cm、深さ 8 cm。P2 は柱幅 6 cm、掘り方で 32 cm × 25 cm、深さ 14 cm。P3 は柱幅 16 cm、掘り方で 35 cm × 32 cm、深さ 10 cm。P4 は柱幅 10 cm、掘り方で 30 cm × 28 cm、深さ 18 cm を測る。

遺物は検出されておらず、本遺構の帰属する時期は不明である。

- SA001
 1層 7.5YR2/1 黒色土 粘性中、しまり中、ロームブロック・粒子φ 2-10mm 少量
 2層 7.5YR2/3 極暗褐色土 ロームブロック・粒子φ 2-10mm 中量

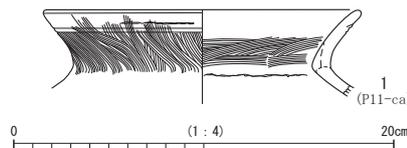


第 53 図 SA001

D. 遺構外出土遺物

本項で古墳時代以降の遺構外出土遺物として取り上げるのは、器形・時期が判明した以下の 1 点である。

1 は古墳時代前期（草刈 2 式）のく字形口縁壺である。



第 54 図 遺構外出土遺物

第 25 表 遺構外出土遺物観察表

掲載番号	注記番号	種類	器種	残存	口径 底径 器高	重量	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	P11-ca 1号風 倒木 0001	土師器	甕	口縁部	16.5 <5.0> -	244.9	頸部で「く」の字に屈曲し口縁はやや外反気味に開く。	外面は丁寧な刷毛整形が頸部まで施されている。口縁 1/2 強程に 2 条浅い沈線が廻り、口唇まで横ナデが行われている。内面は下半横方向の刷毛。	雲母・白色 粒子やや多い。白色針状物質含む。	内外面 5YR4/4 にぶい赤褐	良好 二次 焼成 アリ	

Ⅲ．総括

1. 縄文時代

A. 遺構

性格がわかるものとして炉穴、陥穴が確認されたが、遺物の検出が微少であるため、時期決定に至る資料は得られなかった。ただし、本調査区の北に隣接する第12次調査区では、炉穴に早期の子母口式期を主体とする遺物を伴っており、本調査区の炉穴の稼動時期を求める際の指標とすることができる。また、本調査区の中央から北側に存在した遺物包含層では主に子母口式土器を検出しており、炉穴に伴う時期であるかは不明であるが、当該期の生活拠点が存在していたことを示す。

陥穴に関しては、平面形はいずれも長楕円形であり、突出して残存高が高いSK144や、底部に長軸方向への掘り込みを持つSK145など、規模・断面形には多少の差異が認められる。配置では西からSK144→SK118→SK145→SK146と弧状の配列状態を成すが、遺物によって時期的性格が示されるものはSK118のみであり、形態にも差異があるため、配列状態の形成時期に関する言及は控えることとする。

B. 遺物

(1) 土器

本調査で検出された縄文土器の総量は7198.6g、石器は17点(2,797.8g)である。土器は、田戸下層式33.1g、浮島式159.4gがわずかに混じるものの、大半が子母口式土器と判断された。子母口式土器はその整形技法及び胎土、焼成、厚さなどから、8類に分類された。

子母口式土器は前章で記した通り、1967年に山内清男により発表された『先史時代土器図譜』において紹介されている。当時、山内は、該当資料が極めて少ない状況であったが、神奈川県横浜市神奈川区子安の大口坂貝塚で採集された資料を写真図版として掲載している。この中で、以下のように子母口式をまとめている。

- A 通常厚手の製作。
- B 繊維の混入は甚微量しかし多数の土器に認められる。
- C 貝殻の腹縁による条痕も少数ある。
- D (貝殻よりも) もっと柔軟なものを擦り付けた跡は却々多い。
- E 縄紋は殆んど見られない。
- F 器形の変化は殆んど無い。
- G 底は尖底のもの多く、小形の平底が幾分ある。
- H 土器外面には装飾の全く無いものが多い。

今回の調査により検出された遺物に当てはめてみると、極めて微量の繊維を混入する点、文様構成が行われる資料は極めて少ない、厚手が多いが口縁部付近では薄く胴上位から急激に厚さを増すもの、口縁から底部まで一貫して薄手のもの、丸底の資料1点と、概ね山内の指摘する子母口式土器の範疇に含められるものと考えられるが、そのバリエーションはさらに複雑に展開しそうである。

本調査で出土した条痕文系土器を細かに観察すると、山内が『図譜』に示した、角棒の端部による刺突を持つ遺物(今回の分類の第Ⅱ群第1類に当る)がまず目に付く。次に、上記のD項で示している、貝殻よりも「もっと柔軟なものを擦り付けた跡」とするものは、今回、「繊維束による擦痕」と表現したものに相当する。一方で、「土

器外面には装飾の全く無いものが多い」としているが、わずかながら隆帯の貼り付けや、並行沈線による格子目文様、太い沈線による鋸歯状の文様等が出土しており、さらに資料の増加を待つ必要がありそうである。

近年、本遺跡周辺すなわち東京湾沿岸、特に木更津・袖ヶ浦地域においても子母口式土器の出土が見られ、これらの内容が明確になりつつある。同様に神奈川県でも、東京湾を中心に資料の増加が明らかになっている。その中では、文様構成を行う土器、口唇部に折り返しが行われ、口辺部に縄文の回転施文が見られるもの、口唇部に貝殻復縁による刺突列を加えるもの、口唇部に横方向の撚糸文を施文するものなど、山内が指摘した特徴から外れる資料も多数出土している。田戸上層式から野島式に変化する前後の脈絡も、近い将来において明確になるものと考えられる。

(2) 石器

敲石として取り上げた遺物は興味深い。本遺跡の敲石 5 点はいずれも自然礫の端部を用い、本来採取された礫の形状が変わるまで用いるものはなく、棒状を呈する砂岩製楕円形礫の両端部を用いるものと、チャートなどのやや硬質な石材の周縁にわずかな敲打痕を残すものの 2 種がある。後者のような石器については、当該期の資料としては今後注意が必要であろう。

2. 古墳時代

A. 遺構

本調査で確認された住居 7 軒のうち、3 軒は床のみが残存し、このうち SI041 と SI042 では明確な支柱穴が確認されなかった。支柱穴相当位置のピットの深さは SI041 では 15 cm ほどであり、SI042 では 10 cm 以下である。いずれも調査区西側に分布する住居であり、ピット以外の付属施設が炉のみであることが共通する。SI041 は SI040 に近接しており、この 2 軒の確認面の標高の差は 5 ～ 10 cm ほどで、掘方直下までの掘り込みに 40 cm ほどの差がある。つまり、後の削平による地山の変化を考慮しても SI041 は掘り込みが浅い住居であることがいえる。このことから SI041・042 は、地山を深く掘り込み 4 本の支柱穴を穿つ堅穴住居とは異なる形態を持った住居の可能性が指摘される。

一方、SI043 の東側に近接して SB01 が存在する。4 本の柱穴からなる掘立建物跡であり、柱穴が形成する長方形の方位に注目すると、SI043、あるいは SI040・045 などに類似することが読み取れる。このため、本遺構は床が削平された住居の支柱穴である可能性が高い。

本調査で検出された住居のうち、北西方向に主軸をとり、貯蔵穴が南壁の西側に接する住居は 4 軒存在し、ベット状遺構が確認されることでも共通する。北に近接する第 12 次調査区においても同様の特徴を持つ住居が確認されており、本遺跡のこれまでの調査と合わせて集落の展開範囲が明らかになりつつあるが、本調査区中央部の縄文時代遺物包含層に相当する範囲において住居が確認されなかった点には疑問が残る。

B. 土器

今回の調査では、古墳時代の集落跡から以下に検討する同時代前期の土器群が出土した。本項では、各堅穴住居跡から検出された土器について、各土器群の様相とそれらの相対年代の位置づけ、土器の系統の問題についてまとめておく。

(1) 各住居跡出土土器の様相

SI040

甕 ハケ調整甕（以下「ハケ甕」、1～3）と多段輪積み口縁甕（以下「輪積み甕」、4）があり、ハケ甕は大村直の言う「千葉形五領式甕」（大村1994）である。ハケ甕には底部（胴下半部～下端）外面ケズリ成形・無調整で口縁端部を丸く仕上げるもの（1・2）と、底部外面までハケ調整を施し口縁端部内面にわずかな内傾面（匙面）を作るもの（3）がある。ただし、1の外面ハケ調整は胴上半部のみ（肩部はのちヨコナデ）で、下半部はケズリが表面化している。一方、輪積み甕は口縁部粘土紐2段で外面には積み上げ痕・指頭圧痕を残し、口縁部内面は2段に屈折する。胴部外面は浅いハケメで板ナデ（ヘラナデ）とも言える器面調整である。

器台 内湾口縁（受け部）の小型器台（13）と厚手のつくりで上下漏斗状の鼓形を呈するもの（12）がある。後者は市原市の南中^{みなみなこんだい}台遺跡における大村分類（大村2009）の小型器台B1の系列と判断されるが、赤褐色に発色する粗い胎土は今回の出土土器の中では唯一の存在である。搬入品の可能性を見ておきたい。

壺 有段口縁壺（二重口縁壺、8）は肌理の細かい胎土で、ミガキも丁寧なものである。一段目は水平で、二段目は外湾する。筒状の頸部をもつ器形と推定される。6は内面に屈折稜があり、その外面に貼り付けがあることから複合口縁壺と見られる。胴部は下膨れで偏球形を呈し、頸部は直立するもので、わずかに外傾する。底部外面・底面はケズリ成形。7も同様の器形を呈するものと思われる。小型壺の9も偏球形の胴部で、底部外面・底面はケズリ成形。

鉢 5は「小形短頸壺」（大村2009）とされる粗製の小型鉢で、脚部が付く。頸部外面に積み上げ痕（の段）を残し、口縁部のヨコナデは施されない。胴部外面はハケののちナデ調整。11は小型丸底系鉢に脚部が付加されたものとも見られるもの。頸部の屈折が強く、口縁部は直線的に大きく外反し、屈曲部外面は沈線状を呈する。脚部は無透かし。10は小型の塊形鉢で、底部外面はケズリ成形である。

SI041

図示した1は甕の口縁部破片。外面には口縁部のヨコナデ調整が施されない。未掲載遺物にはハケ甕の胴部と思われる細片があるのみ。

SI042

1は高坏の脚部破片。薄手のつくりで、下半部に内湾形状を示す。有段高坏であろうか。未掲載遺物のほとんどはハケ甕の胴部破片で、「千葉形五領式甕」の口縁部破片と内湾口縁の小型器台の小片がある。

SI043

1は折り返し口縁壺の口縁部破片。外面タテミガキ・内面ヨコミガキ調整で、口縁部内面はやや内湾する。口縁帯は狭くて羽状縄文が施文され、下端には押捺文が施される。細かな条腺から貝殻を原体としたものであろうか。未掲載遺物は壺の小片ばかりであり、薄手でナデ調整の粗製高坏と見られる破片もある。

SI044

甕 1は口縁部が長く、段々の形状（粘土紐3段カ）から多段輪積み甕の系列と捉えられるものである。ただ、口縁部外面はタテハケ調整ののち広くヨコナデが施され、積み上げ痕は残していない。胴部外面は浅く粗いハケメで、板ナデに近いものである。3はS字状口縁台付甕で、胎土にやや大きめの黒雲母（金雲母）粒子を混入する。底部内面と脚台接合部内面に長石・黒雲母の粗粒を主体とする多量の砂粒を混合した粘土の補充が認められ、濃尾平野低地部のS字甕に普遍的・不変の技法「S字甕台部成形技法」（赤塚1990）に当る。胎土の特徴と製作技法の忠実さから、搬入品と判断できる。端部が折り返される脚台部は大きく開き、赤塚次郎による分類（同文献）のC類と見てよいだろう。

高坏 4は高坏の坏部と見られる。4・5ともに薄手で、坏部(4)は口縁部にヨコナデこそ施されるものの、外面タテケズリ、内面板ナデ調整の形状不安定な粗製品。脚部の透かし孔は小さい。

壺 2は球胴を呈するもので、底部は明確に突出する。底部外面は指ナデで、ケズリは施されない。胴部は内外面ともハケ調整で、内面の残存範囲上端(胴上半部)にはハケ調整ののちにヨコ方向のケズリが施されている。

SI045

甕 いずれもナデ調整甕(ナデ甕)で、頸部の屈曲はなだらかな部分を残すく字形口縁である。胴部は球形を呈する1と、肩と腰が張る形状の7・8がある。1の底部外面はケズリが加えられている。いずれも輪積み甕の系列と見られる。

高坏 10は粗いミガキ調整の粗製高坏で、脚部はタテケズリののちタテミガキ調整である。坏部には稜がない坳形高坏(無稜高坏)で、口縁端部は薄くなる。脚端部にはわずかな内湾形状が認められる。透かし孔は小さい。11は胎土に黒雲母の細粒と海綿骨針を含む。接合部に粘土を充填するつくりと、ハケののち外面ミガキ(上半部タテ・下半部ナナメ)・内面ナデとする器面調整の手順、大きな透かし孔に見られる成・整形の手順は東海西部地域の製法である。搬入品あるいは非在人物による製作の可能性が指摘される。やや厚みのある脚部は大きく開くものの、上半に柱状部を残し下半部はやや屈曲して膨らむ形状から、廻間Ⅱ式末～Ⅲ式始め(赤塚1990)に位置づけられよう。

器台 内湾口縁の小型器台(12)がある。貫通孔・柱状部は長い。脚部の器面調整は、外面がハケののちタテミガキ・下端ヨコミガキ、内面がハケののちヨコミガキである。透かし孔は小さめである。

壺 5は広めの口縁帯下端に指押捺が施される複合口縁壺で、完周する口縁部のみの検出である。出土状況や加工・使用痕跡からは積極的な根拠を見出せないが、甕・壺などの器台として転用されていたものの可能性がある。6は丁寧な作りの複合口縁壺。無文の複合部(口縁帯)は広くて直線的に開き、口縁端部内面に匙面が見られる。複合部の貼り合わせは薄く、器壁厚はほぼ一定である。2・4の胴部は球形を呈し、2の頸部は明瞭に屈折してやや外傾する。底部外面はケズリが加えられ、底面は無調整で、いわゆる凹底ではない。3は内面に暗文風のヨコミガキが施されることから、広口壺(大型品)と判断される。頸部はやや丸味を帯びたく字に屈曲し、外面はハケ調整である。

鉢 大きく開く内湾口縁の小型鉢(9)。口縁端部のヨコナデ調整は施されず、形状不安定、器面調整のミガキも粗く、粗製である。

SI046

甕 1は粘土紐3段積みの口縁部で、外面指押えののち内外面ヨコナデ調整、内面には積み上げ痕が残る。多段輪積み甕の系列である。胴部は板ナデ調整。頸部はく字に屈曲する。2は底面に木葉痕を残し、外面はケズリである。4は台付甕の脚台部で、上位に積み上げ痕を残す特異な形状を示している。

器台 9は内湾口縁の小型器台。貫通孔は短く、柱状部は持たずに脚部は接合部から大きく外反する。脚端部はさらに屈曲して開く。透かし孔は小さめで3方向に穿孔、下段に小孔を配置する(5方向カ)。外面調整は、脚部はタテハケののちタテミガキ、受け部はナデ。

壺 3は有段口縁壺で、SI040-8と同様、水平な一段目と外湾する二段目から筒状の頸部を持つ器形と思われるもの。屈曲部下端外面は粘土の貼り足しによって拡張・強調している。口縁端部は強いヨコナデによって凹面を形成し、下方に拡張する。5はナデ整形の粗製小型壺。口縁端部のヨコナデ調整はない。底部は輪状の粘土紐を貼り付け(なで付け)、凹底状に作られている。

鉢 6は「小形短頸壺」とされる粗製の小型鉢である。頸部はく字に屈曲し、外面には積み上げ痕の段がある。口縁部のヨコナデ調整はなく、胴部は下半タテケズリののち上半部ナデ調整である。7はいわゆる小型丸底鉢の系列で薄手の作りであるが、口縁部のヨコナデ調整はなく形状不安定、器面のミガキ調整も粗い。8はSI040-10と同じ小型の塊形鉢。やはり、底部外面はケズリが加えられる。

(2) 各土器群の相対年代

以上の各住居跡の土器群は、出土状況や型式学的なバラツキはなく、それぞれ同一時期の土器群と見てよいと考える。続いて、これらの各土器群を、養老川右岸、国分寺台地区を中心とした市原台地周辺における、大村直による古墳時代前期の土器編年（大村 2009）と、村田川右岸の草刈遺跡を中心とした上総地域の加藤修司による同時期土器編年（「草刈編年」、加藤 2000・2004）に拠りながら相対的な時間的位置づけを行う。また、外来系（東海西部地域・伊勢湾沿岸地域）の土器については、赤塚次郎による編年（赤塚 1990 ほか）に拠る。各編年の並行関係は大村の提示したものに準拠する。

SI040 「無段」「く字口縁化」「口唇部の丸素縁化」「ハケ整形」を指標とする「千葉形五領式甕」（1～3）の存在から、草刈 2 式（大村 2009）・草刈Ⅱ期後半（加藤 2000・2004）に位置づけられる。これには胴下半部にケズリ成形が表面化したもの（1、加藤 2004 における指摘）を含んでいる。く字口縁の輪積み甕（4）は当該時期の標準資料とされる市原市の下鈴野遺跡 03 号住居跡に存在することから、この時期まで残る型式であることがわかる。複合口縁壺（6）は口縁部内面に屈折稜があり、草刈 2 式以降の型式である。脚部が付加された小型丸底系鉢（11）は頸部の屈折が強い器形から同時期の後半に近い所産の可能性はある。

SI043 複合口縁壺（1）は口縁帯が狭く、羽状縄文と下端に押捺文を施すことから、草刈 2 式・草刈Ⅱ期後半を下限とするものである。薄手の高坏の存在から、草刈 2 式に位置づけられる土器群と見ておきたい。

SI044 搬入品と考えられる S 字甕 C 類（3）は廻間Ⅲ式の所産で、並行関係から草刈 1 式の後半～草刈 2 式、草刈Ⅱ期中頃～後半に比定される。輪積み甕系列のく字甕（1）は草刈 1 式～2 式に位置づけられる。高坏（4・5）は薄手のつくりで、草刈 2 式の傾向を示すものと思われる。

SI045 東海西部地域の製法を示す高坏（11）は、廻間Ⅱ式末～Ⅲ式始めに位置づけられるもので、並行関係では草刈 1 式半ば～2 式始め、草刈Ⅱ期中葉となる。輪積み甕（1・7・8）、長い貫通孔の小型器台（12）、複合口縁壺（5・6）が有する特徴も、当該期の位置づけに齟齬はない。

SI046 口縁部ヨコナデ調整の施された輪積み甕（1）や、短い貫通孔の小型器台（9）、小型丸底系鉢（7）の存在から、草刈 2 式・草刈Ⅱ期後半に位置づけられるものである。

以上から、各土器群の位置づけを列举すると、

草刈 1 式半ば～2 式始め・草刈Ⅱ期中葉……………SI045

草刈 2 式・草刈Ⅱ期後半……………SI043・SI044・SI046、SI040（後半）

となる。遺物量の少ない SI041 と SI042 については、前項で指摘されている住居構造の近似性から同一時期の可能性があり、また、SI041 は隣接する SI040 と同時存在は考え難く、集落の消長を考えると、これに先行する時期の草刈 2 式以前と思われる。SI041 の口縁端部ヨコナデ調整の甘さと、SI042 の内湾形状を示す高坏とハケ甕の属性はこれを支持するものと言うことができ、草刈 2 式前半を中心とする時期を考えておきたい。

(3) まとめ

今回の調査によって出土した土器は、全体として草刈 2 式・草刈Ⅱ期後半を中心とするものである。君津地方の弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年（君津郡市 1996）ではⅦ b 期に当る。輪積み系のナデ甕を主体とする SI045 の土器群を最古相とし、「千葉形五領式甕」を主体とする SI040 を最新相とする。輪積み甕（段甕）の系列は草刈 2 式まで残存することが明白である。在地産の土器製作については、胎土に海綿骨針を含み、（白）雲母粒子が目立つ点を手掛かりとなった。成・整形の手順としては、器種を横断した底部のケズリ成形が特徴的である。また、大村による「当該地域のハケ整形は、基本的に甕の外表面整形技法として採用され、他器種のミガキなどの前整形としては定着しない」との指摘（大村 2009）がある。今回、特に脚部外面調整では、在地型式の高坏にはケズリ成形ののちミガキ調整が見られ、外来系の受容型式である小型器台はハケののちミガキ調整であった。ハケ→ミガキの調整手順は、今回、搬入品（あるいは模倣品）が確認された東海西部地域における製作法である。両者とも在地の胎土で、在地における製作である。単なるカタチの模倣ではなく、土器製作の手順を含めた型式の受容であることがわかる。こうした手順に対する視点は、土器の受容形態や型式の構造を把握する際に欠かせないものであることを強調しておきたい。

今回の調査資料は少ない遺構件数ではあったものの、外来系土器の存在など、比較的豊富な器種・型式を含んでいる。当該期における型式の組成・変遷を考えるうえで良好な資料を得ることができた。以上の検討は、まだ不十分なものではあるが、今後の当地域における古墳時代史の解明に資することができれば、本報告の目的の一つは達せられたものと思う。

参考引用文献

- 山内清男 『日本先史土器図譜』 先史考古学会 1967
- 赤塚次郎 「廻間式土器」 赤塚編『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集（財愛知県埋蔵文化財センター 1990）
- 大村 直 「戸張一番割遺跡の甕形」『史館』第 25 号 史館同人 1994
- 柴田龍司 「鎌倉道と市」(『研究連絡誌』第 41 号) 千葉県文化財センター 1994
- 財団法人 千葉県文化財センター「君津地方における弥生後期～古墳前期の土器編年」『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅶ 共同研究「君津地方における弥生後期～古墳前期の諸様相」(財団法人 千葉県文化財センター 1996)
- 財団法人 千葉県文化財センター 『千葉県埋蔵文化財分布地図 改訂版』 3 1999
- 加藤修司 「土器編年案」『千葉県文化財センター研究紀要』 21 (財団法人 千葉県文化財センター 2000)
- 袖ヶ浦市教育委員会 『袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書 I 平成 11 年度』 2000
- 加藤修司 「草刈遺跡土器編年の検証」『財団法人 千葉県文化財センター研究紀要』 4 (財団法人 千葉県文化財センター 2004)
- 袖ヶ浦市教育委員会 『千葉県袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書 平成 18 年度』 2007
- 小林達雄 編 『総覧 縄文土器』 総覧縄文土器刊行委員会 2008
- 大村 直 「南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年」大村編『市原市南中台遺跡・荒久遺跡 A 地点』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第 10 集 上総国分寺台遺跡調査報告 XX 市原市教育委員会 2009
- 袖ヶ浦市教育委員会 『千葉県袖ヶ浦市中六遺跡第 11 次・第 12 次発掘調査報告書』 2011

Y=15. 620

X=62. 600

N

Y=15. 640

O

Y=15. 660

P

Y=15. 680

Q

Y=15. 700



第 5 図 中六遺跡 (16) 全体図 (折図 1)

0 (1 : 200) 10m

写真図版

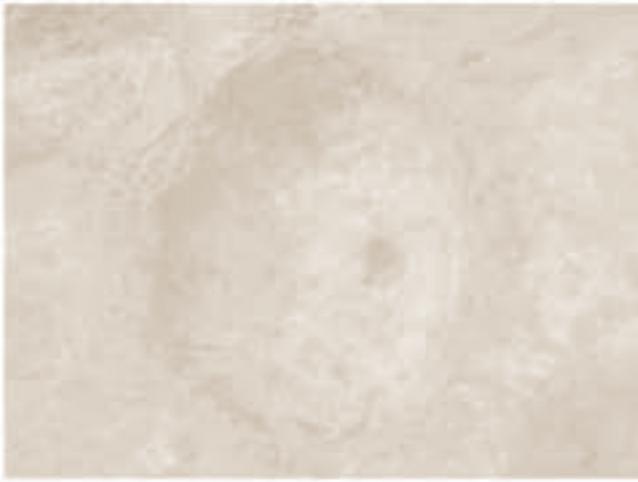
調査区



1. 調査区西側全景 上が北



2. 調査区東側全景 上が北



1. FP256 完堀 北東から



2. FP257(手前)・FP258(中)・259(奥) 完堀 北から



3. FP260 完堀 南西から



4. FP261 完堀 北東から



5. FP262(手前) 完堀 南から



6. SK118(陥穴) 完堀 南西から



7. SK130(陥穴) 完堀 南から



8. SK144(陥穴) 完堀 北東から

縄文時代陥穴・古墳時代住居跡 1



1. SK145(陥穴)完堀 南から



2. SK146(陥穴)完堀 南から



3. SI040 全景 南東から



4. SI040 焼土・遺物出土状況 南東から



5. SI040 炭化材・遺物出土状況 南東から



1. SI040 炉 北から



2. SI040 貯蔵穴遺物出土状況 南東から



3. SI040 貯蔵穴 北東から



4. SI040 掘り方完掘 南東から



5. SI041 全景 南東から

古墳時代住居跡 3



1. SI041 炉断面 東から



2. SI041 掘り方完堀 南東から



3. SI042 全景 南西から



4. SI042 炉 (奥:1号炉 手前:2号炉) 東から



5. SI042 掘り方完堀 東から



1. SI043 全景 南東から



2. SI043 焼土分布状況 北東から



3. SI043 炭化材・遺物出土状況 南東から



4. SI043 炉 南から



5. SI043 掘り方完掘 北東から

古墳時代住居跡 5



1. SI044 全景 南西から



2. SI044 遺物出土状況 (1 ~ 5) 南西から



3. SI044 炉 南西から



4. SI044 掘り方完掘 南西から



5. SI045 焼土分布状況 南から



1. SI045 全景 南から



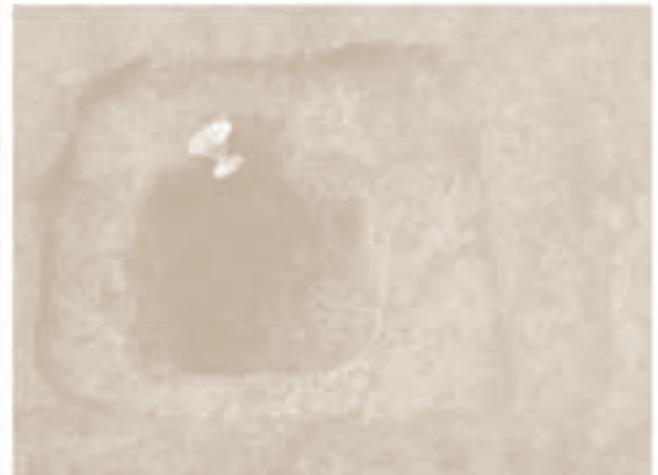
2. SI045 炭化材・遺物出土状況 南から



3. SI045 遺物出土状況(1) 南から



4. SI045 炉 南から



5. SI045 貯蔵穴 南から

古墳時代住居跡 7



1. SI045 掘り方完掘 南から



2. SI046 焼土・遺物出土状況 南から



3. SI046 全景 南から



4. SI046 炭化材・遺物出土状況 南から



5. SI046 遺物出土状況 (5) 南から



1. SI046 遺物出土状況 (8) 南から



2. SI046 炉 南から



3. SI046 貯蔵穴 南から



4. SI046 掘り方完掘 南から



5. SB001 全景 南西から

柵列・縄文時代包含層



1. SA001 全景 南から

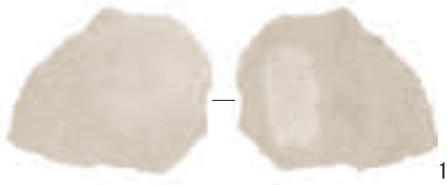


2. 縄文時代早期包含層除去完了状況 南東から

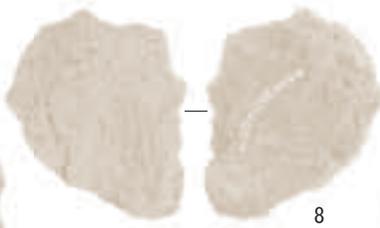
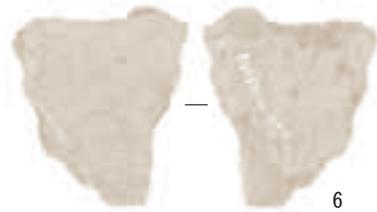
SK118 出土遺物



SK132 出土遺物



SK142 出土遺物



SK149 出土遺物

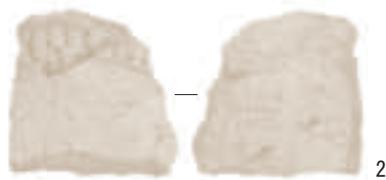


遺構外出土遺物

第 I 群 沈線文系土器 (田戸下層式)

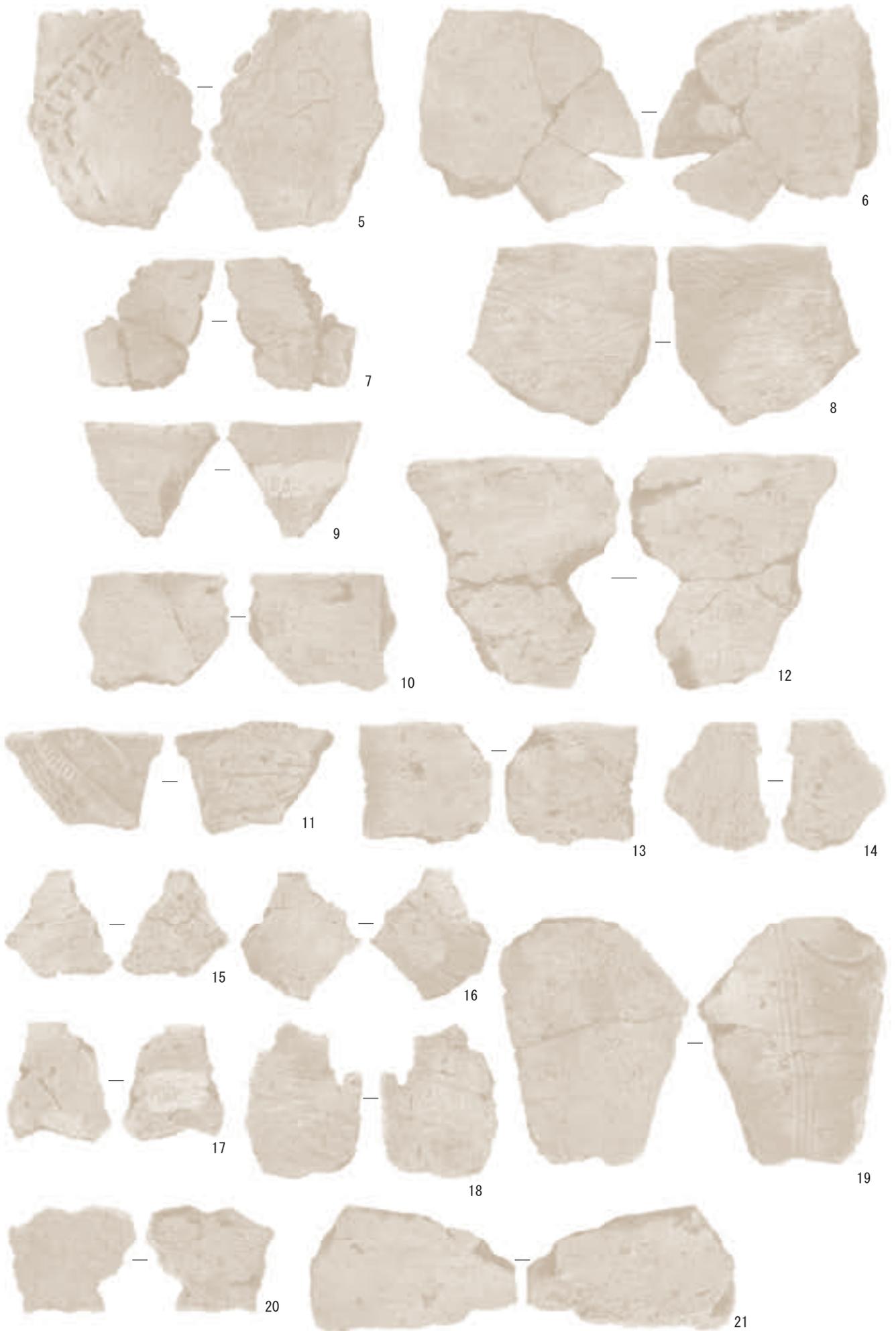


第 II 群 条痕文系土器 (子母口式)

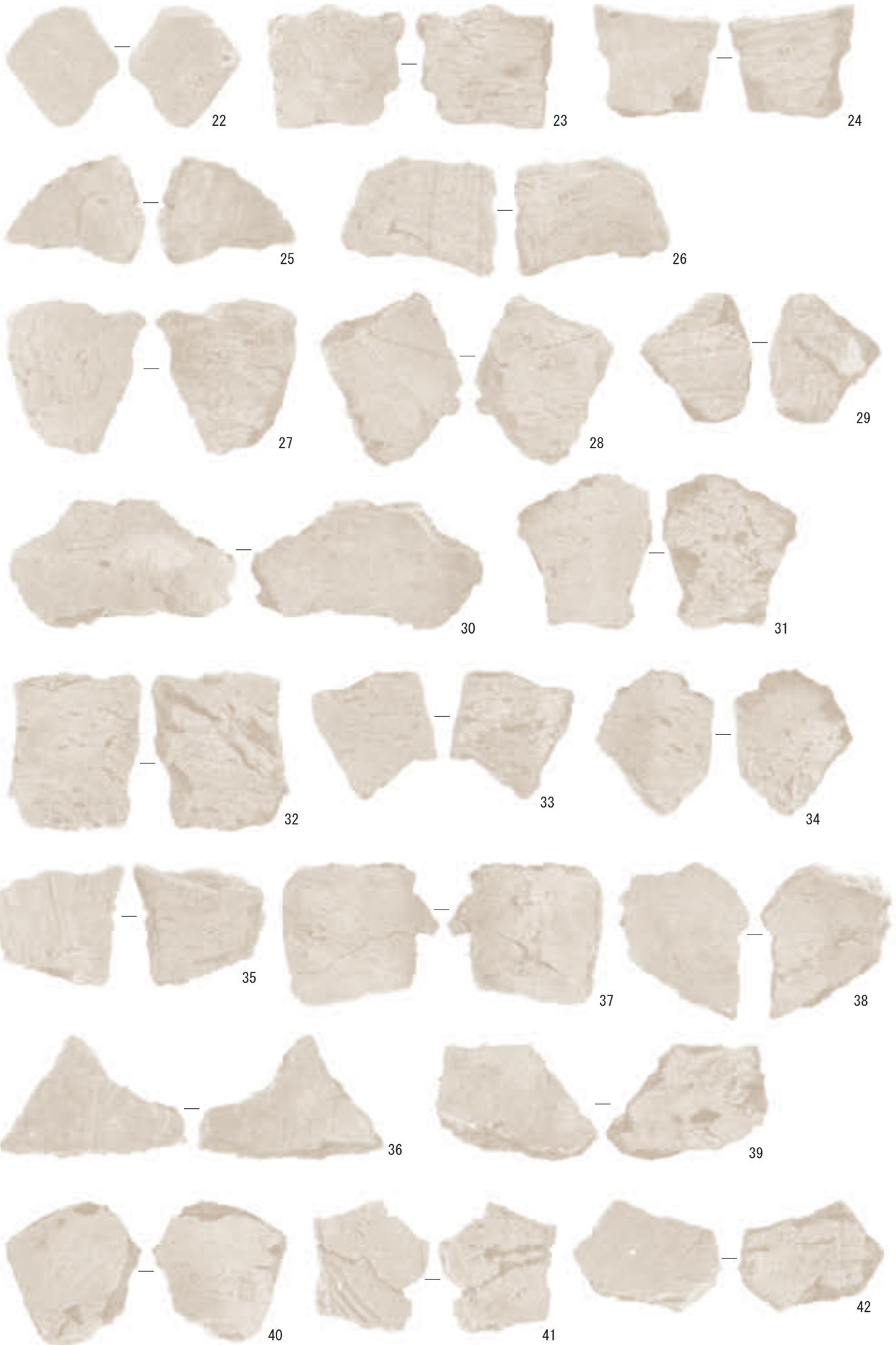


遺構外出土繩文土器 2

第Ⅱ群 条痕文系土器 (子母口式)

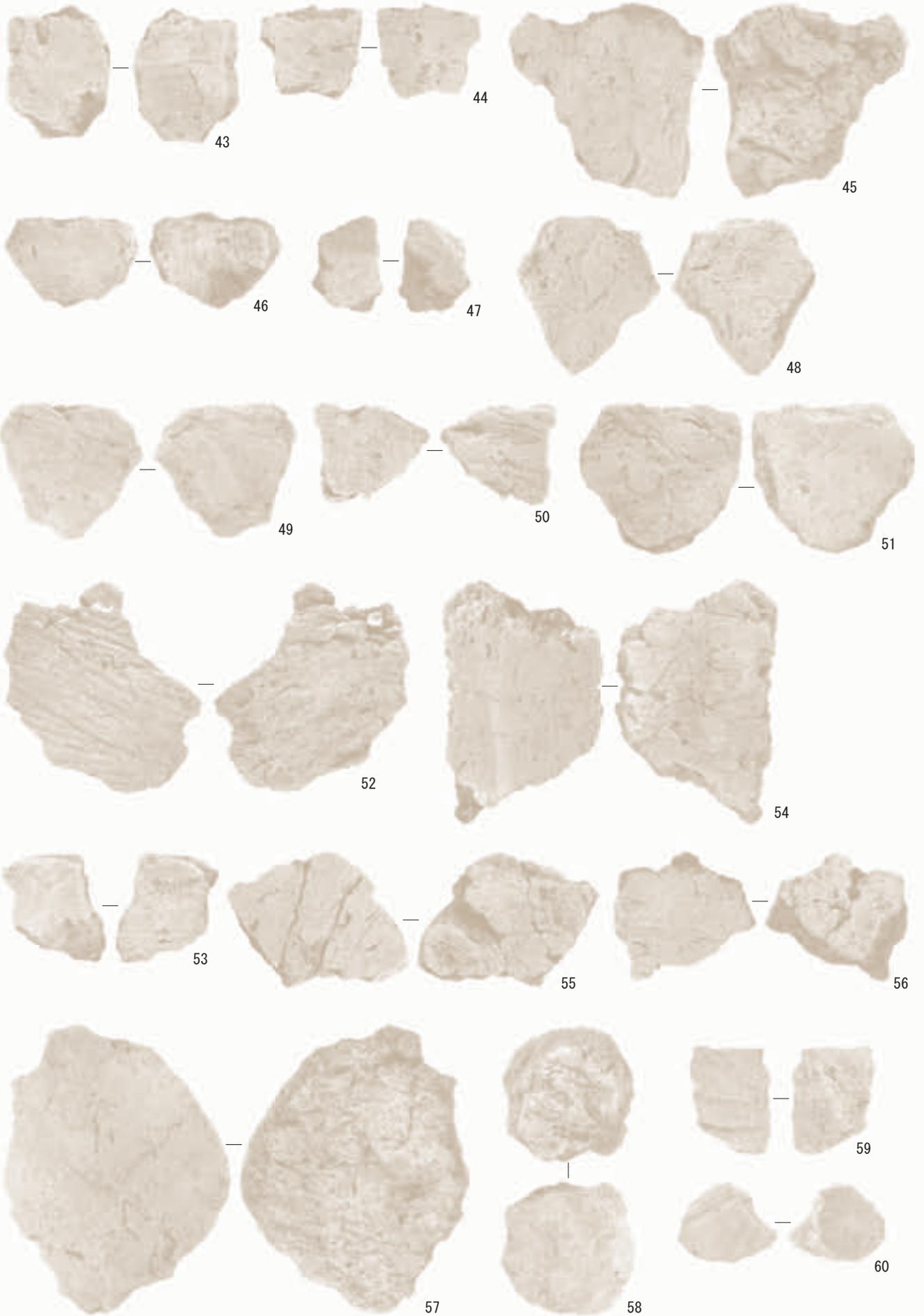


第Ⅱ群 条痕文系土器 (子母口式)

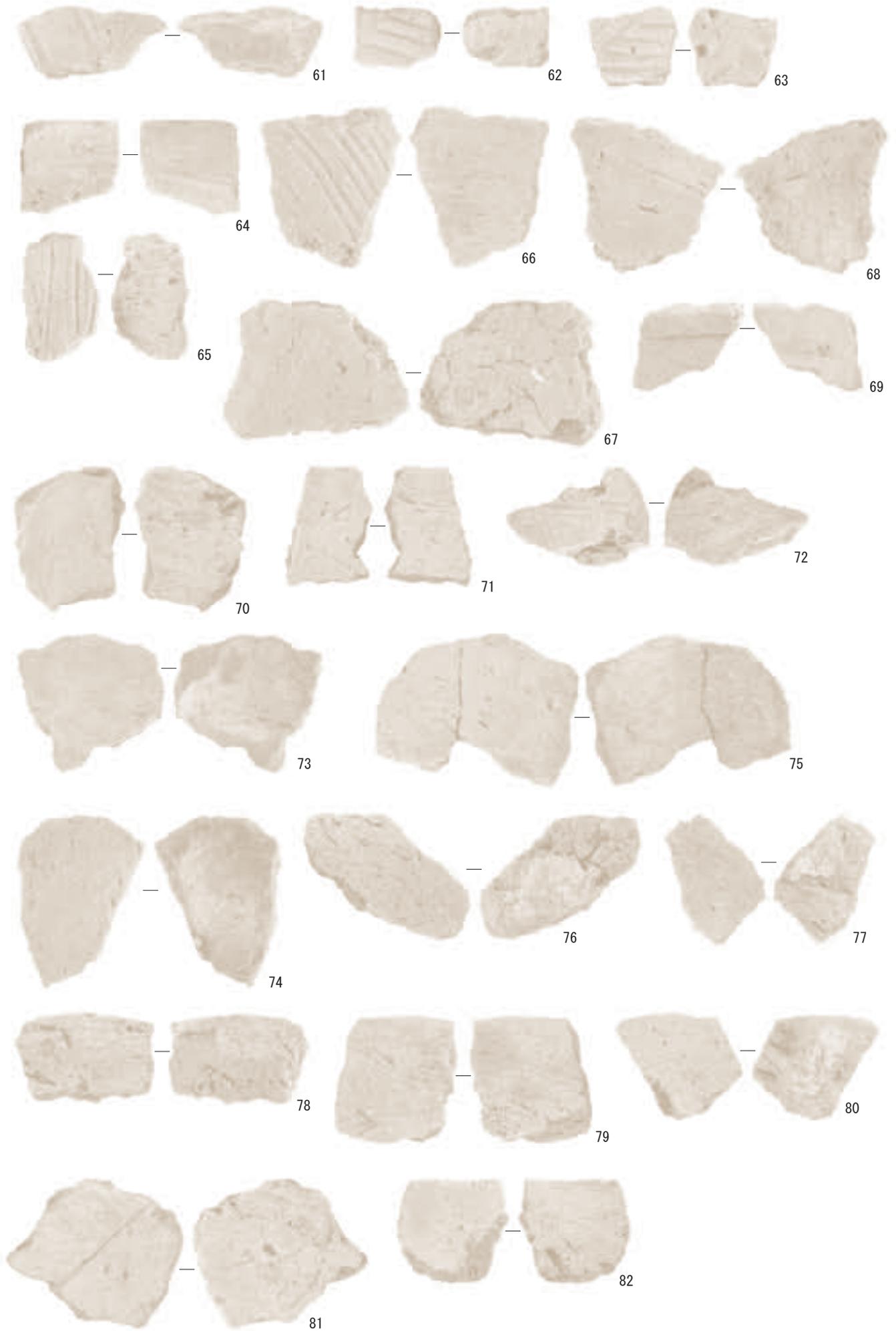


遺構外出土繩文土器 4

第Ⅱ群 条痕文系土器 (子母口式)

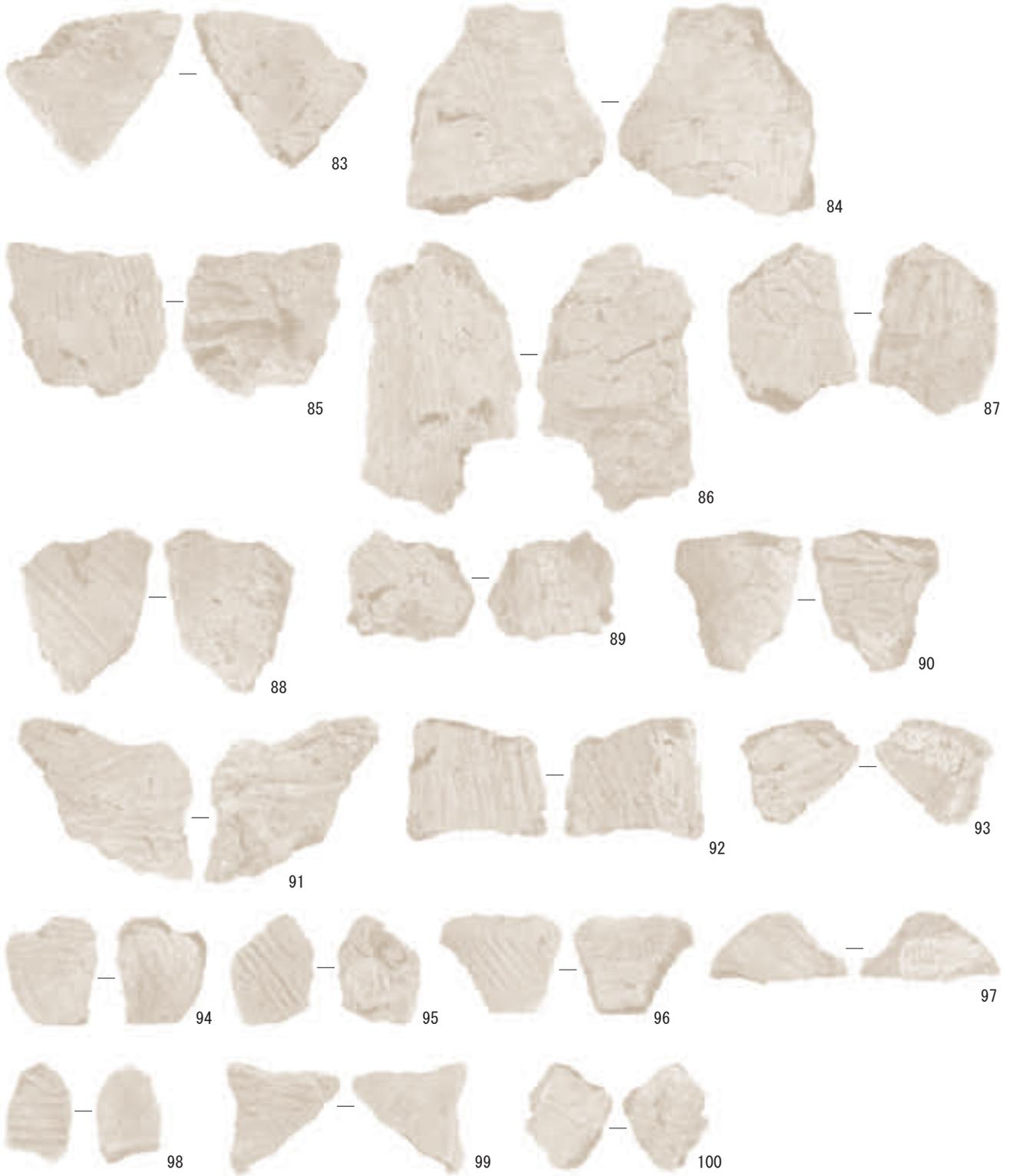


第Ⅱ群 条痕文系土器（子母口式）



遺構外出土縄文土器 6

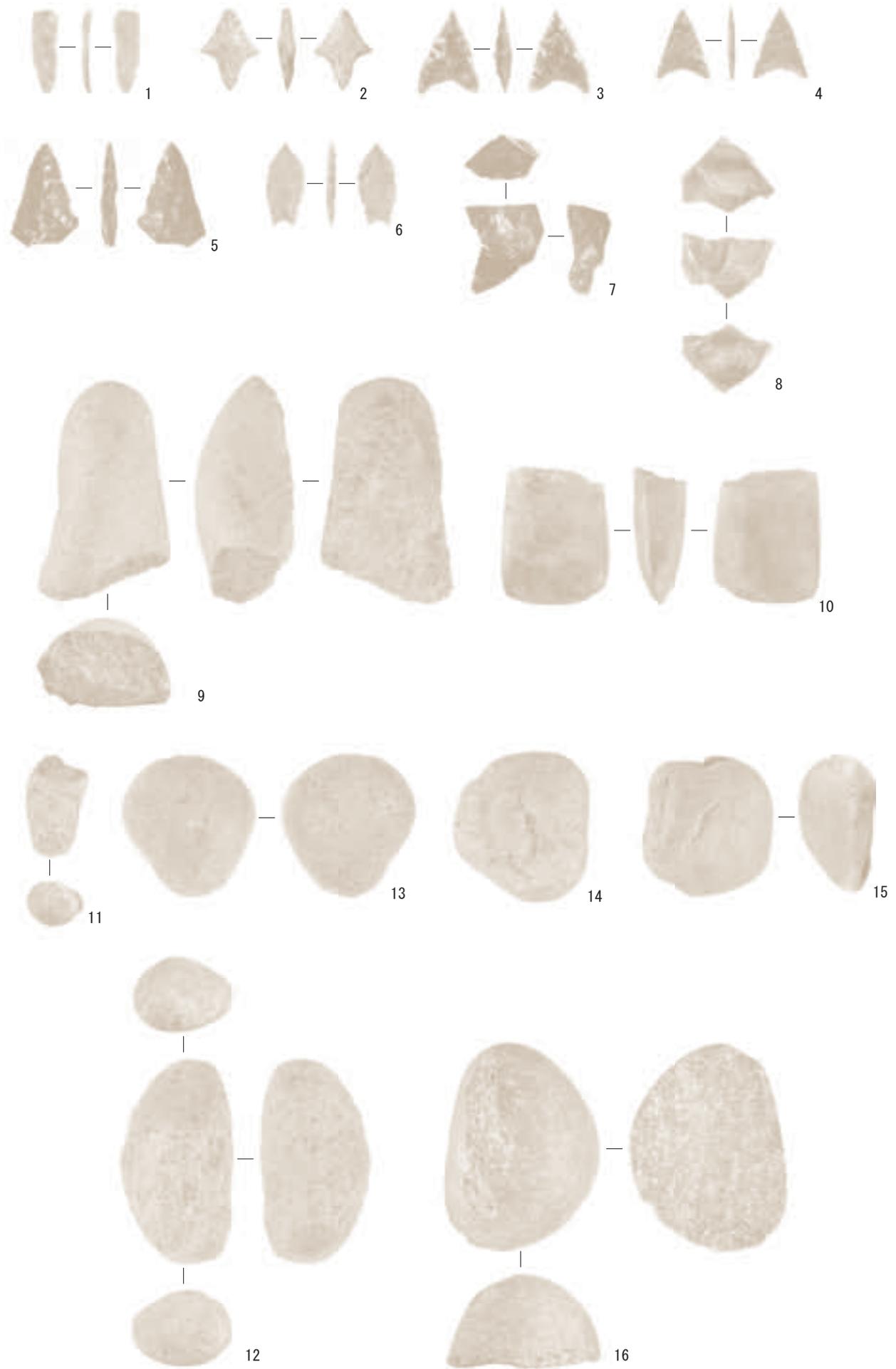
第Ⅱ群 条痕文系土器（子母口式）



第Ⅲ群 縄文前期（浮島式）

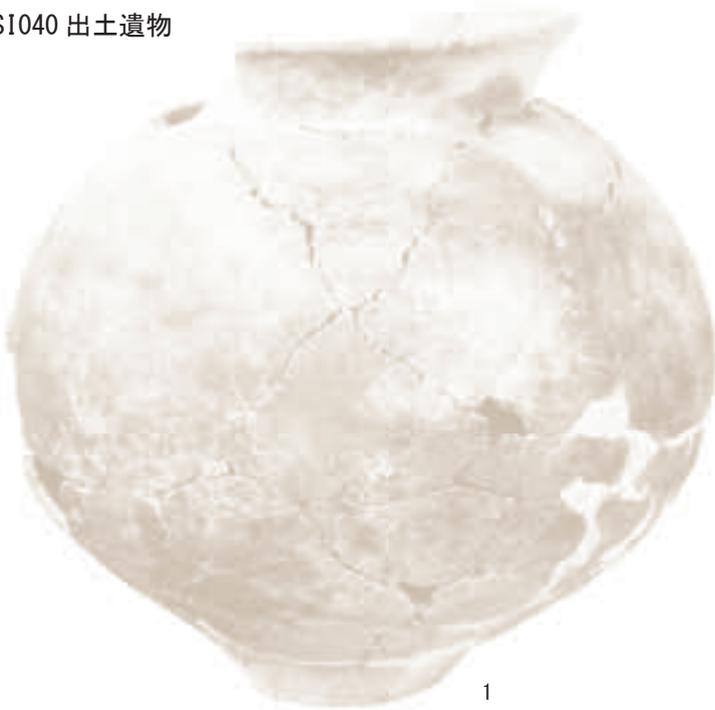


遺構外出土遺物



古墳時代住居跡出土遺物 1

SI040 出土遺物



SI043 出土遺物



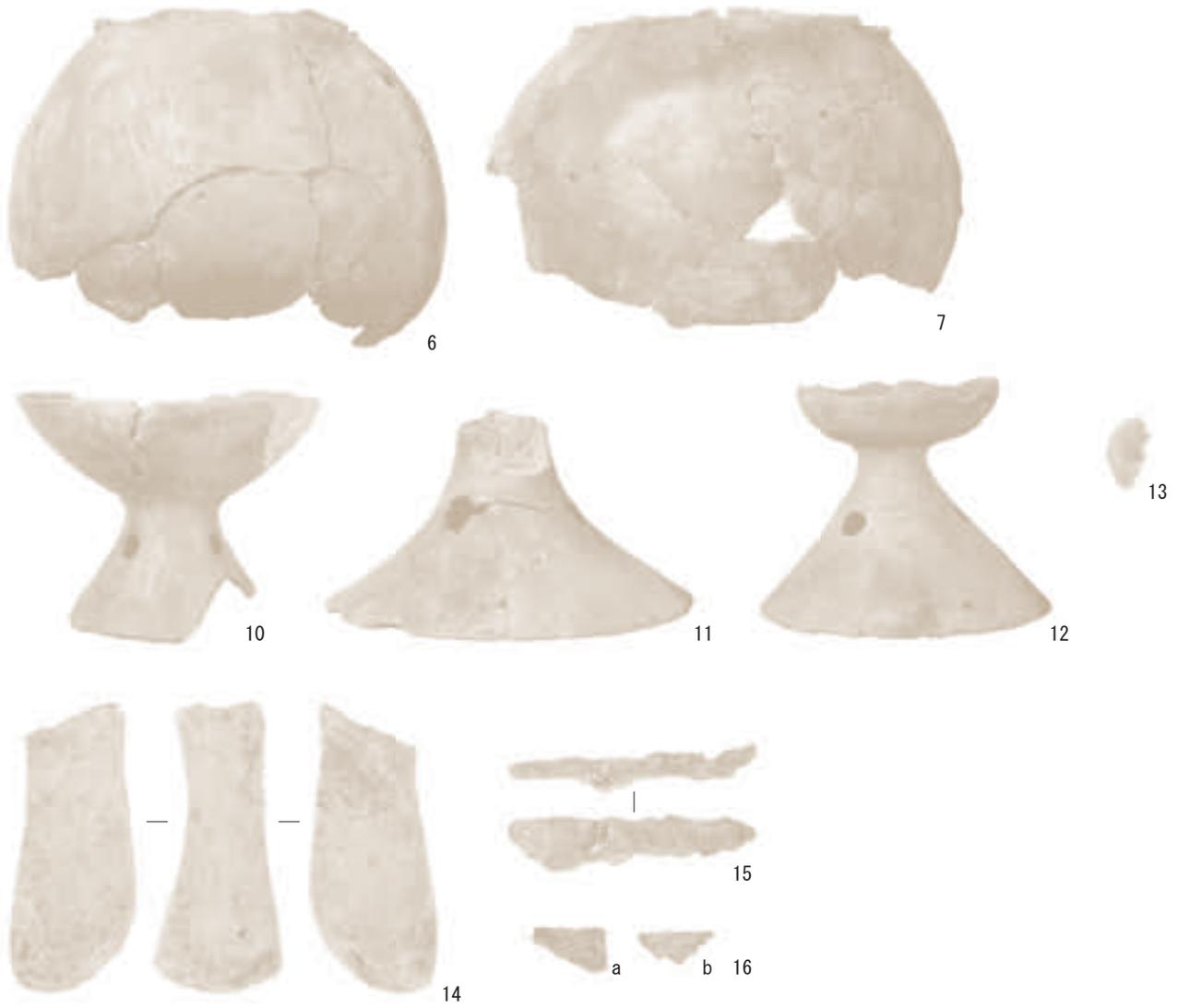
SI044 出土遺物



SI045 出土遺物



SI045 出土遺物



SI046 出土遺物



遺構外出土遺物



報告書抄録

ふりがな	ちばけんそでがうらし ちゅうろいせきだい 16 じはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	千葉県袖ヶ浦市 中六遺跡第 16 次発掘調査報告書							
副書名	蔵波地区宅地造成に伴う埋蔵文化財調査							
シリーズ名	袖ヶ浦市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 20 集							
編著者	西原崇浩 大賀 健 大越直樹 鈴木 徹 石山 啓							
編集機関	有限会社 勾玉工房 Mogi							
所在地	千葉県富里市久能 238 番地 100							
発行機関	袖ヶ浦市教育委員会							
所在地	千葉県袖ヶ浦市坂戸市場 1 番地 1							
発行年月日	西暦 2013 (平成 25 年) 2 月 28 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ちゅうろいせき 中六遺跡 (16)	ちばけんそでがうらしく 千葉県袖ヶ浦市蔵波字 ちゅうろ 中六 1259 番地 4・20, 1261 番地 7	1229	SG013 (16)	35° 26' 07"	140° 00' 20"	20120723 ～ 20120925	2,647 m ²	宅地造成
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中六遺跡 (16)	包蔵地	縄文時代 古墳時代	炉穴・土坑・ 陥穴 住居	縄文土器・石器 土師器・鉄製品・ 石製品	縄文時代早期包含層より多様な子母口式土器が検出された。同型式を考究するうえで有効な資料である。 古墳時代では前期のベット状施設を持つ住居が確認され、本遺跡の既往の調査とあわせ、古墳時代の居住域の様相が明らかになった。			

平成 25 年 2 月 22 日 印刷
平成 25 年 2 月 28 日 発行

袖ヶ浦市埋蔵文化財発掘調査報告書第 20 集

千葉県袖ヶ浦市 中六遺跡第 16 次発掘調査報告書

—蔵波地区宅地造成に伴う埋蔵文化財調査—

編集 有限会社 勾玉工房 Mogi
千葉県富里市久能 238 番地 100
発行 袖ヶ浦市教育委員会
千葉県袖ヶ浦市坂戸市場 1 番地 1
印刷 株式会社 エイティイー
千葉県八街市八街ほ 211